LIK@BTA.BG

BTA

BTA 文学・芸術・文化特集号　第60巻

2025年4月

文学・芸術・文化

大阪万博1970のブルガリア

ISSN 0324-0444 23004
9 770324 044004

ブルガリアと万国博覧会

BTA（ブルガリア通信社）の文学・芸術・文化誌である『LIK』は、
2025年に創刊60周年を迎える。創刊号は1965年1月8日に発行された。
何十年にもわたり、『LIK』は「世界への窓」と称され、
読者が世界とブルガリアの文化の最高峰に触れる手段となってきた。
約9年間の休刊期間を経て、雑誌は2022年3月に月刊誌として刊行を再開した。
現在の『LIK』は、現代的なビジュアルとテーマ性を備えた雑誌へと生まれ変わっている。

ЛИК

2025年4月

ブルガリア通信社（BTA）
による
特別編集版

総局長：
キリル・ヴァルチェフ

編集長：
ゲオルギ・ロザノフ

責任編集：
ヤニツァ・フリストヴァ

アシスタント編集：
レネタ・ゲオルギエヴァ

校正：
リリヤナ・ニコロヴァ

表紙デザイン：
レオノラ・コンスタンティノヴァ
シモナ・コレヴァ

写真：BTA（ブルガリア通信社）
、BSMEPA（中小企業促進庁）

デザイン・版下制作：
レオノラ・コンスタンティノヴァ

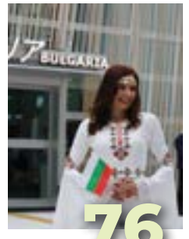
翻訳者：
ペトコ・スラヴォフ
小島 真美
ナコ・ステファノフ

ナショナルアートアカデミー学生による
デザイン：
テオドール・ミルチェフ
エリサヴェタ・ドラゴミロヴァ
ヴィクトリア・ディミトロヴァ

写真提供：
BTA PRESSPHOTOアーカイブ
PRESSPHOTO@BTA.BG
ISSN 0324-0444

連絡先：
ブルガリア通信社（BTA）
1124 SOFIA
TSARIGRADSKO SHOSE 49

広告：
MARKETING@BTA.BG / (+359) 2 926 2296



目次

ブルガリアと万国博覧会

2 アレコ・コンスタンティノフ － 旅する人 イヴェリナ・ガブロフスカ

3 『シカゴへ、そして戻って』より

10 2025年大阪万博におけるブルガリアの参加

18 ボイコ・タコフ氏（ブルガリア中小企業促進庁〈BSMEPA〉長官）：「2025年万博で、ブルガリアはあるべき場所に立つ：世界の強国と肩を並べて」

24 ブルガリア館コンセプトチーム：ブルガリア館を通過ことは、インスピレーションを与え、心を動かし、記憶に深残る個人的な体験なのです。

34 1970年の大阪万博におけるブルガリア

44 EXPO'70大阪万博におけるブルガリア館の音響・映像セクションを手がけた技術者イヴァン・ポプヨルダノフ氏：「大阪万博への参加を通じて、ブルガリアと日本の協力関係は新たな次元へと進化した」

48 EXPO'70でのブルガリア国営ラジオ児童合唱団の忘れがたい出演

54 ブルガリアのヨーグルト ― トラキア人から火星まで

56 ブルガリアのダマスクローズ

58 BTAのアーカイブより ブルガリアと日本の外交・文化関係

66 万国博覧会の歴史概略

76 BTAアーカイブを通して紹介される世界博覧会

115 ブルガリア通信社（BTA）のアーカイブ

万国博覧会を訪れたブルガリア人
— パリ（1889年）とシカゴ（1893年）—

アレコ・コンスタンティノフ –
旅する人

イヴェリナ・ガブロフスカ（スヴィシュトフ歴史博物館 館長）

アレコは遠き土地への旅を情熱的に愛していました。1889年、彼はパリ万国博覧会を訪れます。フランスの首都は彼を魅了しました。この博覧会を訪れた一部のブルガリアの政治家たちの間で、ブルガリアにも同様の博覧会を開こうという構想が芽生えます。アレコは1891年に「陽気なブルガリア」グループと共にプラハ万博に赴き、その旅の印象を『バイ・ガニョー、プラハ万博にて』に記しました。

19世紀末、博覧会は各国が自国の技術進歩、新発明、ファッションなどを披露する場でした。

アレコ・コンスタンティノフは、シカゴ万国博覧会のために海を渡った数少ないブルガリア人の一人です。彼は、スタンチョ・ラドスラヴォフ博士と親友フィラレット・ゴロヴァノフと共に新世界へと旅立ちました。ニューヨーク、ナイアガラの滝、シカゴ博覧会、ワシントン、フィラデルフィア、ボストンを訪れ、美術館、劇場、公園、図書館を見学しました。

アメリカから帰国後、アレコは紀行文『シカゴへ、そして戻って』を書き、1893年末に雑誌『ブルガリア評論』に発表されました。翌年、著者は写真付きの小冊子として同書を出版します。この本にはアメリカ旅行の印象が生き生きと描かれており、アレコは現代世界におけるブルガリアを見つめ、旅人としての情熱と好奇心、そしてブルガリアの事物を他国のそれと比較しようとする強い意志を持って旅をしています。西洋文明の発展した物質的水準と技術的成果に対する感嘆は、その豊かで整った社会における非人道的側面への懸念と表裏一体です。

この紀行文は、ブルガリア人が自らと祖国の居場所を見出すために世界を知り始めた、ブルガリアの精神的発展の一時期を映し出しています。その作家の視点は、ナイアガラの壮大な美しさや文明が獲得したものに対する驚嘆から、そのような社会における人間の運命への恐れへと揺れ動いています。

シカゴからの絵葉書
写真：スヴィシュトフ歴史博物館

アレコ・コンスタンティノフ

『シカゴへ、そして戻って』より

アレコ・コンスタンティノフ
『シカゴへ、そして戻って』より

休む間もなく、僕たちは万博会場へ向かった。最初にブルガリア館にいるショポフ氏（我らが代表）を見つけるまでは、どこにも寄らずに進もうと決めていた。入場料は50セント。各州の華やかで立派なパビリオンがずらりと並ぶ道を通り抜け、少しでも近道しようと美術館のギャラリーを横切って、南米の展示エリアを通過し、水産館を通り抜け、政府館を迂回して、ついに「製造業と自由芸術の宮殿」と呼ばれる巨大な建物に到着した。プロウディフの博覧会に行ったことがある人なら、あの大きなパビリオンを思い出せるはずだ。なかなかの大きさだったよね？でもシカゴのこの製造業の宮殿は、そのブルガリア博覧会全体を丸ごと収められるだけでなく、我が国の第二の都市の住民全員と、その家財道具やら家畜までもが収容できそうな広さだった。建物のサイズは1687フィート×787フィート、つまり132万7669平方フィート（メートルで知りたければ計算してください。僕にはその暇がない）。建物は見るからにどっしりしていて、石灰で塗られている。両脇には列柱が並び、壁には装飾、屋根は鉄製アーチにガラスが張られていて、見た目もなかなか立派だ。その中に、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、その他いろんな国のパビリオンが何百もひしめいている。まさか、全部をひとつずつ説明してほしいって？僕が全部見られたかって？無理無理。僕らは「絶対に立ち止まらない」と誓っていたんだから。迷路のような会場で道に迷わないように、通路の真ん中をひたすら前へ進

アレコ・コンスタンティノフ（1863–1897）、ブルガリアの作家・公人
写真：ゾヤ・ペンコヴァ（BTA）

む。目の前に現れてくるのは、オーストリア、ドイツ、イギリス、フランス、ベルギー、ロシアのパビリオン。どれもこれも、見事な造り。しばらくすると、ムーア風の暗いアーチが続く列柱が現れ、まるでアルハンブラ宮殿のような雰囲気だ。あるところで、見慣れた三色旗が目に入り、「おっ、ブルガリアか？」と駆け寄ってみると、なんとそれはメキシコのパビリオンだった。さらに進むと日本、中国、ペルシャの展示を通り過ぎ、狭くて暗い小道の上にトルコの旗がぶら下がっているのをくぐり、ついに小さな出店のような場所に到着。そこになびいていたのが、僕たちのブルガリアの三色旗（室内なので風がないから、正直に言うとなびいてはなかった）。この小さなお店の正面には、美しく飾られたバラ油のショーケースが2つ。中央の長いガラス棚には、ヴラツァ地方の布がずらりと並んでいる。よく見ると、その合間に液体の入ったボトルが数本。気になる人がいれば、あれは我が国自慢のワインとラキヤ（蒸留酒）だと教えてくれる。店内はカーペットや民族衣装の断片で、なかなか愛らしく装飾されている。ソフィアのイヴァン・ブルハ商会が提供したブルガリア製の家具も展示されていた。奥の右手には、電灯の光があまり届かないガラス棚があって、そこにタバコと巻きタバコの箱がぎっしり詰め込まれていた。訪問者はそれを目で見るというより、匂いで気づくことだろう。そして、農村の花嫁衣装を着た蝋人形、ショプ地方の男の蝋人形、軍服の少佐を模した蝋人形が見える。ショポフ氏の机の上にはブルガリアの地図がかかっていた。

この地図がなかったら、好奇

心旺盛なアメリカ女性たちは、バラ油の産地がどこかなんてまったく想像できなかっただろう。ショポフ氏は実に親切で、いつも地図を使って地理の授業をしている。授業はイスタンブールから始まり、エディルネを経てブルガリアの首都へ。杖で国境をなぞって、最終的には「地上の楽園」と彼が改名していたバラの谷へと至る。好奇心に燃えているアメリカ女性たちは、彼の口元に目を奪われ、「Oh, yes! Oh, yes, all right!」と何度も繰り返していた。

（…）

ショポフ氏は、僕たちに本当に親切にしてくれた。会場で見どころになっている場所をざっくり教えてくれただけでなく、Midway Plaisance 全体を案内してくれて、しかもトルコ村では昼食までごちそうしてくれた。でも、皆さんはMidway Plaisanceって何かご存じですか？あれはですね、万博の「番外編」とも言える、全長約3キロ（たぶん…間違ってたらごめん!）の巨大な見本市。全世界を見学できる場所なんです。世界中のあらゆる民族と文化がここに集まっていて、アメリカ人たちの一番のお気に入りスポット。朝から夜の11時まで、閉場の時間まで、地球のあちこちから来た人々でぎゅうぎゅう。入口を入るとすぐに、長一い通りが見えて、両脇にはあらゆる種類の興味深い展示、アトラクション、世界中の「村」がずらっと並んでいる。音楽、叫び声、太鼓、ズルナ、タンバリン、シンバル、ターバンにシルワール（ふわっとしたズボン）、シルクハット、クリノリン、フスタネラ（ギリシャの民族衣装）、武具の帯、アメリカ人、黒人、ヨーロッパ人、中国人、日本人、ダホメ人、島国の民、ラップランド人、そしてなんとソフィア出身のアイヴァジヤン氏までトルコ・ムーア風の装飾が施された小屋で商売をしている。あ、ちょっと待って。Midway Plaisanceを本格的に探検する前に、まずはそのアイヴァジヤン氏の小屋に立ち寄ろう。そこにはヨヴチェフ氏もいて、彼はアメリカ人の趣味をよく知っていて、英語も堪能。それでアイヴァジヤン氏の商売を手伝っていて、「Bulgarian Curiosities（ブルガリアの珍品）」という看板の下で、ありとあらゆるものを売っている。小屋の前には、ショプ地方の男女の民族衣装を着たマネキンが並べられていて、入口の左右には古今の硬貨や切手、ポストカードが陳列されている。小屋の他の二面も開け放たれていて、そこには彼が何年もかけて村の女性たちから買い集めたありとあらゆるもの：刺繍入りのタオル、ハンカチ、靴下、革靴、イヤリング、腰巻きのバックル、指輪、その他百種類くらいの飾り、が所狭しと並んでいた。小屋の中はカーペットで飾られ、壁にはバグパイプ、カヴァル（縦笛）、タンブラ、水筒、角、瓶、財布などが掛かっている。奥には、花嫁衣装に身を包み、金属の装飾やコインで武装した蝋人形が、髪の毛で顔を覆い、大きなツゲの扇子を頭にのせて立っている。その人形の両脇には、ブルガリア公、首相、そして軍事大臣の肖像画が掛けられていた。

（…）

アイヴァジヤン氏のパビリオンの真向かいには、「40カ国の美女たち」という看板のかかった小屋があった。入口の前では、舞台衣装をまとった二人の楽士が、観客を呼び込んでいる。美の祭典を見逃すな、と言わんばかりだ。僕たちは一人25セントを払って中に入った。そこは大きなサロンで、周囲にはステージ状の高台が作られ、その上に小さなテーブルが並び、それぞれの席に「美女」が一人ずつ座っている。正面の奥には、豪華な天蓋つきの装飾が施された玉座があり、そこには金色の椅子に鎮座するファトメという名の「美の女王」が、侍女たちに囲まれていた。いやぁ、確かにファトメは美しかった。でも僕としては、彼女の侍女のひとりのほうが好みだったかな。会場には、日本人の美女、黒人の美女（グッドラック!）、そしてフィラレットがロシア美女に「ズドローヴォ、マートゥシュカ（おねえさん、こんにちは）」と話しかけてみたりしていた。だが彼女はキョトンとした顔をしていて、まったく通じていない様子。まあ、どこの国から連れてこられたのか、想像もつかない。そこを後にして、さらにMidway Plaisanceを進む。左側では「コロラドの金鉱」が見られるという。右側では「エレクトリック・シアター」があるらしい。どれにしようかな。じゃ、コロラドだ！その「金鉱」は、巨大な鉱山の内部構造をミニチュアで再現したもので、仕組みもとても凝っていた。小さな労働者たちが坑道で採掘し、鉱石をトロッコに積み込み、それをまた別の作業員が大釜に移して地上に運び出す。エレベーターは上下し続け、鉱山の上には工場が建ち、そこに向かって小さな列車が走り回っている。横ではアメリカ人が喉をからして説明しているが、正直、何を言ってるのかはよく分からない。なので、早々に次へ。左手では「潜水士」の展示、右手では「ガラス製品の製造実演」があるというので、今度はそっちに行ってみることにした。

会場に入ると、周囲をギャラリーが囲み、中央には巨大な炉があり、そこではドロドロに溶けた赤オレンジ色のガラスの塊が熱を放っていた。職人たちはその溶けたガラスを、長い金属パイプの先につけて取り出し、直径5センチほどの溶融した球体にして、それを息で膨らませて成形する。まるで溶けた赤い蝋のようだった。一人がそれを炉に再び突っ込み、ガラスを柔らかくし、別の職人がそれを鉄の台に移し、もう一人が金属棒を差し込んで転がしていくと、球体が円筒形になっていく。これがグラスの原型。その後、円筒の底を切り落とし、装飾を施す部門に回される。僕たちの目の前で、何十ものグラスや花瓶が作られていった。ギャラリーの上の階には、さらに面白いものがあった。なんと、炎の上で極細のガラス繊維を引き出し、それを糸巻きに巻き取って、織機にかけて、ガラスの生地を織っていたのだ。この布には色とりどりのガラス糸で模様が施され、それでハンカチ、クッション、スリッパ、敷物、その他の装飾品まで作っていた。中には、ガラスのドレスを着た蝋人形まであった。会場を出ると、右手では調教されたトラやライオンのショー、左手ではアイルランドの村の再現展示があるという。うーん…でも、せっかくだから日本の市場を見に行こう。いやあ、日本人、すごい進んでるよ！「東洋のイギリス人」と呼ばれるのも、伊達じゃない。活気があって、働き者で、知的な国民だ。まるで、「世界を驚かせてやろう」って一致団結して、このシカゴ万博に乗り込んできたかのようだ。実際、その通りだった。展示会場には、彼らがいないセクションなんて存在しない。どこへ行っても、欧州の列強に肩を並べるような立派なパビリオンがあって、そこに「JAPAN」と堂々と書かれている。

それに彼ら、日本の製品でしっかり勝負している。ブルガリアのように、スタニマカのラキヤやボルドーのコニャックの香料、プラハの瓶やウィーンのラベルなんて、寄せ集め展示なんかしてない。あの広大なパビリオンを満たしているのは、まぎれもなく日本の産業が生み出した本物の品々。彼らの磁器は、アメリカの主要都市や西欧の首都で倉庫を構えているし、金属製品、絹織物、金刺繍、麦わら細工、薬品、米、茶といった商品が、アメリカやヨーロッパのあちこちの店に溢れている。冗談抜きで、日本人は本気だ。着実に前進している。さて、会場を出ると、左ではサモアの島民による劇場、右ではジャワの村がそのまま住人ごと再現されているという。せっかくだし、どっちも覗いてみよう。その近くでは、南太平洋の島々の人々が展示されていた（…っていうか、サモアってどこだっけ？まったく思い出せないし、地図も持ってない）。パビリオンのすぐそばには、平らな屋根の小屋がくっついていて、それがチケット売り場。前にいたアメリカ人スタッフは、声がかれるまで叫んでいて、「この劇場を見逃したら、一生後悔するぞ！」って。誇張かと思いきや、どうやらこの劇場がMidway Plaisanceの「心臓」なのだそうだ。つまり「ここを見ずして、シカゴに来たとは言えない！」ってやつ。

（…）

せめてざっとでも、展示会の主要なパビリオンを見て回ろうじゃないか。

Midway Plaisance を出たところで、目の前に現れたのが「ウーマンズ・ビルディング」、女性による労働や創造の展示館だ。その建築を手がけたのは、ボストン出身の若い女性建築家だという。アメリカ人はこの建物をやたら誇らしげに紹介していたが、正直、僕には「どこがそんなにすごいの？」という感じだった。中央ホールの入口に立つと、まず目に入るのは彫刻や絵画の展示。でもそれらは、どれもいたって普通。特に驚くような作品ではなかった。その次に目に飛び込んできたのは、女性の服飾の歴史：ブドウの葉っぱの時代から、超ゴージャスで破産しそうなドレスに至るまで。裁縫や洋裁の技術を示す作品も山ほどあり、子ども向けの道具やおもちゃも展示されていた。さらに、繊細な手工芸品の数々：裕福な生活の中で、時間や労力を気にせずにつくられた作品が並んでいる。上階のギャラリーには、生徒の作品かと思うような素朴なスケッチがたくさん。まあ、それなりに誇れる出来ではあるが、「世界の女性代表」って言うには少し力不足かもしれない。この建物の中には、女性による国際会議が行われるサロンも設けられていて、政治的な意味では進歩が見て取れる。でも、個人的に一番はっきり「女性の進歩だな」と感じたのは、文学の展示だった。

僕の観察では、この建物を訪れているのは圧倒的に女性が多く、男性はほんのわずかだった。

さて、次は園芸館へ。僕たちは植物学者でもなければ園芸家でもないから、特に長居はせず、端から端まで歩いて、左右の展示をざっと見ていくにとどめた。でも、それだけでも世界中から集まった珍しい植物を十分に楽しむことができた。中でも僕の目を引いたのは、オーストラリアから来た植物たち。今まで絵

1893年のシカゴ万博に登場した巨大観覧車
写真：スヴィシュトフ歴史博物館

でしか見たことがなかったものが、実物として目の前にあるのだから、初めて見たはずなのに、なんだか前から知っていたような不思議な気分になる。ここの果物と野菜の大きさときたら、すごいけど、この面ではカリフォルニアのパビリオンは予想をはるかに超えていた。そのことについては後で詳しく話そう。この園芸館の中央には、巨大なガラスのドームがあり、その真下の円形ホールには、大きな岩を囲むようにして、熱帯の巨大植物が植えられている。その高さときたら、もう少しでドームの天井に届きそうなくらい。その岩の内部には洞窟が掘られていて、壁には何百万個という水晶が埋め込まれている。そこに電灯の光が反射して、まばゆいばかりの輝きが広がっている。いや、本当に……想像してみてほしい。この光の乱反射を。ここではお土産として、水晶やそれを使った装飾品も販売されていた。

次に僕たちが入ったのは、交通館だった。「館」と言っても、想像をプロウディフの博覧会の建物に当てはめるのはやめてほしい。なぜならこの建物はなんと24万5760平方フィートもある。さっきの園芸館も同じくらいの規模だった。それでいて、見た目もただの大きな箱じゃない。堂々としたファサードを持っていて、建築家なら入口の装飾を見るだけでもしばらく立ち尽くしてしまいそうなほど見事な作りだった。中に入ると、人類がこれまで使ってきたあらゆる交通手段が展示されていた。原始的なガタガタの荷車から始まって、最新の蒸気機関車、ワグナー製の豪華列車、プルマンの寝台車など、豪華で快適さを極めた乗り物たちがずらり。さらには、先史時代の丸太船から、巨大な客船や軍艦の模型まで。路面電車、馬車、電動車、オムニバス、駅馬車、フィアクル、クーペ、ランドー、カブリオレ：あらゆるスタイルとサイズの荷車や消防車までが巨大な建物を埋め尽くしていた。上階のギャラリーには、自転車や船の模型が並べられていて、小さな汽車が円形のレールの上をグルグル走っているのも見られた。さらに驚いたのは、片側だけにレールがついている新型の列車の模型まであったこと。最初にアメリカで作られた機関車なんて、近くに並んでいた巨大な最新型機関車や、豪華な列車と比べると、まるで子どものおもちゃのようだった。その中には、くるみ材、絹、ビロード、クリスタル、電灯を絶妙に組み合わせた車内装飾まであって、どんなに洗練された趣味の持ち主でも満足すること間違いなし。

次に鉱業館にも立ち寄ったけれど、僕たちは地質学者じゃないので、ざっと眺めただけで済ませた。もしズラタルスキ氏が一緒だったら、洪積層がどうとか、沖積層がどうとか、色々と解説してくれたかもしれないけどね。とはいえ、石炭の巨大なオベリスクや、ほぼ透明な塩の彫刻、鉄・銅・銀・金の鉱石、そして大理石や花崗岩、宝石の数々を見るのは面白かった。まあ、それだけ。

でも、「電気の宮殿」となると話は別！たとえ牛をここに放り込んでも、興奮して暴れ出すんじゃないかってくらい、すさまじい展示だった。建物の面積は23万8050平方フィートで、夜になると、その内部はまるで夢の宮殿のように輝き出す。不思議なことに、あれだけ印象的だったはずなのに、いざ何かひとつ具体的に思い出そうとすると、これがまったく出てこない。今、こうしてペンを手にして、何か五つでも展示品を挙げてみようと思っても、無理。それくらい僕の脳はあの時、完全に圧倒されていたんだ。電気の光と壮麗さに完全に包まれて、すべての印象が一つの夢のような、まるで妖精の国のようなパノラマに溶けてしまった。色と光の絶え間ない変化が目をくらませて、僕は一つひとつの展示に意識を集中することができなかったのだ。建物全体は何万個という電球で飾られ、その光が様々な形に配置されていて、分単位でパターンが切り替わっていく。光と闇のコントラスト、虹のような色彩、そしてその無限の組み合わせが織りなす空間に、僕は現実を忘れかけた。『千夜一夜物語』の宮殿なんて、これに比べれば色あせて見える。東洋の詩人たちがどれだけ想像力を働かせたとしても、文明社会の冷静な頭脳が実現したこの電気の魔法の高さには、到底届かないだろう。

電気の宮殿の正面玄関を出て、視線を遠くに向けると、1キロほど先に美術館のギャラリーが見え、その先には、ラグーンの左岸に沿って、イリノイ州のパビリオン、ウーマンズ・ビルディング、園芸館、交通館、鉱業館と、立派な建物がずらりと並んでいる。右岸側には、アメリカ各州や南アメリカ諸国の豪華なパビリオンが何百と並び、その中に水産館、政府館、そして製造業の宮殿がそびえていた。いや、この「宮殿」、とても「大きい」なんてレベルじゃない。建物はおよそ半キロも横に伸びていて、そのまま北の運河沿いに続き、運河の端まで届いていた。

そして僕たちは、ついに「コロンブスの噴水」の前へ。それはまるで彫刻そのものが物語を語っているような、大理石でできた美しい彫像のグループだった。中央にはコロンブスが座り、船をかたどった台座の上でニンフたちに囲まれている。ある者は彼に月桂冠を授け、ある者は彼の偉業をトランペットで讃え、またある者はオールを漕いで彼の船を進めている。台座の下には、流れ落ちる水が階段をさらさらと流れている。噴水の両側には水中に沈められた電気噴水があって、それが周囲の池にきらめきを与えていた。池の向こう岸には、金色に輝く巨大な「共和国の像」がそびえている。僕たちの背後には、エレガントな「管理館」がある。その建物のデザインは、パリ万博で見た同種の建物を思わせるけれど、装飾過剰で華美だったパリに比べ、こちらはより大きく、よりどっしりしていて、そして何よりも、そのシンプルで上品な美しさが見る者の目を引きつける。パリの建物がまるで着飾った気まぐれなコケティッシュな女の子のようだったとすれば、シカゴの管理館は、威厳と落ち着きを備えたクラシックな美女だ。僕たちの左手には電気の宮殿、右手には機械の宮殿があり、正面には池が広がっている。その池の右岸には農業館、左岸には製造業館のファサードが並んでいた。池の向こうには美しいペリスタイル（柱廊）があり、その両端には対になった建物が見えた：一方は音楽ホール、もう一方はカジノだ。その奥はもう、ミシガン湖のほとり。機械館と農業館の間には南運河が流れ、その先には巨大なオベリスクがそびえ立っていた。この一帯の景観は、あまりにも荘厳で壮麗で、僕としては正直なところ、かつてのパリ万博の光景を思い出しても、エッフェル塔を除いては、それらはただの漆喰塗りの小屋にしか見えなかった。そして何より、夜になると、光がすべてを変える。すべての巨大建築が電灯で美しく照らされ、特に管理館の壁とドームが電球の花輪で飾られて、ま

さに夢の宮殿のようだった。池の周囲も同じようにライトアップされ、電気噴水が左右から放たれ、その光に誘われるように、電動ボートやヴェネツィア風のゴンドラが集まってくる。その光景が水面に映ると、金色の湖のような幻想的な世界が目の前に現れる。そのとき、僕たちは静かに池の中央で電動ボートを止め、ゴンドラに囲まれながら、電気噴水とまわりの輝きを眺めていた。ふと、視線を南運河の方へ向けると、オベリスクの頂上のすぐ上に、満月がひょっこり顔を出していた。…でも、その月があまりにもしょぼく見えたのだ。なんて貧相で、なんて頼りない姿なんだろう、と笑えてきたし、なんだか可哀そうにもなった。僕たちの国では、あの月は詩人たちにインスピレーションを与え、愛の告白の見守り役でもあるのに……今や電球の海にすっかり負けてしまっていた。

展示会場の南東の端、ミシガン湖の岸辺近くには、あの「サンタ・マリア号」のレプリカが停泊していた。そう、コロンブスがアメリカ大陸を発見したときに乗っていた、あの船だ。僕たちは中に入って、文字どおり食い入るようにして隅々まで見て回った。操舵室の一室には、コロンブスが実際に過ごしていた部屋があって、そこには彼のベッド、椅子、航海図を描いたであろう机まで置かれていた。その質素な小部屋の雰囲気は、まるで古い修道院の一室のようで、壁にはちゃんとイコンも飾られていた。このサンタ・マリア号は、当時の実物を忠実に再現したレプリカだった。そしてそのすぐそばには、「ラ・ラビダ修道院」もまた、細部に至るまで忠実に再現されて建てられていた。中には「コロンブス博物館」が設けられていて、訪れる者は、コロンブスの肖像画や、彼が住んでいた場所、彼の人生とアメリカ大陸発見に関わる様々な場面の絵画、同行者たちの肖像、そして彼らの描いた空想的な新世界の風刺画まで見ることができた。さらには、コロンブス自身が描いた地図や、彼の時代の書籍、貨幣、衣装、生活用品が並び、当時のイコンまで展示されていた（現代の僕たちのイコンと見分けがつかないほど似たスタイル）。そして、ある一室のとても簡素な箱の中には、なんと、クリストファー・コロンブスの遺灰が納められていた。

偉大なる冒険者、その天才と意志の強さによって、新大陸の発見が実現され、数えきれない人々に生きる場と未来が与えられた。その彼の「聖域」が、静かに、しかし厳かに人々を迎えている。…と、ここまでだったら、本当に心を打たれる場面だった。しかし、その聖なる場所からほんの数歩のところに建てられていたのが、「クルップ館」（あのドイツの兵器メーカーによる展示館）だった。そこには、人類の進歩をあざ笑うかのように、戦争と破壊のための巨大な大砲や兵器がずらりと並んでいた。進歩の結晶とも言えるコロンブスの偉業と、数百万の命を奪う道具が、たった数十メートルの距離で並んでいるなんて…！クルップはこの兵器展示で、まさかの「発明の功績」としてメダルを期待しているというのだ。でも僕はこう思った：もし、この恐ろしい兵器たちを実際に発動したとしたら、数時間のうちに、コロンブス博物館のあの輝かしい建物群も、美しい展示物も、すべてが塵と化していただろう。なんという皮肉！

美術館のギャラリーの裏手には、アメリカ各州それぞれのパビリオンが並んでいた。アメリカ人は、自分の出身州のパビリオンに行けば、立派な応接室でくつろいだり、新聞を読んだり、手紙を書いたり、ピアノを弾いたり、まるで自宅のように過ごすことができる。ニューヨーク州のパビリオンの上階にあるサロンなんて、僕にはヴェルサイユ宮殿のサロンよりも上品で豪華に見えた。ここで「パビリオン」といっても、ブルガリアの首都ソフィアがプロウディフ博覧会に出した、あの（小さな）建物を思い浮かべてはいけない。たとえば、イリノイ州のパビリオンは72,000平方フィートもの広さがあって、その上にはとてつもないドームが建っている。あまりに広大で、ソフィア中の教会のドームが中でガロップダンスを踊れるくらいだ。ペンシルベニア州のパビリオンには、1776年にアメリカ独立宣言が読み上げられた時に鳴らされた「自由の鐘」まで展示されていた。

そして、カリフォルニア州のパビリオン。これがまた、外観こそ古くてごつい修道院のような建物だけれど、中に入るとまるで「地上の楽園」！今までどこの国でも見たことがないような、大きくて美しい果物や野菜がずらりと並んでいた。オレンジで作られた見事なピラミッドの横に、あらゆる種類の果実が溢れていた。そこで僕は、梨やリンゴを見た：大きさでいえば、あなたの頭くらい（思い浮かべる唯一の単位）！以前、友人に聞かれたことがある。「アメリカにも唐辛子ってあるのか？」って。あるさ。しかも、僕たちのリャスコヴォ村の農夫が見たら、首を傾げて「なんだこれは…」と呟くほどの巨大さ。ただし、ぶどうはあまり好みに合わなかったけれど、カリフォルニア産のワインは意外と良かった。あんなぶどうでこの品質を出せるなら、ブルガリアのぶどうを使ったら一体どんなすごいワインができるんだろう？実は僕は以前、ブルガリアの園芸は世界一じゃないかと密かに思っていたんだ。玉ねぎ、唐辛子、キャベツ、これらで僕たちに敵う国なんてないと。でも、カリフォルニアのパビリオンに入って、それは幻想だったと痛感した。玉ねぎも、唐辛子も、キャベツも、トマトも、全部巨大。おそらく一玉のトマトで3キロくらいあるんじゃないか？ジャガイモもキュウリも、僕たちのとは比べものにならないほどの大きさ。ああ、それにイチゴ！握りこぶしほどもあるイチゴを見て、僕は目を疑った。バナナもパイナップルも立派なものだった。これでは、僕たちのキュステンディル地方が果物で勝負しても、カリフォルニアには太刀打ちできない（金の産出量でもかなわないだろうね）。ところで、僕たちの代表であるショポフ氏は、「ブルガリアのワイン、アメリカに売れるかもしれないよ」と言っていた。フランスのワインはまだ主流だけど、カリフォルニア産がじわじわと市場を奪っている。僕たちのも、売り方次第で可能性はあるかもしれない。

それから、面白い話をもう一つ。アメリカのある商人が、ブルガリアのヴラツァで織られた布を見て、すごく気に入ったらしい。「これはカーテンにぴったりだ！」って。彼が言うには、アメリカの女性たちは、もう自国の製品にも、リヨンのシルクにも飽きてしまっていて、何か新鮮で独自性のあるものを求めているのだそうだ。そしてこう言った。「この布なら売れる。できれば2〜3千メートル、まとめて注文したいんだけど。」それを聞いたショポフ氏は、僕に「どう思う？　どこでそんな大量の注文をこなせそうかな？」と尋ねた。僕は答えた。「ヴラツァならやれるかもしれませんね。でも、そんなに均一な品質で、あれだけの量をすぐに作れるかどうかはわからない…」「じゃあ、サモコフやカロフェルの修道院のシスターたちに相談してみようか！」と…

シカゴ万博におけるブルガリア館
写真：スヴィシュトフ歴史博物館

イヴァン・ラザロフ（BTA特派員）

2025年大阪万博におけるブルガリアの参加

2025年の大阪万博におけるブルガリアの参加の様子は、イベントの公式開幕に際して派遣されたBTA特派員イヴァン・ラザロフのレポートを通じて追うことができます。

彼は、万博の初日からブルガリア館への強い関心を報じるだけでなく、ブルガリアのこの国際舞台への参加を支える主要な関係者たちとのインタビューも行っています。

雑誌『LIK』では、彼の現地レポートのハイライトを掲載しています。

初日にできた来場者の行列

4月13日より、大阪・関西万博（EXPO　2025）のブルガリア館が一般公開され、初日の来場者を迎えています。会場の門が開かれると同時に、ブルガリア館には来場者から非情に高い関心が寄せられパビリオンは歓喜にあふれています。

このパビリオンでは、過去・現在・未来が交錯し、ブルガリアの歴史や伝統、文化的な遺産と、革新的でインタラクティブな技術が融合されています。ブルガリアは、世界の地図上で将来性のある注目すべき国として強く印象づけられています。

今年の万博は、徳仁天皇陛下と皇后雅子陛下のご臨席のもと、4月13日（土）に日本で正式に開幕しました。

会場となっているのは人工島・夢洲で、その中心を囲むように「大屋根リング」と呼ばれる全長2km・高さ20mの木造構造物が設置されています。これは世界最大規模の木造建築物とされ、万博のコンセプトである「多様性と調和」を象徴しています。

この6か月間（10月13日まで）、160以上の国・地域・国際機関がそれぞれのパビリオンで、「いのち輝く未来社会のデザイン」という共通テーマに基づくビジョンを披露します。

主催者は、会期中に延べ2,800万人の来場者を見込んでいます。

大阪、2025年4月13日
ブルガリア館が初めての来場者を迎え、早くも大きな関心を集めている。
写真：イヴァン・ラザロフ、BTA

ブルガリア館の公式オープニング

ブルガリア館は、万博の初日である4月13日に公式にオープンしました。オープニングセレモニーでは、ブルガリア副首相 兼 イノベーション・成長担当大臣のトミスラフ・ドンチェフ氏、駐日ブルガリア大使のマリエタ・アラバジエヴァ氏、中小企業促進庁（BSMEPA）代表のボイコ・タコフ博士がテープカットに参加しました。

また、EXPOの象徴的な大屋根リングを設計した建築家・藤本壮介氏は、初日にブルガリア館を称賛。SNS「X（旧Twitter）」に「Simple and beautiful（シンプルで美しい）」と投稿し、ブルガリア館の写真を添えて賛辞を送りました。

ブルガリア館の施工は、日本最大手の建設会社の一つであるDAIWA LEASE CO., LTDが担当し、外観設計とレンダリングは小林博人が率いる建築事務所Kobayashi and Maki Design Workshop（KMDW）が手がけました。

建築家の小林博人氏（慶應義塾大学教授）も、オープニングに出席しました。

2025年4月13日 大阪
中小企業促進庁長官ボイコ・タコフ博士、副首相トミスラフ・ドンチェフ、駐日ブルガリア大使マリエタ・アラバジエヴァ、ブルガリア館設計者ヒロト・コバヤシ教授による開館テープカット
写真：イヴァン・ラザロフ（BTA）

副首相トミスラフ・ドンチェフ：
ブルガリアが大阪に堂々と再来

「ブルガリアは大阪に堂々と再来し、ブルガリアのパビリオンは大きな関心を集めています」と、ブルガリア副首相兼イノベーション・成長担当大臣のトミスラフ・ドンチェフ氏はBTA（ブルガリア通信社）に語りました。

「雨にもかかわらず、長蛇の列ができており、これは二つのことを物語っています。まず第一に、日本におけるブルガリアのイメージは、ヨーグルトやローズオイルのような素晴らしい製品と結び付けられているということです。次に、それは建築家コバヤシ氏、そして中小企業促進庁（BSMEPA）の支援を受けたブルガリアチームの見事な仕事ぶりを示しています。これは商業展示ではなく、大きな問いを投げかける場です。私たちは自然と共生することができるのか？子どもたちの未来を破壊せずに生きられるのか？各国がこれらの問いへの答えを提示する機会を持っているのです」とドンチェフ氏は強調します。

副首相は、ブルガリア館の準備に関わったすべてのチームが見事にその任務を果たしたと評価しています。

彼によれば、ブルガリア館は「エレガントで洗練された」方法で、ブルガリアの新しいイメージを提示しているとのこと。「ブルガリアはヨーグルトやローズオイルのようなユニークな製品の国であるだけでなく、それを超える経済と産業の実力を示す必要があります」と述べました。

日本の起業家たちの関心が、ブルガリアが正しい道を進んでいることを示していると語りました。

大阪、2025年4月13日
ブルガリア館の設計者小林博人氏とトミスラフ・ドンチェフ副首相
写真：イヴァン・ラザロフ、BTA

駐日大使マリエタ・アラバジエヴァ：
ブルガリア館は私たちの歴史と現代社会における立ち位置を示している

大阪、2025年4月13日
駐日ブルガリア大使マリエタ・アラバジエヴァ氏
写真：イヴァン・ラザロフ、BTA

EXPO-2025のブルガリア館は、私たちの歴史と現代のデジタル社会における立ち位置を示しています」と、ブルガリア駐日大使のマリエタ・アラバジエヴァ氏はBTAに語ります。

「ブルガリア館では、映像や新しい技術を通じて、私たちの国の歴史を紹介します。ブルガリアの文化、伝統、歴史が響き渡り、ブルガリアがイノベーションや人工知能を生み出す国として、現代のデジタル世界にどのように存在しているかも示されます」と述べました。

「すべてを明かしたくはありませんが、ブルガリア館の内部では、来場者が自分にとって現代において大切だと感じる価値観を選ぶことができます。信仰、希望、協力、愛、感謝といった価値観です。ブルガリア館の基盤は、ブルガリアの乳酸菌「ラクトバチルス・ブルガリクス」の有名な物語にあります。ブルガリアのヨーグルトは、1970年の大阪万博で初めて紹介されました。そして55年後、ブルガリアは再び大阪に戻ってきたのです。

今回の展示では、細菌に関連するこのストーリーに加え、「ラクトちゃん」の物語を通じて、社会のすべての要素がどうつながり合い、協力して課題を克服するかを、日本人にも親しみやすい形で表現します。それは、ひとつの生物体の中の細菌たちが協調して機能するように、社会においても協力が大切であることを伝えています」と彼女は語りました。

駐日大使は、ブルガリア館は、1年以上にわたり日本とブルガリア両国の政府、中小企業促進庁、そして駐日ブルガリア大使館の三者による共同作業の成果であることを強調しました

ボイコ・タコフ（中小企業促進庁長官）：
私たちのビジョンを日本と世界に伝える機会

大阪、2025年4月15日
中小企業促進庁（BSMEPA）長官ボイコ・タコフ博士
写真：イヴァン・ラザロフ、BTA

「EXPO-2025の準備は大きな挑戦でしたが、私たちの参加は、日本および世界に対してブルガリアのビジョンを提示するものです」と中小企業促進庁（BSMEPA）長官のボイコ・タコフ博士はBTAに語りました。

「初日に世界的に著名な建築家・藤本壮介氏から高い評価を受け、大変うれしく思っています。彼はブルガリア館を「シンプルで美しい」と評しました。まさに私たちが目指したパビリオンです。大きなガラスのファサードと開放的なデザインは、日本文化にも自然に溶け込み、「自然との共進化」というテーマにふさわしいものです」と語りました。

来場者からのフィードバックも非常に好意的であり、良いアイデアとその実現が評価されている証であると指摘しました。

「命を救うというテーマ、自然と共に進化するという考え、そしてバランスを求める姿勢：こうしたメッセージが詰まっています。微生物の世界を例に取れば、細菌たちは社会のように、危機に直面すると協力して乗り越えるのです。私たちの毎日の選択も未来に影響を与えるという考えを伝えています」とタコフ氏は語りました。

また、ブルガリア館の準備は非常に集中的かつ困難なプロセスであったことを認め、外観から内部コンセプトまで携わったすべてのチームに感謝を述べました。

ゲオルギ・コストフ（ブルガリア館ディレクター）：

ブルガリアは日本で最も認知されている国のひとつ

大阪、2025年4月13日
ブルガリア館館長ゲオルギ・コストフ氏
写真：イヴァン・ラザロフ、BTA

「ヨーグルト、バラ、スポーツのおかげで、ブルガリアは日本で最も認知されている国の一つです」と、EXPO 2025ブルガリア館のディレクター、ゲオルギ・コストフ氏はBTAに語りました。

彼は、今年の万博への参加と、ブルガリア館のコンセプトに対する来場者の好反応が、この認知度をさらに確固たるものにしていると述べました。

「ブルガリア館は、日本人および外国人来場者の間で非常に好評です。初日から多くのブルガリア人来場者も訪れました」と語りました。

「私たちのパビリオンは、最先端のデジタル技術を駆使しながら、ブルガリアの伝統を紹介する空間です。伝統とテクノロジー、この二つの要素が巧みに織り交ぜられています。私たちは自然と共に進化し、次の世代に持続可能な未来を残すことの大切さを伝えたいのです」と、ブルガリア館のコンセプトを要約しました。

「デジタル技術のおかげで、来場者は複数のスクリーンでオーディオビジュアルな体験を楽しむことができます。ブルガリアと日本の関係の歴史、そしてブルガリアの先端産業や革新的企業についても知ることができます」とコストフ氏は述べました。

「来場者はこのパビリオンのコンセプトを高く評価しています。「今」の選択が未来に響くということ、すべての行動に意味があるというメッセージを感じ取ってくれているようです」と締めくくりました。

大阪、2025年4月13日
ブルガリア館の来場者たちがマスコット「ラクトちゃん」に喜ぶ様子
写真：イヴァン・ラザロフ、BTA

デシスラヴァ・ペトコヴァ（日本学研究者）：

ブルガリア館は伝統と現代を融合させている

大阪、2025年4月15日
日本学を学ぶ学生であり、ブルガリア館の代表の一人であるデシスラヴァ・ペトコヴァ氏
写真：イヴァン・ラザロフ、BTA

EXPO-2025のブルガリア館は、伝統と現代を融合させています。これは日本文化にも深く根付いた価値観であり、日本人に非常に好まれ、尊重されています」と、BTAの取材に対し、ブルガリア館の代表の一人であり、日本学を学ぶデシスラヴァ・ペトコヴァ氏は語りました。

「日本学の学生として大阪万博に参加し、ブルガリアを代表することは、私にとって唯一無二の機会です。EXPO 2025は非常に重要なイベントであり、『万博のオリンピック』とも言えるほどの規模です」と彼女は強調しました。

ペトコヴァ氏はソフィア大学「聖クリメント・オフリドスキ」で「日本学：社会と文化」の修士課程に在籍しており、日本文化への関心は数年前から始まったと語ります。

「EXPOはブルガリアと日本の両国にとって重要であり、両国の関係にとっても重要です。1970年の大阪万博では、ブルガリアが初めて『エリキサ』であるヨーグルトを紹介し、日本の一般市民だけでなく天皇陛下にも感銘を与えました。そして今、55年の時を経て、私たちはマスコットキャラクター『ラクトちゃん』を通じて、ブルガリアのヨーグルトを少し異なる視点から紹介する機会を得ました。

ラクトちゃんは来場者に喜ばれ、ブルガリア原産の乳酸菌『ラクトバチルス・ブルガリクス』の象徴です。日本の子どもたちのグループが『ブルガリア・ヨーグルト！』と叫んだのを聞いて、本当に嬉しく思いました」と彼女は話しました。

エリツァ・マリノフスカ（サイバーセキュリティ・コンサルタント）：
ブルガリア館は私たちの国のポテンシャルを示している

大阪、2025年4月14日
ブルガリア館の来場者エリツァ・マリノフスカ氏
写真：イヴァン・ラザロフ、BTA

ブルガリア館は私たちの国の可能性を明確に示しています」と、EXPO-2025を訪れたサイバーセキュリティ・コンサルタントのエリツァ・マリノフスカ氏はBTAに語りました。

「私は世界博覧会に来るのは初めてでしたが、ブルガリア館とそのチームには非常に感動しました」と、展示会2日目に訪れた後の印象を述べました。

「私はスロバキアからの友人たちと一緒に訪れましたが、彼らもブルガリアのポテンシャルに感銘を受けていました。展示の構成は素晴らしく、ゲーム性もありました。他のパビリオンでは見たことのないようなアプローチで、とても楽しく、素晴らしい体験でした。情報の選び方も非常に巧みで、ブルガリアの文化や伝統から始まり、次第にデジタル産業の発展に触れる流れでした」と語りました。

彼女によれば、ブルガリア館が発信するメッセージは「私たち自身の価値観を考え、未来をどのように改善すればいいか」だといいます。そして、「この展示を通じて、ブルガリアのことを世界に広めるきっかけになる」と付け加えました。

来場者の多くは、ブルガリアをヨーグルトと結びつけている

EXPO-2025大阪のブルガリア館に訪れた来場者たちは、ブルガリアを主にヨーグルトと結びつけて認識していることが、BTAのアンケート結果で明らかになりました。

その回答からは、このヨーグルトの鍵となる「ラクトバチルス・ブルガリクス」という菌についても知っており、それがブルガリアの名前に由来していることも理解している人たちもいるということが分かります。

「ブルガリアについてはヨーグルト以外に何も知りませんでしたが、ぜひ行ってみたいと思います」と、ある日本人来場者は語りました。また、ブルガリアと日本の伝統的な良好な関係や、その発展についての印象も述べました。

また別の来場者は、ブルガリアを「温かく迎えてくれる国」「ヨーロッパの大家族の一員」と表現しました。来場者が特に印象に残ったのは、オーディオ・ビジュアルによる情報提供とそのインタラクティブ性でした。

ある日本人来場者・マサトさんは、ブルガリア館のスタッフに「ドブル・デン（こんにちは）」とブルガリア語で挨拶し、彼らを驚かせました。彼は「スラブ世界研究所」のメンバーであり、ウクライナ語、ロシア語、そして少しのブルガリア語も話せると自己紹介し、学術的・現地調査や翻訳に関わっていると説明しました。彼は特に東欧諸国のパビリオンに強い関心を持っているとのことです。

写真：イヴァン・ラザロフ、BTA

インタビュー：デリャン・ペトリシュキ

ボイコ・タコフ氏（ブルガリア中小企業促進庁〈BSMEPA〉長官）：「2025年万博で、ブルガリアはあるべき場所に立つ：世界の強国と肩を並べて」

ブルガリアは、もはや脇役でいるべき国ではありません。とりわけ観光、投資、そして学術の分野において、私たちは影響力を持つ存在にならなければなりません。

ボイコ・タコフ
写真：フリスト・カサボフ、BTA

現在、ブルガリアの政治的状況は不安定ですが、それが2025年に日本・大阪で開催される万国博覧会への準備に影響を与えることはありませんでした。それは、国家機関のすべての関係者が、ブルガリアという国を世界の強国と同列だと自負を持って紹介するという使命感を共有していたからです。そう語るのは、インタビューに応じたボイコ・タコフ氏、ブルガリア中小企業促進庁（BSMEPA）の長官であり、過去3年間にわたって関係省庁による合同ワーキンググループの取りまとめ役を務めてきた人物です。今回の参加目的は、これまでにない最高レベルの国家的プレゼンテーションを実現し、ブルガリアを世界に印象づけることにあります。

ブルガリア館は、2025年大阪・関西万博でもっとも格式あるエリアに設置される予定であり、会場の主要エントランスのすぐそば、オランダ館やシンガポール館といった国々の近隣という、極めて戦略的なロケーションに位置づけられています。この世界博への参加を通じて、ブルガリアは過去の栄光を取り戻し、世界の投資家にとって再び注目すべき魅力的な投資先としての存在感を確立しようとしています。

また、ブルガリア館では、ブルガリアと日本の伝統的な友好関係も強調されます。両国が初めて深く交流を交わしたのは、55年前の1970年、やはり大阪で開催された万博においてでした。そして2025年、再びオオサカの地で、両国は新たな未来に向けて互いを再発見するのです。

タコフさん、イノベーションと成長省傘下の中小企業促進庁（BSMEPA）の長官として、政治的および制度的に不安定な時期に、しかも国家機関で頻繁に人事異動がある中で、あなたは省庁横断のワーキンググループの調整役を務められました。この不安定さは、たとえばユネスコの世界遺産委員会のセッションがソフィアで開催された際など、他の国際的なフォーラムの準備には影響を及ぼしました。そのような中で、ほぼ3年にわたって、どのようにして万博における国家出展の準備をスケジュール通りに進めることができたのですか？

イノベーションと成長省傘下の中小企業促進庁（BSMEPA）は、今回の万博におけるブルガリアの参加に向けて、非常に大きな業務をこなしてきました。政治情勢が不安定で先が読めない中でも、私たちはそうしたプロセスを抑え込み、管理することができたと思います。私は、どんな変化が起きたとしても、すべての国家機関（だけではありませんが）の関係者たちが、ブルガリアが世界の強国と並んで、万博で堂々としたプレゼンスを示すという機会に対して、使命感を持って取り組んでくれたと感じています。

最初の段階では、イノベーションと成長省の大臣が任命した副大臣が議長を務め、私、中小企業促進庁の長官が副議長を務めるワーキンググループが結成されました。グループのメンバーには、イノベーションと成長省、外務省、経済産業省、観光省、文化省、農業省、中小企業促進庁、ブルガリア投資庁、日・ブルガリア・ビジネス協会、ブルガリア建築家同盟、ブルガリア建築士会の専門家たちが名を連ねました。

その後、大阪・関西万博でのブルガリアのビジュアル表現に関するアイデア提案の募集が行われ、それを機にこのワーキンググループはさらに拡大されました。大統領府、在日ブルガリア大使館、ブルガリア産業会議所、国立美術アカデミー、ブルガリア産業資本協会、ブルガリア起業家協会、日・ブルガリア・ビジネス協会、建築・測地大学、ソフィア・テックパークなどの代表者が加わり、コンセプト選定のプロセスに参加しました。これらすべては、国家としての総意を示すものであり、数百万人の来場者に強い印象を与えるという国のその総意の象徴でもありました。

ブルガリアは、もう蚊帳の外にいてよい国ではありません。私たちは、とりわけ観光、投資、学術の分野において、影響力ある存在になっていかなければならないのです。もちろん、準備期間の中でも最も集中的だったのは、万博開幕の数ヶ月前の段階でした。この時期にはイノベーションと成長省も非常に積極的に取り組み、それまでに築いてきた基盤の上にさらに成果を重ねました。準備全体を通じて、私たちは課題の進行を厳格に管理し、主催者側の厳しい要件を忠実に守ってきました。その結果、ブルガリアは、大阪での万博を主催する2025年日本国際博覧会協会から、建設完了証明書を取得した最初の5か国の一つとして認定されました。

準備の初期段階から、タコフ氏は、ブルガリア中小企業促進庁がこれまでで最も優れた国家プレゼンテーションを実現することを目標に掲げていると発表されました。本当にそれは実現できそうですか？

はい、その実現を目指して、私たちは日々取り組んでいます。私たち庁のチームは、2025年の大阪・関西万博において掲げられたテーマ「いのちを救う」に即して、ブルガリアの目覚ましい貢献を提示できるように努力しています。ブルガリア館が位置するゾーンにおいて、私たちの国の成果を革新的な方法で紹介するのが私たちの目標です。ブルガリアは、さまざまな分野において模範となれる力を持っています。今回の万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」です。私たちは、ブルガリアの歴史、文化、伝統について、特に主要な来場者層となると見込まれる日本の皆様に向けて、感動を与えるような形で語っていきます。私たちの科学者たちの成果も紹介しますし、世界の産業界でリーダーとして活躍しているブルガリア企業も登場します。

デジタル化と人工知能の時代を迎えているいま、ブルガリア人の起業家精神は、世界にとっての模範であり、インスピレーションとなるものです。私たちの国が、持続可能な発展、イノベーション、そして国際協力といったテーマに対して、どれほど巧みにアプローチし、世界的なイベントの中で存在感を発揮できているか、そのことを万博の場で力強く示していきたいと考えています。

「Aクラス」パビリオンとして出展するブルガリアは、EXPO 2025の中でも目立つ存在となっています。パビリオンのコンセプトと、EXPOのテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」に対するブルガリア独自の解釈について教えてください。

ブルガリアのナショナルパビリオンは、万博会場の中でも最も格式の高いエリアに位置しており、それにより私たちの国は世界の強国と肩を並べる位置づけとなっています。ブルガリア館は、会場の主要ゲートのすぐ近く、オランダやシンガポールなどのパビリオンに隣接した重要な場所に建てられています。これは私たちに大きな責任を課す一方で、ブルガリアにとっては非常に大きなチャンスでもあります。ブルガリアは、観光大国としての実力を改めて示すことができると思います。素晴らしいリゾート地、海や山でのスポーツ、豊富な鉱泉、バルカン半島で最も優れたスパ体験、そしてローズオイル：日本でも高く評価されているこのバラの製品は、かつてのブルガリア製ヨーグルトと並んで、私たちの国を代表するアイコンです。

経済的な繁栄という視点からも、ブルガリアはかつての競争力を取り戻し、投資家たちにとっての有力な選択肢となる必要があります。南東ヨーロッパに位置する戦略的立地は、今後さらに注目されるべきです。そして、ブルガリア人の不屈の精神こそが、私たちがイノベーターであり、発見者であり、科学技術の分野で成果をあげてきた理由なのです。先ほど申し上げたように、ブルガリア館があるエリアのテーマは「いのちを救う」です。これは、健康、福祉、平和、人間の安全と尊厳といった、地球と人類の生存にかかわる課題をテーマにしています。私たちのパビリオンは、伝統的な要素と現代的なインタラクティブ技術を融合させています。それは、現代的なデザインというだけでなく、コンセプトが明確で、来場者にとっては没入感のあるデジタル体験を提供する場となっています。外装デザインは、日本最大の産業スペース賃貸会社である大和リースが手がけています。また、設計と施工には、慶應義塾大学の建築学教授であり、建築事務所「Kobayashi Maki Design Workshop（KMDW）」の共同創設者である小林博人氏が関わっています。小林氏は、私たち庁やブルガリア建築家同盟、建築士会との打ち合わせのために、何度もブルガリアを訪れました。外装デザインは現代的でありながら、ブルガリアの伝統工芸である織物や自然のモチーフを巧みに取り入れることで、日本との文化的つながりも感じさせる仕上がりになっています。

パビリオンの内部デザインおよび展示内容については、19の機関からなる省庁横断のグループが、建築家マリア・ゴスポディノヴァ氏、イスクレン・クルステフ氏、そしてMP-STUDIO社のチームによる大胆かつ革新的なプロジェクトを採択しました。彼らは、既成概念にとらわれない視点を持ち、信頼ある専門家の支持を得ながら、ブルガリアをこれまでとは異なる形で、革新的に紹介することを目指しています。地球上に酸素をもたらしてくれた微細な生物の世界から、文化・歴史・科学的功績を織り交ぜた3D映像の数々まで、それは未来を見据えた、非常に大胆な表現です。

万博におけるブルガリアのスローガンは「自然との共進化」です。このメッセージには、環境保護の意義だけでなく、人間の存在が世界の未来を左右するという重要な意味が込められています。私たちは、自分たちの行動や生活様式を通じて世界の進むべき方向を形づくっているのです。そして、ブルガリア館は、さまざまな国の人々が未来へのビジョンを共有し、経験を分かち合い、持続可能な社会を共に築いていく場所であることを示したいと考えています。

ブルガリアは自身のパビリオンを通じてどのようなメッセージを発信しているのでしょうか？

メッセージは明確です：私たちは進化し、発展し、そして自己を高めていく必要があります。新たな状況に適応し、変化を恐れずに、現代社会の課題に立ち向かっていくことが求められているのです。これにはさまざまな要素が含まれます。たとえば、気候変動に対する取り組みへの貢献、あるいは社会のあり方そのものの進化といった観点です。私たちは、社会として成長を遂げ、誇り高い国家、経済的に発展した強い国となり、同時に、技術革新や投資におけるポテンシャルを持つ先進的な顔を示す必要があります。ブルガリアのナショナルパビリオンは、未来への方向性を示す場所です。そこでは、自然との調和が体現されており、命を救うことだけでなく、持続可能な世界を共に築いていくことができるという模範を世界に提示しているのです。

2025年3月24日 ソフィア
中小企業促進庁長官ボイコ・タコフ氏と駐ブルガリア日本国大使館の道上尚史大使
写真：ニコラ・ウズノフ（BTA）

ブルガリア館は来場者とどのように関わり、ブルガリアへの関心や注目をどのように引き寄せているのでしょうか？

とても興味深いのは、外観から内装の細部に至るまで、あらゆる要素に象徴的な意味が込められているという点です。建築デザインを通して、ブルガリアの歴史、伝統、観光名所が過去・現在・未来と交錯し、インタラクティブかつ革新的な技術によって来場者が未来へと誘われていきます。こうしてブルガリアは、世界地図の上で将来性のある目的地としての存在感を強く打ち出しているのです。

ブルガリア館を訪れるすべての人が、人工知能を用いて「未来をデザインする」体験をすることができます。EXPO来場者の多くは日本人であることが見込まれているため、ブルガリアと日本の間に存在する伝統的な深い絆が特に際立つよう、印象的かつ力強い演出が随所に散りばめられています。55年前、1970年の大阪万博で再び出会った2つの国：ブルガリアと日本。両国をつないだのは、ブルガリアのユニークな製品「ヨーグルト」です。この製品がきっかけとなり、当時の昭和天皇・裕仁陛下からも特別な評価を受けました。現在に至るまで、日本ではこの乳酸菌が健康を促進し、治癒力を高めるという信仰が根強く残っています。日本の大手乳製品メーカー「明治」は、ヨーグルト製品に「ブルガリア」という名称を冠し、今も市場に展開しています。この事実ひとつをとっても、両国の間に築かれてきた強固な関係性、経済交流、そして将来に向けた観光・スポーツ・投資の分野での可能性の広がりが感じられます。これらすべてが、他の国々にとっても模範となる事例です。ブルガリアを、歴史と伝統を備えた観光地、そして大きな投資ポテンシャルとビジネスチャンスを持つ国として再発見するきっかけとなるでしょう。歴史が証明しているように、ブルガリア人は先進国社会の課題にもひるまず立ち向かってきました。そして今も、私たちには世界に与える価値と力がまだまだあるのです。

博覧会の6か月間にわたり、併設イベントやビジネス交流の機会は予定されていますか？

はい、国家パビリオンは、未来を構想するための空間として、特別な機会を提供する場所となっています。万博の主催者側では、持続可能な開発、技術革新、人類の福祉など、地球規模のテーマに関連する8つの「テーマウィーク」が設けられています。私たちの招致に応じて、すでにいくつかの省庁、雇用者団体、ビジネス団体から積極的にこれらの週間に参加したいという意向が寄せられています。ブルガリア館では、プレゼンテーションや展示会が行えるだけでなく、持続可能なビジネスパートナーシップを築くための戦略的拠点にもなっています。

館内には28台のスクリーンを備えた展示ホールがあり、その中心にプレゼンテーションルーム（座席50名分、完全に技術的設備完備）が設置されています。すでに多くの機関・組織がテーマウィーク中の情報発信イベントへの参加を表明しています。たとえば、労働社会政策省（国立社会保険機構を通じて）、教育科学省（高等教育の国際的広報と連携構築）、INSAIT（ブルガリアの人工知能研究機関、トヨタ自動車との協業）、青少年・スポーツ省、経済産業省（経済フォーラム主催）、観光省（9月27日の世界観光デーにビジネスイベントを予定）、エネルギー資源省、「スマート社会のためのビッグデータ研究所（GATE）」（日本の筑波大学と提携中）、乳製品大手「L B Bulgaricum」、グローバルネットワーク「Endeavour」、そして「CreaTech Bulgaria」などが名を連ねています。

これらの参加団体の代表者たちは、ブルガリアの誇るべき国際的なプレゼンスを高めると同時に、世界的なイベントの舞台で自らを発信する貴重なチャンスを得ることができます。

さらに観光省の参画と、56名のブルガリア人学生の参加により、ブルガリアは美しい自然、夏冬のリゾート、歴史的名所、そしてユネスコ世界遺産の文化・歴史施設を備えた、感動を呼ぶ観光地としての地位をさらに確立することができます。とりわけ注目すべきなのは、これらの学生の多くが「日本学（日本語・日本文化）」を専攻していることです。これは、ブルガリアが日本に対して温かな敬意を抱いている証であり、日本語を話す人々が自国の日本語で私たちブルガリアの文化に触れるという感動の体験につながるでしょう。これこそがブルガリアの姿であり、国家間の協力関係を育むことができる存在であるというメッセージなのです。私たちは、観光の新たな地平、科学技術の進歩、持続可能な投資環境の創出を目指し、そして何より世界に対して「ブルガリアはハイテク産業の拠点たり得る国である」ことを示すべきなのです。

2025年大阪・関西万博へのブルガリアの参加において、成功とはどのようなものだとお考えですか？

成功にはさまざまな形があります。今回のブルガリアの参加は、大胆なアイデアとコンセプトに基づいており、現在のところ、最も注目される「いのちを救う」というサブテーマのゾーンにおけるブルガリアの存在が関心を集めています。私たちにとって重要なのは、ブルガリアの姿を世界に示し、それがより多くの観光客の誘致につながり、貿易・経済関係の拡大につながること、そしてイノベーション、文化、科学、スポーツといった分野での我が国の強みをアピールすることです。

準備・運営の過程では、パビリオン建設の各セグメントへの取り組み、主催者側から各国に課される厳格な要件への対応など、数々の挑戦を乗り越えてきました。ここで思い出すのは、ブッカー・ワシントンの言葉です。「成功とは達成したものによってではなく、乗り越えてきた困難によって測られるものである」と。これは、中小企業促進庁のチーム、長いプロセスに関わってきたすべての政府機関、建築家マリア・ゴスポディノヴァ氏、イスクレン・クルステフ氏、MP-STUDIO、そしてブルガリア館の建設を担ってくれた日本のパートナーすべてに当てはまります。

これらすべての努力のおかげで、ブルガリアは今、あるべき場所にいます。世界の大国と肩を並べて、EXPO 2025に堂々と立っています。

ボイコ・タコフ博士は、2018年11月よりブルガリア中小企業促進庁（BSMEPA）の長官を務めています。企業経営において12年以上の実務経験を有し、2008年から2012年の間には、韓国の大手エネルギー企業のブルガリア現地法人にて、代表取締役兼取締役会メンバーを務めました。

国立世界経済大学（UNWE）にて「マーケティングと経済学」の修士号を取得し、ソフィア工科大学にて「経済学、産業工学およびマネジメント」の分野で博士号を取得しています。

現在は、教育活動にも積極的に取り組んでおり、国立世界経済大学でアシスタントとして教鞭を執るほか、2021年からは国際中小企業ネットワーク（INSME）の理事としても活動しています。

インタビュー：ヤニツァ・フリストヴァ

ブルガリア館コンセプトチーム：

ブルガリア館を通過ことは、インスピレーションを与え、心を動かし、記憶に深残る個人的な体験なのです。

ブルガリア館の外観（大阪・2025年万博）
写真：中小企業促進庁

ブルガリア館を通過するというのは、ただの空間の移動ではありません。それはインスピレーションを与え、心を動かし、記憶に深く残る個人的な体験なのです」と雑誌「LIK」のインタビューで語るのは、EXPO 2025　大阪・関西のブルガリア館のコンセプトチームのメンバーのMP-STUDIO、の創設者であるマリン・ペトコフ氏。

この万博プロジェクトは、ブルガリアの世界的な舞台での存在感を示す中心的存在である、ブルガリア中小企業促進庁（BSMEPA）の主導で進められています。

プロジェクトには、日本最大手の建設会社の一つであるDaiwa Lease Co., Ltd、そして高く評価されている建築事務所KOBAYASHI MAKI DESIGN WORKSHOPおよびDesign Arc Ltd.が力を合わせて参加しています。

ブルガリアから創造力で貢献するのは、建築家マリア・ゴスポディノヴァ氏、MP-STUDIO、およびイスクレン・クルステフ氏によって構成されるコンセプトチームが担っており、彼らは革新性、文化的価値、そして未来へのビジョンを融合させた空間を共同で創り上げています。プロジェクトのコンサルタントは、舞台美術の専門家であるミラ・カラノヴァ教授です。

マリア・ゴスポディノヴァ氏（建築家）、イスクレン・クルステフ氏、そしてMP-STUDIOの代表であるマリン・ペトコフ氏（創立者、経営者）、ストラヒル・ヨルダノフ氏（クリエイティブ・ディレクター）、マリン・ディミトロフ氏（オペレーション・ディレクター）は、「LIK」誌に対し、ブルガリアがどのようなコンセプトで「いのちを救う」というテーマに参加するのか、ブルガリア館の来場者の動線はどう設計されているのか、そしてこのプロジェクトを国から遠く離れた日本で実現するうえでの困難について語りました。

「挑戦こそが私たちに進化を教えてくれるものです。だからこそ、ブルガリア館のモットーは『自然との共進化』なのです」とチームは語ります。彼らはこのコンセプトが過去、現在、未来を交差させるものであること、そしてプロジェクトが革新的なテクノロジーの活用においても際立っていることを強調しました。

ブルガリア館の内装デザインコンペに勝利したのはブルガリアチームでした。企画は、他の応募案と比べてどのような点で際立ち、関係省庁の合同作業部会の注目を集めたのでしょうか？

ブルガリア館の内装と体験設計は、「自然との共進化」というモットーのもと、明確なコンセプト、深い感情的な訴求力、そして独創的なアプローチを備えています。従来の展示形式に代わり、視覚的・知的・感情的にあらゆるレベルで訪問者を引き込む没入型の体験が提案されました。単に情報を提示するのではなく、訪問者自身が物語の一部として参加する構成です。

このコンセプトは、過去・現在・未来を「協力」と「環境の能動的な変革」というアイデアで繋ぎ、細菌の世界からインスピレーションを得たものです。意外性のある発想でありながら、ブルガリアの科学的・文化的・人間的なアイデンティティに深く根ざした視点でもあります。

このプロジェクトでは、360度プロジェクションや人工知能駆動のインタラクティブ・インスタレーションといった先端技術に加えて、手工芸的要素や織物や木材などの伝統要素、象徴性を建築に織り交ぜることで、独特な空間体験を生み出しています。

また、建築家、デジタルアーティスト、イノベーター、ビジネスの専門家といった多分野のメンバーで構成されたチーム自体が「協力と共感」という物語の体現でもあります。ブルガリアを知的で現代的、かつインスピレーションに満ちた方法で表現するという共通の使命のもとに結集しています。

このチームは、建築家のマリア・ゴスポディノヴァ、イノベーターのイスクレン・クルステフ、MP-STUDIOのデジタルアーティストで構成されています。彼らは、持続可能な建築、ビジュアルアート、イノベーションの分野で実績のあるプロフェッショナルであり、ブルガリアおよび東欧を代表する舞台美術家のひとり、ミラ・カラノヴァ教授の支援も受けています。

ブルガリア館は、シンガポール館とオランダ館の間、会場の主要ゲートのすぐ隣という、非常に戦略的な立地に設置されます。ブルガリアは、EXPO全体のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」に対し、どのようなコンセプトで世界との対話に臨むのでしょうか？

イスクレン・クルステフ：ブルガリア館は、EXPO2025大阪・関西万博のサブテーマである「いのちを救う」に基づいて設計されています。数十億年前、地球の海底で発生した藍藻が大気に酸素を供給し、生命進化の歯車が回り始めました。そのおかげで地球は生命に適した惑星となり、30万年前には人類が誕生しました。

細菌はもう一つ重要な性質を持っています。人間と同様にコミュニティの中で生き、それぞれが異なる役割と能力を持ち、危機に直面したときには協力して困難を乗り越えます。この微視的な世界の「協働のレッスン」は、人類が未来の課題に対処するヒントになるかもしれません。

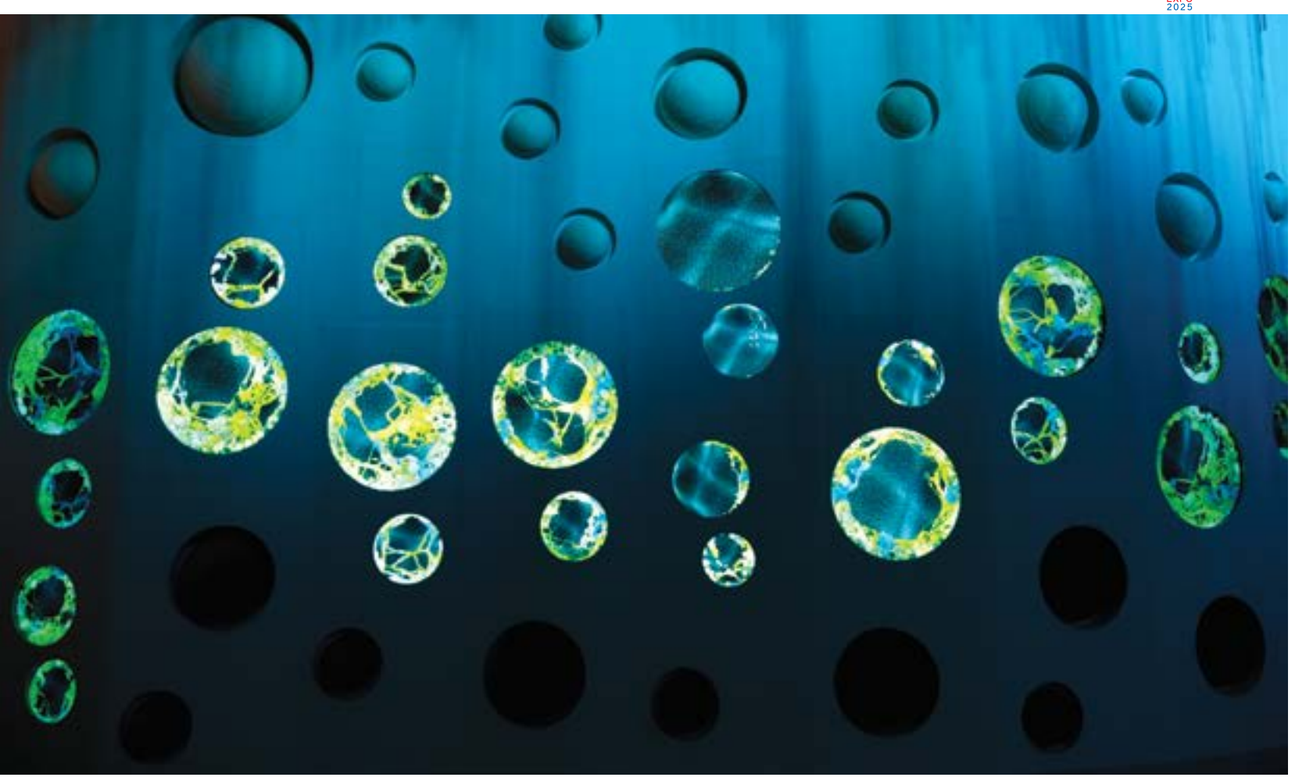
困難は我々を進化させるものです。だからこそ、ブルガリア館のモットーは「自然との共進化」なのです。

ブルガリアが世界に誇る乳酸菌、ラクトバチルス・ブルガリクスは、長年にわたり人々の生活を豊かにしてきました。1970年の大阪万博でも、ブルガリア館の目玉となったのは、この乳酸菌によって作られる伝統的なヨーグルトの試食でした。それは日本の観客、さらには皇室の心をも掴みました。昭和天皇と皇后両陛下がブルガリア館を訪れ、ヨーグルトを高く評価されたのです。

この出来事がきっかけで、ブルガリア産ヨーグルトは日本での人気を獲得し、以後「明治ブルガリアヨーグルト」というブランドで定着。今も日本で広く愛されています。

「いのちを救う」という世界的使命の中で、ブルガリアのイノベーターたちは今日も進化を支えています。ブルガリアは、世界で6番目に宇宙に進出した国であり、宇宙食を開発した3番目の国でもあります。そして今、ナノ衛星技術を発展させ、大気・土壌・海洋の汚染をリアルタイムで観測可能にし、災害時の迅速な対応を実現しています。1平方メートルの火災を、たった5分で宇宙から検知することも可能です。

世界初のデジタルコンピューターを開発したジョン・アタナソフはブルガリア系の技術者であり、今日ブルガリアがヨーロッパ有数のITハブであるのは当然の流れとも言えるでしょう。世界最速クラスのインターネットを有し、母国語で動作する独自の人工知能モデル「BgGPT」も開発しています。自然と調和するテクノロジー社会を目指し、ブルガリアのAI開発者たちはデータの分析をし、人類と自然が共に進化できる



パビリオン内のビジュアルエフェクトの一部
写真：中小企業促進庁

世界の創造に貢献しています。

さらに、世界初の認可を受けた貨物ドローン航空路の開発、自動運転・電気自動車向けの先進的なソフトウェア開発、そしてヨーロッパ有数の自転車・電動自転車の生産国としても注目されています。

製薬産業にも強い基盤を持ち、健康技術の分野で成果をあげてきたブルガリアは、ハーブ、薬草、スパイスのEU最大の生産国でもあります。バラの栽培においては世界シェアの50%を誇り、美しさと健康効果で知られるローズオイルの世界的リーダーです。ブルガリアは、ただの技術革新やビジネスチャンスにとどまりません。自然と文化の真の傑作ともいえる国です。東洋と西洋の交差点に位置するこの国には、深い文明の根と伝統が息づいています。

ブルガリア館における来場者の体験の流れについて、最初の一歩から最後の瞬間まで、どのような体験が待っているのかを教えていただけますか？

ストラヒル・ヨルダノフ（MP-STUDIO　クリエイティブ・ディレクター）：
2025年大阪・関西万博のブルガリア館は、協力と共感をテーマに、過去・現在・未来が交差する「生きた空間」としてデザインされています。

来場者は、ブルガリアの文化、歴史、科学の世界へと導かれ、母国の美しい風景と革新的な技術に触れる体験ができます。今この瞬間に挑戦に立ち向かい、人命を救っている人々の姿も紹介されます。

特に注目されるのは「未来ゾーン」です。ここでは、360度映像によって、視覚的に圧倒される没入型のショーが展開され、人類の未来の可能性を提示します。

この体験は、私たち人間が選択と行動を通して未来をつくっていくということを、目に見えるかたちで示すデモンストレーションになるでしょう。

マリン・ペトコフ（MP-STUDIO創設者兼マネージング・ディレクター）：
インタラクティブな仕掛けも豊富で、来場者は自分のスマートフォンを使って、未来への価値観やメッセージを人工知能に伝えることができます。人工知能はその言葉を視覚的に表現し、次の訪問者の前に動的なアート作品として浮かび上がらせます。

この仕組みにより、6か月間にわたる「リレー効果」が生まれ、来場者が思い描く未来像の全体像を形にすることができます。

さらにブルガリアの子どもたちによる学校キャンペーンも行われます。彼らが夢や思いを描いたものが色と形になり、ビジュアル空間に貢献します。

ブルガリア館を通り抜けるという体験は、単なる空間の移動ではなく、心に残る個人的な旅なのです。

マリア・ゴスポディノヴァ：
来場者は、ファサードに近づいた瞬間から体験が始まります。まず彼らを迎えるのは、光と視線を折り返すダイナミックなロープ構造です。
見る角度によって徐々に姿を現すその外観は、象徴的に「ブルガリアへの道を解きほぐす」ようにデザインされています。

館内に入る最初の一歩では、「過去と現在が出会う空間」へと導かれます。これは自然、特に森から着想を得たコーナーです。過去に根を張った木々が、今日の実りを与える空間。果実のように配置された丸いモニターが、今のブルガリアのダイナミックで創造的、安定した姿を映し出します。

次に待っているのは「未来」で、角を曲がった先に広がります。ここは、360度の没入型映像空間で、人と自然の協働によって描かれる「明日の世界」のビジョンを体感できます。

この未来ゾーンはまた、ブルガリアと日本のビジネスに新たな接点をもたらすプレゼンテーション空間としての役割も担っています。

パビリオンの外観デザインに込められた基本的なアイディアやシンボルはどのようなものですか？また、日本の建築スタジオ KMDW によるそのビジョンは、どのようにしてブルガリアの精神を日本の美意識と調和させているのでしょうか？

マリア・ゴスポディノヴァ：
ブルガリア館の外観は、日本の建築スタジオ「Kobayashi Maki Design Workshop（KMDW）」が設計し、サステナブルでモジュール式の建築に特化した日本最大級の建設会社「Daiwa Lease」とのパートナーシップで実現しました。

ブルガリアの文化と日本の建築を融合させることで、非対称のファサードは入口の位置と屋根の形状によって際立っています。このデザインの主な目的は、広場や周囲のEXPOエリアに開かれた空間を創出することです。オープンなファサードにより、訪問者は広場にいながら展示の一部を垣間見ることができ、内と外の境界が取り払われます。この建築的アプローチには非常に貴重な象徴性があり、開かれた姿勢、アクセスのしやすさ、そして好奇心を促します。まさにこの透明性こそが、外部との視覚的なつながりを制限するような閉鎖的なコンセプトの他の多くのパビリオンとは一線を画し、ブルガリア館を際立たせているのです。

ロープを用いたファサードは、入口周辺でも一定のリズムを保ちながら、訪問者を大屋根リングからブルガリア館へと自然に導きます。ロープは逆方向に編み込まれた2種類の異なるパターンを構成し、時間帯や接近する角度によってファサードの印象が大きく変化する、独自の視覚モチーフを生み出しています。来場者は最初、それを完全に閉ざされた構造と感じるかもしれませんが、建物の周囲を移動するにつれてそのパターンは徐々に「ほどけて」、糸の隙間から温かみのある内部空間が姿を現します。

ファサードに見られる非対称性は、日本建築の原理 - 自然の予測不可能さや不均衡さの中にも内なる調和とバランスが存在し、それが私たちの社会に継続的にインスピレーションを与える - を体現しています。

パビリオンを囲む広場空間は、イベントの開催地として、また大阪EXPOの賑わいの中で人々が集い、憩う場として活用されます。

ファサードには軽量かつ頑丈な素材が使用されており、展示終了後にはすべてリサイクル可能です。外部構造は、パネル、木製フレーム、布製の表面を含む大部分の部材が分解・再利用できるように設計されており、パビリオンは一時的な建築でありながら、循環型経済と完全に調和した、持続可能性を見据えた長期的視点を持つ建築物となっています。

持続可能な開発は、EXPO 2025の主要なテーマの一つです。ブルガリア館の建築とデザインには、素材の選定から建造物の将来的な処理まで、この持続可能性の原則がどのように組み込まれているのでしょうか？

マリア・ゴスポディノヴァ：
私たちのパビリオンでは、他のパビリオンと同様に、サーキュラー・ポリシーと持続可能性が中心的な位置を占めています。プロジェクトの初期段階から、この原則は私たちのすべての判断に深く組み込まれており、使用する素材の選定、環境配慮、自然資源の活用にまで及びます。ブルガリア館は6か月間の展示期間のために設計された仮設構造物であり、展示終了後にはすべての部材がリサイクルまたは再利用される予定です。建設には木材やテキスタイルといった環境に優しい素材を選定しており、各パーツは今後の再利用を見据えて慎重に設計されています。

ブルガリア館のインテリア空間に込められた建築的・美的なコンセプトとは何でしょうか？訪問者にどのような印象や感覚を与えることを目指しているのでしょうか？

マリア・ゴスポディノヴァ：
私たちが目指したのは、美しさと軽やかさ、そして来場者にインスピレーションを与える空間の創造でした。インテリアはブルガリアの国旗の色を基調としながらも、白を主とした配色で構成されています。この白は光、清潔感、そして空間の広がりを感じさせ、来場者に落ち着きと集中をもたらし、展示内容を受け入れるための心の余白を生み出します。また、この白い背景はファサードや外部空間との自然な視覚的つながりも生み出しています。

開放的なガラスのファサードを通して外の空間が内へと流れ込み、内と外の境界が曖昧になることで、来場者は明るく、開かれた、呼吸するような空間へと自然に導かれます。

構成面においては、パビリオンは伝統的な要素と革新的なインタラクティブ技術を融合しています。これによって、モダンで明確なコンセプト空間が生まれると同時に、個人的でありながら集団的でもあるユニークなデジタル体験が提供されています。

インテリアには、ブルガリアの伝統工芸へのオマージュが繊細に織り込まれています。例えば「織り」は展示構成の構造そのもの、あるいは語られる物語の「筋」として比喩的に表現されています。また、木、根、果実といった自然のシンボルもオブジェや造形の中に取り入れられ、自然への敬意や手仕事の価値を重んじるという、ブルガリアと日本に共通する文化的パラレルが描き出されています。

今年3月、2025年大阪・関西万博において、最上級クラス「タイプA」の自国パビリオンを持つ全47か国のうち、ブルガリアを含むわずか8か国だけが、万博の準備と運営を担当する日本の協会から公式認証を受けました。開幕前にこのような初期の成功を収めた背景には、どのような経緯があったのでしょうか？

イスクレン・クルステフ：
この成功は、ブルガリアと日本のパートナーの間で行われた緻密な連携の成果です。関わったのは、政府機関、建築家、エンジニア、施工会社など多岐にわたります。ブルガリア館は、持続可能性、安全性、技術的書類の整備といった主催者側の厳格な要件を完全に満たした最初のプロジェクトの一つでした。これは、私たちの高い専門性、透明性、そして国際的なコミュニケーションの優秀さを証明するものであり、ブルガリアが公式開幕前からすでにEXPO 2025の中核的な存在として認められていることを意味します。

このプロジェクトを自国から何千キロも離れた地で実現するにあたり、どのような困難がありましたか？

イスクレン・クルステフ：
プロジェクト全体を通じて、私たちは数か月にわたり日本側のチームと継続的かつ緊密に協力してきました。建築的要素や素材の選定から、万博自体の厳しい要件、プロジェクト運営、精密なスケジュールの遵守、そして全体的なロジスティクスに至るまで、あらゆる詳細が綿密に議論されました。

ビジュアルの面では、技術的・文化的・機能的な観点から最適な解決策を模索し、複数の開発段階を経てきました。

特に大きな課題となったのは、日本特有の建築・構造・耐震基準への対応でした。それには高度な精密性と適応力が求められました。また、輸入するすべての資材は日本の規格に準拠している必要がありました。物流面でも、綿密な計画と緻密な調整が求められる非常に複雑なプロセスでした。

ブルガリア館の入り口
写真：中小企業促進庁

マリン・ディミトロフ（MP-STUDIO　オペレーションディレクター）：
もちろん、時には言語の壁に直面することもありました。しかし、まさにその文化的な違いやコミュニケーションの課題こそが、より深い相互理解を築く基盤となったのです。最終的に達成された成果は、共感と協力こそが常に正しい道であることを証明しています。私たちは両国のチーム間に強い信頼を築き、日本の企業との安定したパートナーシップを形成することができました。それにより、プロジェクトの各段階を順調に進めることができたのです。

日本は本当にブルガリアを愛してくれています。そして私たちは、この協力関係が今後も続くべきだと信じています。それは建築や文化のレベルだけでなく、あらゆる次元において実現されるべきです。なぜなら、この関係は相互の敬意、信頼、そして真の親しみの感情に基づいて築かれているからです。

パビリオンの一部要素がブルガリアで製作されたとお話しされていましたが、それについてもう少し詳しく教えていただけますか？また、ブルガリアの製造業者やアーティストをどのようにプロジェクトに参加させたのでしょうか？

大阪万博ブルガリア館のインテリア
写真：中小企業促進庁

マリア・ゴスポディノヴァ：
まず最初に、このプロジェクトのコンサルタントについて触れておきたいと思います。ブルガリアおよび東ヨーロッパで最も優れた舞台美術家の一人であるミラ・カラノヴァ教授の助言を得られたことは、私たちにとって非常に幸運でした。彼女の提案は、コンセプト面でも構造面でも非常に重要でした。

ブルガリア館の分子生物学分野におけるコンサルタントであり、ソフィア大学生物学部の主任助教・博士であり、Clean and Circleコンピテンスセンターの研究者でもあるミハエラ・キリロヴァ氏に、心より感謝の意を表する。パビリオンのメッセージに科学的基盤を築くうえで、彼女の役割は欠かせないものだった。

私たちにとって、ブルガリアの製造業者やアーティストをプロジェクトの実現に参加させることは、極めて大切なことでした。複雑な物流と高い国際基準にもかかわらず、アイデアから実装までブルガリアらしさのあるプロセスを作り上げることに成功しました。

ブルガリア国内では、多くの優れた企業と才能あるアーティストと出会うことができ、パビリオンに独自の要素を加えることができました。

また、ブルガリアのアーティストが中心となっているチームの中には、ブルガリア在住のスウェーデン人アーティストであるフィリップ・ヤコブソンも参加しており、彼は木々のアートインスタレーションの作者です。

特に誇りに思っているのが、細菌形のベンチです。これは完全にパビリオンのために作られた特注の製品です。

すべての要素は細部まで設計され、技術的にも洗練されており、必要な国際認証を取得した素材を使用して製作されています。加えて、すべてのインスタレーションはモジュール式で分解可能な構造となっており、

日本への輸送や現地での再組み立ても容易に行えるようになっています。

この取り組みは単なる物流上の選択ではなく、ブルガリアの産業や職人文化を世界的なイベントに参加させるための大きなチャンスでした。私たちは、ブルガリアがただ紹介されるだけでなく、このビジョンの創造に積極的に関与していることを心から誇りに思っています。

大阪万博におけるブルガリア館は、どのような物語を語っているのでしょうか？

ストラヒル・ヨルダノフ：
ブルガリア館は、私たちに「振り返ること」を促してくれます。過去の教訓と、自分たちのルーツの力を思い出させてくれるのです。そして、ブルガリアが今日、どのようにして世界的な課題に取り組み、命を救っているのかという、意義ある事例を紹介しています。同時に、自分自身を見つめ直し、より調和のとれた、持続可能な社会を築いていく中で、自分にはどんな役割があるのかを考えさせてくれます。そして、細菌のように、共感や協力、そして広い意味での環境の能動的な変革を優先することの重要性を伝えているのです。

そして、ブルガリアにも公式マスコットが存在します。EXPO-2025におけるブルガリアのマスコット「ラクトちゃん」は、どのような意味を象徴しているのでしょうか？

マリア・ゴスポディノヴァ：
ラクトちゃんは、単なるマスコットではありません。友情、科学、そしてブルガリアと日本の文化的つながりの象徴です。その名前は、ブルガリア原産の乳酸菌「Lactobacillus bulgaricus」と、日本語で親しみや愛情を込めて子どもや友人、かわいらしいキャラクターなどに使われる接尾辞「ちゃん」を組み合わせたものです。

ストラヒル・ヨルダノフ：
ラクトちゃんは、いつも笑顔の小さなヒーローです。彼は、私たちの目には見えないけれども、命の存続に欠かせない「共同体」や「自然界における目に見えない協力関係」を象徴しています。ラクトちゃんは、一匹のスーパーヒーロー的な細菌ではなく、力を合わせてこそスーパーパワーを発揮する「細菌の共同体」なのです。まさに人間と同じように、協力し合えば大きな力になるということを表しています。

イスクレン・クルステフ：
ラクトちゃんはブルガリアの国の色をまとっていますが、彼が話すのは「思いやり」「順応性」「創造性」という国境を越えた言語です。彼はブルガリア館のために特別に制作され、一般公開される前からすでにチーム全員のアイドルになっていました。きっと、EXPO 2025で最も記憶に残るキャラクターの一人となり、子どもから大人まで多くの人々の顔に笑顔を届けてくれることでしょう。

ブルガリア館を訪れた日本やその他の国々の来場者は、ブルガリアに対してどのような印象を持ち、何を記憶に留めることになるのでしょうか？

マリン・ペトコフ（MP-STUDIO創設者・代表）：
来場者は、ブルガリアを「深い文化的ルーツを持ちながらも、未来に目を向けている国」として発見することでしょう。伝統を守るだけでなく、それを革新によって発展させている国家。感情に訴える力、インテリジェントなデザイン、持続可能性、そして対話に対する開かれた姿勢が感じられるはずです。ブルガリアが「魂・ビジョン・そして国際課題への貢献を持つ、インスピレーションに満ちたパートナー」として記憶されることを願っています。

マリン・ディミトロフ（MP-STUDIOオペレーションディレクター）：
ブルガリア館の技術的実現は非常に印象的で、最新技術にしっかりと対応しています。

建物のファサードにはプログラム可能な照明が施されており、建築的な造形を際立たせると同時に、ダイナミックで記憶に残るビジュアル・アイデンティティを生み出しています。

「現在」ゾーンでは、来場者はユニークなマルチメディア体験に没入します。14台のモニターが完全に同期して稼働し、その映像コンテンツは30基のプロフェッショナル照明機器と精密に連動。リアルタイムで映像の色調に合わせたライティング演出が行われ、魅力的で動きのある雰囲気を作り出しています。

「未来」ゾーンには、没入型空間が用意されています。そこでは14台のEpson製レーザープロジェクターが連動し、14K解像度という驚異的な映像を構成。Vioso社による専用キャリブレーション・システムにより、遠隔操作による微調整と再

キャリブレーションが可能となっており、映像のクオリティを常に完璧な状態に保っています。

このパビリオンで最も革新的な技術のひとつは、人工知能システムによるリアルタイムでのコンテンツ生成と再生です。そのために自社で専用のメディアサーバーを開発し、再生用ソフトウェアの開発者とも直接連携しながら、ニーズに合わせた最適化を行いました。

体験の最後を飾るのは、Fohhn製の高品質オーディオシステム。これはパビリオンの2つのゾーンに配置されており、深みと感情的なインパクトをもたらし、来場者を音と映像の世界に没入させます。

全体として非常に複雑なシステムではありますが、その操作性は極めて直感的です。パビリオンチームのために、すべてのテクノロジーを簡単に制御できる専用のタッチ式インターフェースをタブレットで用意しました。

ブルガリア館は単なる技術展示ではなく、「イノベーション」「芸術」「デジタルの未来」を融合させた体験そのものを提供しているのです。

大阪・2025年万博におけるブルガリア館
写真：中小企業促進庁

チーム紹介：

建築家マリア・ゴスポディノヴァは、2025年大阪・関西万博ブルガリア館の内装デザインを担当する主任建築家です。国際的な経験を持つ実績あるプロフェッショナルであり、ブルガリアおよびドイツの建築家協会の会員です。持続可能で省エネルギーの企画に特化し、パッシブハウスの認定デザイナーでもあります。公共空間やパブリックスペースにおける建築設計、空間構成、コンセプト設計において豊富な経験を持ち、Scalator Ltd.のパートナーとしても活躍しています。
現在のプロジェクトでは、建築的ビジョン全体、技術的な実施、そしてブルガリアの関係機関、日本のパートナー企業・製造業者との調整を担当しています。

イスクレン・クルステフは起業家であり、エコシステム構築の専門家として、ブルガリア国内外500社以上の企業にメンタリングを行ってきました。人工知能の導入を規制された環境下で指導する「インテグレーター」社のCEOであり、アラブ首長国連邦初の科学イノベーションパークの創設者でもあります。さらに、INCREDA およびGEM（Global Entrepreneurship Monitor）ブルガリアの共同創設者・会長、「教室の起業家たち」イニシアティブの推進者、「Power of BG」の理事を2023年まで務め、「The Bridge」などの主要イベントの共催者でもあります。Scalator Ltd.のパートナー。

MP-STUDIOは、ヨーロッパにおける光のアート分野のパイオニアの一つであり、17年にわたる経験と、世界中で700件以上のプロジェクトを手がけてきました。国際的な賞を多数受賞し、世界の象徴的な建築物に投影を行ってきた実績を持ちます。代表的な作品には、ドバイのアル・ワスル・エキスポ・シティ、ベルリンのブランデンブルク門、ボリショイ劇場、ベルリンテレビ塔、クウェート首長のオペラハウス、ハンの洞窟、ローマ市庁舎、サウジアラビアのマラヤ、ブリュッセル証券取引所、アムステルダムのノルデルケルク教会、ザグレブのミマラ美術館などがあります。また、光のフェスティバル「LUNAR」の創設者・主催者でもあります。

Kobayashi Maki Design Workshop（KMDW）は、その子会社であるVeneer House Inc.とともに、世界9カ国以上でプロジェクトを手がけてきました。これらの取り組みは、地域コミュニティの形成や持続可能な関係構築の促進を目的としています。プロジェクトの規模は多岐にわたり、小さな子ども用の遊び小屋（田園調布プレイハウス）や、災害時対応センター（前網浜ヴェニアハウス）から、като Keio SFC Student Build Campus Building (SBC) などの大規模な建築物まで、多様な実績を有しています。

Daiwa Lease Co., Ltd.は、日本有数の大手建設会社の一つであり、プレハブ建築およびリサイクル可能な建築の分野でのリーダーです。持続可能性に強く焦点を当て、設計から建設、仮設建築物のリースまでを一貫して提供する総合的なソリューションを展開しています。Daiwa Lease は、グループ会社である Design Arc とともに、大阪・関西万博（EXPO 2025）におけるブルガリア館の建設プロセス全体を担当しています。

ミラ・カラノヴァ教授（コンサルタント）。国際的な経験を持つ舞台美術家であり、ブルガリア国立演劇・映画芸術アカデミー（NATFA）にて舞台美術の教授を務めています。「ニコライ・パブロヴィチ」国立美術アカデミーで舞台美術を専攻し卒業後、映画学と映画芸術の博士号を取得。ブルガリア国内外の著名な演出家たちと協働し、数々の印象的な舞台作品を手掛けてきました。「アスケール賞」を4回、「イカル賞」を1回受賞しています。大阪・関西万博におけるブルガリア館のチームでは、舞台美術と空間演出の専門知識を統合するコンサルタントとして参加しています。

フィリップ・ヤコブソンは、国際的な経験を持つアーティストであり、世界各地のフェスティバルやイベントに多数参加してきたインスタレーションおよび彫刻作品の制作者です。ソフィアで開催された光のショー「Lunar」から、オーストラリアの「Rainbow Serpent」フェスティバルに至るまで、幅広い舞台で活躍しています。ヤコブソン氏は、伝統的なクラフトマンシップと革新的なアプローチを巧みに融合させる技術を持ち、EXPO 2025大阪・関西万博におけるブルガリア館のための主要な構成要素の制作を担い、そのユニークな外観づくりに大きく貢献しています。

プロジェクト協力パートナー：

発注者：中小企業促進庁（BSMEPA）
建築設計：Kobayashi Maki Design Workshop（KMDW）
主要施工者：Daiwa Lease（大和ハウスグループ）
内装施工：Design Arc（大和ハウスグループ）
内装デザインチーム：マリア・ゴスポディノヴァ、イスクレン・クルステフ
デジタル体験設計：MP-STUDIO
プロモーション映像制作：SPACE DIVE PRODUCTIONS
アートインスタレーション製作：フィリップ・ヤコブソン
彫刻制作：一般社団法人日本石材産業協会、イヴァン・ストヤノフ
コンサルタント：日建設計、リディア・ヴィタノヴァ、ミラ・カラノヴァ
コンサルタント：日建設計総合研究所、山村真司、リディア・ヴィタノヴァ、ミラ・カラノヴァ教授、ミハエラ・キリロヴァ博士
映像体験には、アレクサンダル・コストフ氏とカリン・イリエフ氏による映像素材が使用されている。

1970年の大阪万博におけるブルガリア – BTA（ブルガリア電信通信社）のアーカイブからのニュース

1970年の大阪万博へのブルガリアの参加は、国内のメディアで広く反響を呼んだ出来事となった。ブルガリア通信社も例外ではなく、日本から直接この出来事を報道する特別特派員、ディミトリ・イワノフ氏もいた。雑誌「LIK /文学・芸術・文化/」には、当時のBTAの会報に掲載されたニュースの抜粋を掲載している。

1970年

日本の大阪で開催された万博

3月9日、3月15日に大阪で開幕し183日間開催される国際博覧会EXPO-70への我が国の参加に関するジャパンタイムズ紙の記事について、BTA特派員ディミトリ・イワノフが大阪からリポートした。

英語で最も影響力があり、比較的人気のある朝刊の一つであるこの日刊紙は、社会主義建設25周年を祝った我が国が初めて世界博覧会に公式に参加することを読者に伝えている。

「ブルガリア館のプレビューを見ると、EXPO-70におけるブルガリアの存在は来場者にとって嬉しいサプライズとなることが分かる」とジャパンタイムズ紙は書いている。–ブルガリア館は、EXPO-70 のゲストが見逃せない場所の1つ

1970年7月21日 ソフィア：EXPO-1970記念切手
写真：エヴゲニア・マレザノヴァ（BTA）

として浮上している。より多くの訪問者の注目を集めるために、ブルガリア人はユニークなアイデアを採用した。ブルガリアのパビリオンの建築シルエットは、印象的な自然のシルエットで有名なスタラ・プラニナ山脈 （彼らはこれをネイティブ・バルカンと呼んでいる）を抽象化したものだ。

パビリオンは青みがかったガラスとアルミニウムのピラミッドで構成されており、バルカン半島を横切って黒海の岸に達するスタラ・プラニナ山脈の誇り高い峰を象徴している。四つの山頂を頂く宮殿は、ブルガリアの進歩への願望と、バルカン半島諸国の人々、そして世界との平和的な関係を象徴している。同時に、空に向かって伸びるシルエットは、抑圧者や侵略者に抵抗してきたこの小さな国の独立精神を反映している。」

「宮殿内では、同じ精神が感じられ、4つの主要テーマの展開の出発点となる。ブルガリアは古代文化の国であり、1300年前に建国された国家である。ブルガリア人の民族的・社会的解放のための闘争を経てブルガリアが社会主義への道を歩み始めてから25年間の産業と社会の発展があった。そしてブルガリアにとって最後のテーマは、自然の美しさと国際観光の発展である。」と新聞は続けている。

パビリオンの装飾と中心となるのは、民族衣装を身にまとったブルガリアの少女 15 人と少年 5 人が、日本の若い女性 10 人とともに来場者の案内と情報提供を行っている。

この記事は、展示品のいくつかについての説明と解釈を提供し、トラキア人と原ブルガリア人の歴史的経緯を簡単に説明し、カザンラク近郊のトラキア人の墓の模型について説明し、スラブ文B字がどこでどのように作成されたかを説明している。

* * *

本日、万博が正式に開会され、明日から一般公開される。ブルガリアを含む77か国、国連を含む数十の国際機関、そして大企業や事業体が参加するEXPO-70は、9月13日までの6ヶ月間開催される。

オープニングには1万人以上が参加した。「名誉あるゲストの中には、昭和天皇、皇太子明仁親王、佐藤栄作首相、政府関係者、各国大使館の長、そして多くのゲストが含まれていた」と、BTA特派員ディミトリ・イワノフが3月14日に大阪から報告した。

佐藤栄作氏は開会式で、「国際博覧会は常に文明の進歩に貢献してきたが、今、世界の異なる人々や地域間の深い理解と信頼がますます必要になっている。EXPO-70が真に国際的な対話の中心となることを心から願っている」と述べた。

開会式では、主催者側から、日本万国博覧会組織協会の石坂会長、衆議院議長の船田中氏、大阪府知事の左藤義詮氏らが挨拶を述べた。彼らは皆、この博覧会の非常に充実したパビリオンにより、来場者が世界の文明の成果をより深く知ることができ、人類の進歩に貢献するだろうと確信している。昭和天皇は、その後、EXPO-70の成功を心から祈念された。

ソフィア、1970年5月15日　ソフィア空港で、ブルガリア閣僚評議会議長トドル・ジフコフの大阪万博出発を見送る。
写真：ウラジミル・イワノフ、BTA

公式の挨拶、祝砲、ファンファーレ、色彩、そして香水までが組み合わされた厳粛な式典は、衛星経由でさまざまな大陸に中継された。日本のテレビでは、数分間のインタールードとして、我がバルカン山脈を象徴する4つ山頂を持つ青みがかった宮殿のショットを使用している。この宮殿は、ブルガリア語、日本語、英語で「ブルガリア」という碑文が設置され、開館前日にようやく完成した。「実際、人口1億人の日本で8000万人のテレビ視聴者は、昨日放送されたブルガリアに関する映画、先週日本の新聞に掲載されたブルガリアに関する14の記事や情報、そして土曜日の『国際フェスティバル』を通して、我が国について多くのことを学んだ。このテレビフェスティバルのコンサート会場では、ヨーロッパ大陸はブルガリア、アメリカ大陸はメキシコ、アフリカとアジアはインドネシアのアーティストが代表を務めた。EXPO-70に参加した残りの74カ国は、パビリオンホステス色々な諸国からの少女たちによって、華やかな舞台を彩った」とディミトリ・イワノフは書いている。

展示会のグランドオープンは、30,000平方メートルの面積を誇る世界最大の透明屋根の下、展示会の中心に位置する、いわゆるシンボルゾーンで行われる。長さ 1 キロメートルのゾーンの主な建築要素は太陽の塔で、その周りに青春の塔と母性の塔がある。「本物の太陽が出て、凍えていた来場者を温めるまで、1時間にわたる式典の間、太陽のシンボルは様々な解釈の対象となっていた。伝統的な信仰では太陽の女神の直系の子孫とされる日本の天皇の象徴だと解釈する者もいれば、西ドイツの生産量を追い越し、資本主義国の中ではアメリカに次ぐ第2位、ソ連を含めば世界全体では第3位となった日本の経済力の高まりを象徴するものだと解釈する者もいる」とBTA特派員は指摘する。

高さ約10メートルのロボット2体が100メートルのステージに登場し、フォーラムに日本の鳴き鳥の歌声の合唱を響かせ、多数の反射板と舷窓が光り、空気が香りのミストで満たされると、主催者の技術力について印象は高めていて、さまざまな国籍の人々が書いた未来への願いが書かれたメモと香りのついた紙吹雪の雨が空から降ってくる。

飛んでくる願い事のメモの1つにはこう書かれている。「平和に向かって前進することはどれほど難しいことか。そして平和がなければ進歩はない。島津さん、18歳、日本。」(...)

社会主義国からはソ連、ブルガリア、チェコスロバキアが正式に博覧会に参加した。キューバも代表されている。我が国が世界博覧会に公式に参加しているのは初めてだ。これは、地理的にも社会政治的構造的にも近い国や遠い国とのブルガリアの経済関係の拡大に対する反応です。私たちの参加は、ブルガリアに対する経済、観光、文化への関心の高まりに応えるものでもある。

1時間の式典が終了して間もなく、祝賀会に招待された数百人のゲストがブルガリア館に押し寄せた。アルミニウムとガラスでできた四の山頂のピラミッドは、最近ジャーナリストらが「内部は驚くほど広々としている」と評していたが、現在では驚くほど狭く、ブルガリア料理レストランにテーブルは十分ではないことが判明した。開館後わずか2時間で、14,000人がブルガリア館を訪れた。

* * *

「大阪(日本)で開催されたEXPO-70万国博覧会の公式開会直後、アメリカのテレビ局はブルガリア館を国営放送局(NBC)のチャンネルで放映した。一方、米国のコロンビア放送局システム「CBS」は、大阪から直接衛星中継し、特使チャールズ・クラルト氏の報告の中で、博覧会のブルガリア料理レストランの人気とブルガリア料理の魅力についても言及した」と、BTAはニューヨークの特派員からの情報を引用して報じている。

* * *

「昨日の正式な開幕に続き、本日、EXPO-70世界展示会は五つドアを開き、25万人の来場者が訪れた。推定来場者数の数字に新たな修正が加えられた。9月13日の展示会閉幕までの6か月間に6,000万人の日本人と外国人が大阪に到着すると予想される」と大阪のBTA代表ディミトリ・イワノフ氏は3月15日に書いた。

彼は、第 21 回万国博覧会である EXPO-70 に対するウ・タント国連事務総長の挨拶を出版のために転送します。第 1 回万国博覧会は 1851 年に最初の資本主義国であるイギリスで開催され、そこで初めて技術革命が起こった。当時と現在との違いは、示された技術レベルだけでなく、統一テーマにおいても顕著です。1世紀以上前、当時「世界の工場」であったイギリスは、他国に対する優位性を示した。 EXPO-70のエンブレムは五大陸統一の願いを象徴する五弁の桜で、モットーは「世界は一つ人類の進歩と調和」です。そのため、我が国は、他の76か国と香港、国連や欧州共同市場を含む4つの国際機関、カナダとアメリカの6つの州と、アメリカとヨーロッパの3つの都市とともに、各国の商工会議所、個々の大企業、法人から独立して代表して同展示会に参加している。

ブルガリア館は、770万人の住民を抱え日本で2番目に人口の多い都市である大阪市から20キロメートル離れた、3,300デカレの広さを誇る「未来都市」と呼ばれるEXPO-70の敷地内にある。正午前にパビリオンが群衆に門戸を開くと、最初の来場者が厳粛に迎えられ、古い慣習に従ってボウルに水がかけられ、そして、遅ればせながら、日本の国営放送局 NHK や関西テレビを含むラジオ、新聞、テレビの記者たちが見守る中、マルテニツァが配られ、各局の番組でこの色鮮やかな儀式の映像が放送された。ブルガリア宮殿とは何ですか?メディアはこの問題についてかなり多く報道し、書いている。しかし、最初の訪問者である池田明子さんの反応はこうだった。「とても気に入りました」という21歳の明子さんの最初の言葉だった。昨年彼女はソフィアに滞在し、ソフィア大学でバルカン半島の歴史を学ぶために入学した。1か月後には再びブルガリアに向けて出発する予定だったので、ブルガリア館にこんなに早く到着したのだ。「4つの青いピラミッドはまさにスタラ・プラニナ山脈の山頂を彷彿とさせます」と彼女は説明を続けます。入り口に向かい、鳩の群れを描いた彫刻の前を通り過ぎると、バラの香りが漂ってくるような気がする。しかし、これは錯覚ではなく、池の四つの縁に沿ってせせらぎを奏でる香り高い水から漂ってくる香りだと気づく。ブルガリアを訪れたことがある人なら誰もがそう感じるだろう。そうでない人も、未知のものへの好奇心が勝ってしまうだろう。一歩足を踏み入れると、好奇心はすぐに報われる。民族衣装をまとったブルガリアの少女たちが、プロジェクタースクリーンの背景に立ち、笑顔で迎えてくれる。スクリーンからは児童合唱団の歌声が流れ、視覚的にも聴覚的にも、この楽観的な雰囲気をさらに高めている。

ソフィア、1970年5月15日　日本へのフライトを前にしたブルガリア閣僚評議会議長トドル・ジフコフ
写真:ウラジミル・イワノフ、BTA

それから、歴史を学ぶ学生として私にとって本当に興味深いものがある。カザンラク近郊のトラキア人の墓の模型、ブルガリアの1300年前の歴史、紀元前9世紀から4世紀の金の財宝、ボヤナ教会のフレスコ画、古いイコンなどである。（...）2階では、ブルガリアの現在を紹介している。ブルガリアは、農業が成功し、産業が発展し、そして最終的には、外国人の観点から見ると、自然の美しさと国際的な観光の国でもあると言えます。パビリオンでは、関連分野の専門家の関心を引く電子計算機　ELKA などの最新機器も展示されている。「出口に近づく一般人は、ブルガリアの名物料理とワインを提供するブルガリア料理レストランに魅了される」と東京生まれのアキコさんは結論づける。

* * *

「本日、ブルガリアが大阪万博EXPO-70に出展するパビリオンに50万人目の来場者が訪れました。開幕から12日目で50万人という来場者数は、我が国にとって初の公式万博参加としては文句なしの成功です」と、ディミトリ・イワノフ氏は3月26日付のBTA通信に記した。同氏によると、ブルガリアのEXPO-70での成功は、機械式カウンターのデータによって裏付けられており、ブルガリアのパビリオンは博覧会で最も多くの来場者を集めた場所の一つであることが明らかになった。「気づかないわけにはいかない」と毎日新聞は書き、この意見は京都新聞、産経新聞、読売新聞、ジャパンタイムズ、石油化学、中日新聞、福島民報などの新聞の朝刊にも掲載され、館内や雰囲気の詳しい説明も掲載された。この評価は、報道機関だけでなく、他のマスメディア（テレビ局「NHK」と「関西」はブルガリア館とブルガリアに関する新番組を放送）、来場者との個人的な会話、感想をまとめた書籍、そして全体像を補足するために、日本企業が博覧会のブルガリア館からの眺めを収めた絵葉書を発売しているという事実によっても裏付けられている。そして、これらの企業は、一般の人々が求めているランドマークの景色だけを印刷している。

* * *

4月4日、大阪万博のブルガリア館をチェコスロバキアソシエテ共和国のルドヴィーク・スヴォボダ大統領、ヤン・マルコ外務大臣とその随行員らが訪問した。チェコスロバキアのゲストは、EXPO-70　でのチェコスロバキア SSR 建国記念日の祝賀に際し大阪を訪れている。この機会に祝賀会の後、チェコスロバキアからのゲストはソ連とブルガリアのパビリオンを訪問した。彼らは、ブルガリアのEXPO-70参加を担当する政府委員アヴァクム・ブラニチェフ氏の歓迎を受け、民族衣装を着た少女たちが花束とパビリオンのバッジを贈呈した。大統領は展覧会を視察した後、「貴館は、この素晴らしい国の人々が社会主義建設の年月の間に成し遂げた成功をはっきりと示している。心からお祝い申し上げます。」と述べた。

午後には、100万人目の来場者を迎えるもう一つの祝賀会が行われる。カウンターが 999,990 を示し、最後の 100 万になるとき、入口で列に並んで待っている人たちは、誰が私たちのパビリオンの 100 万番目の訪問者になるのかを見ることになる。それはは広島県三次市出身の50歳の日本人女性、渡辺昌子さんであることが判明した。彼女と孫は政府委員ブラニチェフ氏にパビリオンに案内され、贈り物を受け取った。

渡辺さんは、EXPO-70で最初に訪れたパビリオンがブルガリア館だったと語り、テレビでブルガリアに関する番組を3回見て興味を持ったのがきっかけだったという。写真記者や映画記者は100万人目の来場者の写真を撮るのに長い時間を費やし、日本の新聞社の記者はマイクを手に彼女に質問し、200万人目の来場者の最初の数100人はすでに入場を開始している。

* * *

「万博の理念は数十年にわたって変化してきた」と、大阪万博特使ディミトリ・イワノフは1970年4月6日に記している。「150年前、ヴィクトリア女王の支援の下、ロンドンで開催された第1回万博では、展示品の中に、当時の最新鋭の大砲など、現代の来場者を驚かせるものがあった。1889年にパリで開催された第9回万博に、もはや軍事デモンストレーションの気配はなかった。フランスは万博に特別に建設されたエッフェル塔でその工学技術力を披露し、新しい美術館や演劇作品によって、博覧会の伝統に文化的要素を加えていた。セントルイスで開催されたアメリカの万博では、自動車時代の到来を告げた...」。

* * *

4月13日、大阪万博で国連デーが祝われました。同組織のウ・タント事務総長はフェスティバル広場で、この展示会の目的は国際理解の精神に合致しており、国連の本質と一致すると述べた。ウー・タン氏は、これがアジアで開催される初の万国博覧会であり、過去最高の数の国々が参加しているという事実に触れた後、EXPO-70で国連の青い旗がはためき、祝祭広場で平和の鐘の音が聞こえることに満足感を表した。この鐘は、原子兵器が初めて使用されたこの地域の何千人もの子供たちが集めた小銭から鋳造されたもので、国連に寄贈されたが、展示会の開幕前に日本の主催者が展示品に臨時的に加えられるよう要請した。

ソフィア、1970年5月15日　大阪へ向けて出発するブルガリア閣僚評議会議長トドル・ジフコフ
写真：ウラジミル・イワノフ、BTA

* * *

5月18日、ブルガリア人民共和国閣僚評議会議長トドル・ジフコフ氏を招いて大阪で公式晩餐会が開催された。イベント中、佐藤栄作内閣総理大臣がスピーチを行っている。「日本での展示会に、貴国は初めて参加される。他の東欧諸国よりもずっと早く、積極的に参加を決定された」と述べ、近年、両国間の関係や経済・文化面での交流が深まっていることを指摘した。「万博における貴国パビリオンが、多くの日本人をはじめとする来場者の方々から共感を呼び、高く評価されていることを承知しております。貴国パビリオンは、貴国の経済と文化の歴史と発展を示すとともに、スラヴ文字発祥の地であるこの国の輝かしい文化伝統を示す美術展示も含まれている。貴国の万博参加が御成功することを心からお祈り申し上げます」と、同氏は述べた。

トドル・ジフコフ氏もスピーチを行い、日本政府に対し、ブルガリアの参加に世界博覧会への温かい招待に対して心から感謝の意を表し、ブルガリアの大阪への参加がブルガリアと日本の絆と協力の拡大と深化に貢献するだろうとの確信を表明した。「ブルガリアと日本は遠く離れている。しかし、その大きな距離も社会制度の違いも、平和共存の原則に基づき、両国間の良好な政治、経済、文化関係を築く上で障害にはなりません」とジフコフ氏は述べた。

* * *

「今日、ブルガリアの建国記念日がEXPO-70でトドル・ジフコフ閣僚評議会議長の臨席のもと祝われた」とBTA特派員ディミト

1970年7月21日 ソフィア：EXPO 1970記念切手
写真：エヴゲニア・マレザノヴァ（BTA）

リ・イワノフが5月20日に報じた。

公式来賓ホールでは、ブルガリア首相は、日本万博政府代表の萩原徹氏と博覧会協会副会長の加納氏に迎えられ、歓迎を受けた。

午前10時に、ブルガリアと開催国である日本の国歌斉唱とともに公式式典が始まっている。祭り広場の鉄塔には、我が国の国旗と、白い背景に赤い太陽の円盤が描かれた旗が掲げられている。萩原氏とトドル・ジフコフ首相がスピーチ。

国歌斉唱の後、屋根付き円形劇場のスピーカーから日本の人気曲「さくら」の音が流れている。同じ瞬間、一人の日本人女性が公式演壇への階段を上り、首相の娘リュドミラ・ジフコワに花を贈呈した。ブルガリアの少女が広場の中央に現れた全長10メートルのロボット「デメ」に向かって歩いていく。デメは未来を象徴している。話したり、オーケストラの演奏を放送したり、空気を嗅いだりすることができ、また、EXPO-70の中心的な建築要素であるフェスティバル広場の空中ステージや脈動する噴水などの施設を遠隔操作する装置を持っている。

* * *

「ブルガリアは今日の日本のメディアにとって中心的な話題であり、ブルガリアの建国記念日である1970年万博とトドル・ジフコフ首相の訪日を記念して、我が国に関する膨大な資料や写真が掲載されている。デーリー読売紙は英語版12ページのうち5ページをブルガリアに割いている」と、BTA大阪特派員ディミトリ・イワノフ氏は5月20日に報じた。

新聞「毎日新聞」はブルガリアについて2ページにわたって記事を掲載した。ジャパンタイムズにも豊富な資料があり、我が国に関するニュースは日本語と英語で書かれた他の数十の日刊紙にも掲載されている。

「もちろん、日本のラジオやテレビは新聞よりも新鮮な情報で先を行き、EXPO-70におけるブルガリアの建国記念日に関する報道を放送した」とディミトリ・イワノフは書いている。彼によれば、日本のラジオ局はすべてこのイベントをニュース速報に含め、ブルガリアの話題に関する講演、インタビュー、その他の資料を個別に放送しているという。朝日放送テレビは関西テレビ、そしてテレビ局最大手のNHKとともに、お祭り広場での祝賀行事の特別番組を放送した。

* * *

「今日の日本の新聞は『万博半分が過ぎた』という見出しで、大阪万博の180日間の半分が過ぎたと報じている」

と6月15日のニュース報道には記されている。

これまでに2,700万人が同博覧会を訪れたとされ、この数字は前回モントリオールで開催された同時期のデータを上回っているという。現在までに3,968,000人がブルガリア館を訪れ、世界博覧会へのブルガリア初の公式参加の成功を証明した。

* * *

ブルガリアが世界博覧会に初めて公式参加したことの成果の一つは、組織的な観光の基盤が築かれたことだ。6月22日の報道によると、日本の団体がブルガリアを訪問する予定だという。

日本の大手旅行会社5社は、日本人観光客をブルガリアへ送る準備が整ったことを発表した。我が国は世界的に観光業で名を馳せており、最近ではブルガリア産の缶詰フルーツなどの輸入が増加し、日本でもブルガリアの人気が高まっている。ブルガリアのEXPO70での成功は、日本の人々の間で我が国への関心を高めた。

観光委員会代表のカラシェフ氏が日本の観光団体との契約条件を定め、ブルガリアと活発なビジネス関係を維持する「東京丸一商事」社が自費でブルガリア観光委員会の日本代表事務所を設立した。最初の日本人客が到着しているのは1971年予定している。

* * *

6月29日、日本はEXPO-70で建国記念日を祝い、古来の民族舞踊や子どもオーケストラのパレードなど、古い国の若々しい活力の象徴となる多彩なプログラムが披露された。

これまで、3か月間で3,200万人がEXPO-70を訪れた。これは、以前の博覧会や当初の予測を大幅に上回る数字であり、主催者の優れた組織力と博覧会のモットーである「人類の進歩と調和」の人気を裏付けている。

割合的に言えば、ブルガリアは全体的な成功において大きなシェアを占めている。これは、ブルガリア館への訪問者数と、3か月にわたるEXPOの日常生活における一連の事実の両方によって証明されている。その最後の出来事は、6月28日に祝われた「ブルガリアの結婚式」である。東京の歯科医である大塚広助と、EXPO-70の電気館で情報提供をしていた彼の婚約者和子は、私たちの館のレストランでブルガリアの結婚式を挙げることを決めた。ブルガリアの慣習に従ってEXPO参加運営者によって祝福され、その後、日本の伝統に従って、この機会のために即興で作られた詩「私たちの愛を御国に飛ばしましょう！」が朗読された。

* * *

7月16日、日本の昭和天皇は、東京の公邸から万博70の112館のいくつかを訪問するために到着し、世界博覧会のブルガリア展示を観覧した。

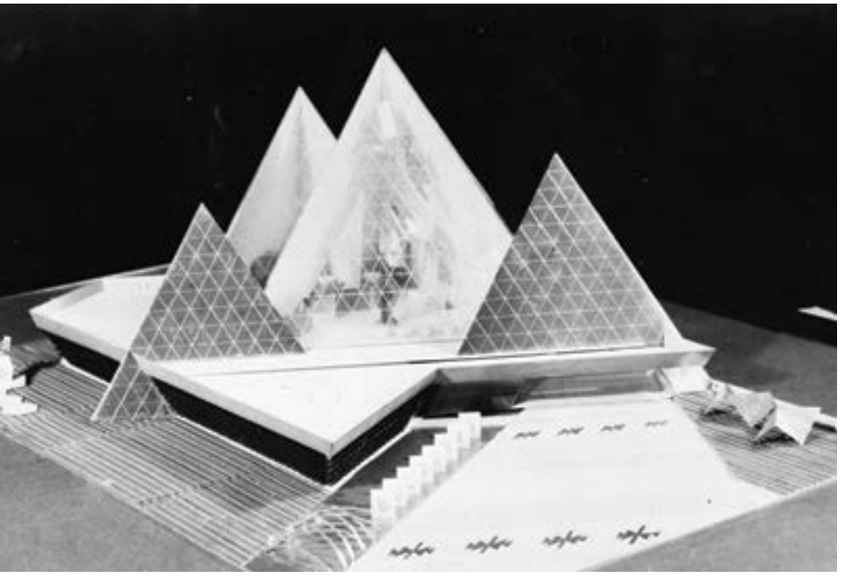
皇帝陛下は、民族衣装を着たブルガリアのインフォーマントガールズ、パビリオン管理者、館長のA. アンゲロフ氏に歓迎され、アンゲロフ氏は当館の展覧会のテーマである我が国と新社会主義ブルガリアの歴史、産業と農業、国際観光、経済と文化生活のさまざまな分野での成功などについて、当館の展示内容を紹介した。

これはブルガリア館にとって過去最高の来場者数であり、同館は最近、皇太子や皇室関係者、著名な公人や政治家も賓客として迎えている。

我が国のパビリオンは、3月14日の博覧会開幕から7月16日までの間に540万5千人の国内外の来場者を集め、天皇陛下が訪問される予定の海外の博覧会12カ所の中に選ばれた。

これまでのところ、ブルガリア館への訪問者数は博覧会の来場者のかなりの割合を占めており、博覧会のオープニング数か月間は 12 ～ 14 パーセント、その後は 13 ～ 15 パーセントとなっている。

聴衆の関心はマスメディアの資料やプログラムに反映されており、先週だけでも週刊誌 3 誌と月刊誌 2 誌がブルガリアとその参加に関する資料を掲載した。ABCテレビでは1番組、読売テレビでは同じテーマの番組を2番組放送



1969年1月10日 ソフィア：大阪万博に建設予定のブルガリア館模型
写真：ヴラディミル・イヴァノフ（BTA）

した。ブルガリアに関する放送は、いくつかの国営ラジオ局の放送にも含まれている。

* * *

7月23日、日本の新聞、ラジオ、テレビの記者の大きな関心のもと、「日本の子どもたちの目から見たブルガリア」と「ブルガリアの子どもたちの目から見た日本」をテーマとした子ども絵画コンテストの記者会見が開催された。

EXPO-70ブルガリア館長A.アンゲロフ氏は、出席者に対し、コンテストの内容と目標について説明した。その目標は「友情のための絵」という発表方法にも反映されている。数十もの質問に答えながら、彼は、我が国の名前がEXPO-70でのブルガリアのプレゼンテーションの成功を通じて日本で広まったこと、これまでに我が国のパビリオンを訪れた約600万人の訪問者の大部分が子供たちであること、そして、このコンテストの目的は、大阪で6か月間開催される世界博覧会を過ぎても生き続ける最年少の子供たちの心に痕跡を残すことであると指摘した。日本では佐藤大阪市知事と教育委員会の後援で開催されている。

* * *

ブルガリアのEXTPO-70参加により企画された「ブルガリア週間」が、人口数百万人の日本の都市、大阪の梅田地下街で始まったと、BTA特派員が8月4日に報じた。•

梅田地下ショッピングセンターは、地下と地上の交通が交差する地下街で、深夜まで大都市の鼓動を感じることができる。毎日100万人がここを通過する。

現在、梅田ではブルガリアの商品が販売され、ブルガリアに関する資料が配布され、ブルガリアの音楽やブルガリアに関する一般情報が音響システムで流され、博覧会の主催者によって用意された特別なEXPOコーナーにはブルガリアと日本の国旗が飾られている。EXPO-70のブルガリア館にはこれまでに600万人以上が訪れており、梅田地下街の通行人数十万人はここでブルガリアに関する最初の直接情報を受け取っている。

* * *

8月15日、ブルガリア館において、日本とブルガリアの子どもたちによる「友情の絵」展が盛大に開幕した。応募された絵は、ブルガリアの12歳までの子どもたちの絵50点と日本の12歳までの子どもたちの絵50点で構成され、「日本の子どもたちの目を通して見たブルガリア」と「私たちの目を通して見た日本」というコンテストの優勝者によるものだ。このコンテストでは、それぞれの国の子どもたちが想像する相手国を描きます。展覧会のグランドオープンには、左藤義詮大阪府知事と妻で地元審査委員長を務める芸術家佐藤由起子氏、万国博覧会に参加した70カ国政府のEXPO-70政府代表、日本博覧会協会の代表者、絵画で賞を受賞した50人の日本の子供たちとその両親、そして日本の主要新聞社、ラジオ局、テレビ局の記者らが出席した。

ブルガリア館長のA・アンゲロフ氏と佐藤知事が三色リボンをカットし、出席者を展示鑑賞に招き入れました。その後、芸術コンクールに参加した若者たちに賞と証明書が授与され、来賓とジャーナリストにカクテルが振る舞われた。

授賞式後のスピーチで、大阪府知事は、ブルガリアが初めての万博参加で驚くべき成功を収めたこと、ブルガリア館がEXPO-70で最も人気の高い館の一つであること、そして、完成した児童絵画コンテストは、この博覧会のモットーである「人類の進歩と調和」の実現に向けたブルガリアの新たな貢献であると述べた。万博閉幕後は大阪と東京でも展示される予定である。

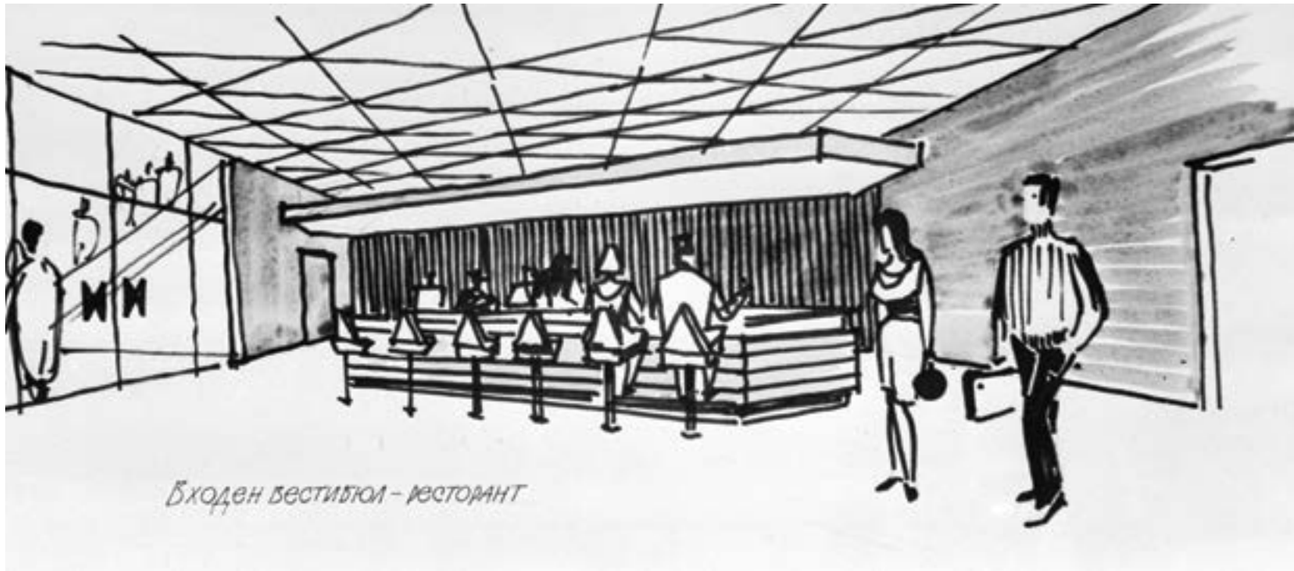
* * *

9月13日、万国博覧会は閉幕した。これはヨーロッパ大陸とアメリカ大陸以外で開催される初の万国博覧会であった。参加国（70カ国以上）、各省、州、都市、国際機関、業界団体の数は記録破りであり、来場者数も同様に新記録を達成した。そのうち約7分の1にあたる900万人以上が、世界博覧会に初めて出展されたブルガリア人民共和国館も訪れた。ブルガリアと日本は14,000 km、つまり 7 本の子午線で隔てられている。ブルガリア時間の正午、つまり現地時間の夕暮れ時に、ブルガリア館の前で我が国の国歌が鳴り響く中、三色旗が降ろされ、展示会の閉幕が宣言された。

ブルガリア参加担当副総監のA・アンゲロフ氏は、183日間にわたる万博はブルガリアにとって初の世界博覧会参加の成功を証明し、ブルガリアの調和のとれた発展と進歩が900万人を超える日本人やその他の外国人に示されたことから、この参加は大きな政治的表明であると指摘した。来場者数はブルガリアの人口を上回る。

ナチョ・パパゾフ駐日ブルガリア大使は、我が国のパビリオンに強い関心を示し、高く評価し、ブルガリアと日本、ブルガリアと世界の間に生きた架け橋を築いてくれた多くの日本人と外国人の来場者に感謝の意を表し、また我が国のパビリオンを主催したブルガリア人と日本人の関係者にも感謝の意を表した。

1969年1月10日 ソフィア：ブルガリア館のエントランスホール・レストランのスケッチ
写真：ヴラディミル・イヴァノフ（BTA）



ヤニツァ・フリストヴァによるインタビュー

EXPO'70大阪万博におけるブルガリア館の音響・映像セクションを手がけた技術者イヴァン・ポプヨルダノフ氏：

「大阪万博への参加を通じて、ブルガリアと日本の協力関係は新たな次元へと進化した」

2008年 アポロニア芸術祭にてイヴァン・ポプヨルダノフ
写真：エレナ・ディコヴァ（BTA）

「55年前の時代に対するいかなる政治的な憶測や不必要な郷愁も抜きにしても、1970年の大阪万博への参加以降、ブルガリアと日本の経済協力はまったく異なる次元へと進化したことは、紛れもない事実だと確信しています」と語るのは、55年前に日本・大阪で開催された国際博覧会で、ブルガリア館の音響・映像セクションを手がけた技術者イヴァン・ポプヨルダノフ氏である。彼によれば、当時のブルガリア館の展示は「まだあまり知られていなかった国を、過去・現在・未来を備えた近代的な国家として紹介する」という願いに基づいていたという。さらにポプヨルダノフ氏は、建築の面から見てもブルガリア館は「全大陸から集まった80を超える国々のパビリオンがひしめき合うバベルの塔のような状況の中で、間違いなく最も印象的な存在だった」と強調している。

イヴァン・ポプヨルダノフは1938年8月14日、ソフィアに生まれた。1956年に高校を卒業した後、ソフィア工科大学に入学する。その当時、海外の高等教育機関に進学できることが公布され、彼はチェコスロバキアのプラハ高等技術研究所を目指し、1962年に映画・テレビ技術専攻で卒業した。

彼の45年にわたる職業人生のうち、17年間は映画業界での活動に従事した。1963年、プラハから帰国後、彼は劇映画スタジオ「ボヤナ」に録音部門の技師として就職した。1970年の万博プロジェクトに参加するため、一時的にこの職を離れたが、万博からの帰国後には劇映画スタジオ「ボヤナ」の主任技師に任命され、1972年5月末には同スタジオの所長に昇進した。

1984年から1988年にかけては、再びプラハに赴任し、ブルガリア文化センターの所長を務めた。

また彼は、ブルガリア商工会議所の主任スペシャリスト、国営映画制作組織「ブルガリア映画」の副総支配人、文化委員会のグループリーダーなども歴任した。

彼のキャリアは、ブルガリア国営テレビ（BNT）とも深く関わりがあり、副総局長、業務局長、そして総局長を歴任している。また、アレコ・コンスタンティノフ風刺劇場の館長も務めた。

雑誌『LIK』のインタビューで、ポプヨルダノフ氏は大阪万博に至るまでの道のりと、1970年の万博でブルガリアがいかに紹介されたかについての感動を語っている。どのようにして演出家ヴァロ・ラデフの構想を実現するチームに加わったのか、そしてブルガリア館がどのような印象を残したのか、さらにはなぜブルガリアがこうした国際的なフォーラムに参加することが重要なのかについても、深く掘り下げている。

ポプヨルダノフ氏、1970年の大阪万博でブルガリア館の音響・映像展示をご担当されましたが、どのようにしてこのプロジェクトに参加することになったのですか？

最近、日本が再び万国博覧会の開催国となるという報道を目にしたとき、思わず1970年の大阪万博の記憶を振り返っていました。当時、私は幸運にもブルガリア館の制作チームの一員として参加する機会を得たのです。

1969年5月の終わりごろ、当時私が6年間勤務していた映画センター（ブルガリア国立映画スタジオ）で、ヴァロ・ラデフ氏のチームから連絡があり、彼が私と会いたがっているという話を聞きました。

当時、ヴァロ・ラデフは『桃の盗人』『王と将軍』『最も長い夜』といった映画で成功を収めていた、ブルガリアの著名な映画監督でした。彼に会ったとき、私は非常に驚きました。彼の提案は、1年間職場を離れ、1970年の大阪万博でのブルガリア館のプロジェクトに加わってほしいというものでした。しかも、私の任務は、ブルガリア館展示の音響・映像全体の実現を担うというものでした。確かにこれは、私の専門分野に深く関わる内容でしたが、日本という遠く離れた地でその責任を果たせるか不安でした。しかしヴァロ・ラデフ氏には、人を信じさせ、鼓舞する特別な才能がありました。彼にはカリスマ性だけでなく、どんなプロジェクトでも、周囲の人々に最大限のプロ意識で取り組ませる力がありました。

オンラインインタビューで、1年間日本に滞在されたとお話しされていますが、その間のご活動について詳しく教えてください。

1969年8月の初め、私は大阪で建設中のブルガリア館のチームの一員として日本に向かいました。到着してみると、建設は大幅に遅れており、展示の音響・映像設備に関して、下請け企業の契約も未決定の状態でした。東京での最初の2週間は、「シャープ」「ソニー」「東芝」など、提案を出していた複数の日本企業と集中的に打ち合わせを行いました。8月末には、展示で使うフィルム映像の上映などを中心とした音響・映像設備の実施企業として、「東芝」を正式に選定しました。この展示の実現における難点は、すでに設計が決定していた「交差するピラミッド」という建築構造の中で、想定されたスクリーンサイズを実現するための距離を確保するには、「背面投影（リアプロジェクション）」という方式しかなかったことでした。

技術的な詳細を詰める間、ブルガリアではヴァロ・ラデフのチームの構想に基づいたテーマ別の映画が撮影・編集されていました。、EXPO'70から55年が経過した今でも、あのときの展示のコンセプトの核心はよく覚えています。もちろん当時は一定のイデオロギー的な制約もありましたが、それでも「まだあまり知られていない国・ブルガリアを、過去・現在・未来を備えた近代国家として紹介する」という強い意志が感じられました。

ブルガリア館の建築設計を手がけたのは、建築家トドル・コジュハロフ氏とエヴロギ・ツヴェトコフ氏でした。80以上の国々のパビリオンが並ぶ「バベルの塔」のような会場の中でも、彼らが

1970年万博向けブルガリア館の表紙ブローシャ
写真：イヴァン・ポプヨルダノフ個人アーカイブ

手がけたブルガリア館はひときわ目を引く存在でした。

今振り返ってみると、当時の万博でのブルガリア参加には非常に多くの人々が関わっていたことに改めて気づかされます。投資を担当したブルガリア商工会議所（アヴァクム・ブラニチェフ氏）、建築家のコジュハロフ氏とツヴェトコフ氏、美術家のイヴァン・ラデフ氏、ボリス・キタノフ氏、イヴァン・ボグダノフ氏、ディミタル・メハンジイスキ氏、映画制作チームのイヴァン・ハラチェフ監督、撮影監督のボリス・ヤナキエフ氏など、名前を挙げればきりがありません。これは、見事なチームワークの証でもあります。

要するに、多くの人が、それぞれの役割をしっかり果たしていたのです。

日本での約8ヶ月間の滞在（途中2回一時帰国しましたが）は、私にとって忘れられない体験となりました。この国はあらゆる面で印象的でした。第二次世界大戦からわずか20年も経たないうちに、日本はインフラが整った超近代国家となり、先端技術の分野で目覚ましい成果を上げていたのです。

日本製品は世界中の市場に溢れており、そして何より印象的だったのは、超近代性と、日本独自の伝統的な生活文化が共存していたことです。規律と秩序、そして人々の礼儀正しさ、それらが、深い印象として心に残っています。

ブルガリアに帰国された後、どのようにしてその後のキャリアが変化したのでしょうか？

1970年5月末、EXPO'70でのブルガリアのナショナルデーが終了した後、私はブルガリアに帰国しました。そして同年9月には劇映画スタジオ「ボヤナ」の主任技師に任命され、2年後にはそのディレクターに就任しました。こうして私は合計で17年間、ブルガリア映画業界での経験を積みました。

簡潔に表現するならば、1970年の大阪万博は、当時の音響・映像技術の成果を象徴する祭典でした。

この経験を通して得られた知識とスキルは、博物館の展示設計や文化的・歴史的名所のプロモーション手法の見直しに活かされることになりました。その点において、ヴァロ・ラデフ氏とそのチームの貢献は非常に大きかったのです。

1981年には、ブルガリア建国1300周年を記念して「フェスティバル・ホール」にて大規模展示「1300年のブルガリア文化」が開催され、最先端の音響・映像技術を用いて我が国の文化遺産の長い歴史が紹介されました。

さらに1985年には、プラハのARGCENTRUMの同僚たちとの協力で「ツァレヴェツ　音と光」プロジェクトが開始され、現在でもヴェリコ・タルノヴォの見どころとして継続されています。

このような世界博覧会のようなイベントに国家が参加する意義とは何でしょうか？

国家が万博のような国際的イベントに参加する意義について問われると、私はいつも、1893年のシカゴ万博でのブルガリア参加に対するアレコ・コンスタンティノフの皮肉な言葉「僕たちもちゃんと［さらされた］ぞ」を思い出します。しかし現代のグローバル化した世界においては、このような変化と技術進展の流れに加わらなければ、国家は自らを孤立に追いやり、発展や自己評価の機会を逃すことになります。

政治的な憶測や過度な郷愁を抜きにしても、1970年の大阪万博への参加を契機に、ブルガリアと日本の経済協力が全く新しい次元に発展したという事実は、私にとって疑いようのないものです。

2012年9月5日 ソフィア：アレコ・コンスタンティノフ劇場再オープン式典でのイヴァン・ポプヨルダノフ
写真：ヴラディミル・ショコフ（BTA）

EXPO’70でのブルガリア国営ラジオ児童合唱団の忘れがたい出演

1970年、大阪万博の開催期間中、フリスト・ネデャルコフ氏の指揮のもと、ブルガリア国営ラジオ児童合唱団が出演し、演奏を披露しました。若き合唱団員たちの歌唱力、その声の彩り、そして高いプロフェッショナリズムは、日本の聴衆に忘れがたい印象を残しました。雑誌「LIK」では、当時のメディアに掲載された記事や、当時を知る関係者の記憶を通じて、この異国でのツアーのハイライトを紹介します。

横浜港に合唱団が到着

「本日、横浜港にソビエト船『ハバロフスク』が入港し、日本の聴衆に大人気の40名の小さな歌声たち、ブルガリア国営ラジオ児童合唱団が到着しました」と、1970年8月14日付のBTA通信の記事に記されています。同日の記事は、ブルガリア国営ラジオ児童合唱団の日本初訪問が1957年であったことを思い起こさせます。日本のジャーナリストによれば「言葉では表せないほどの成功」を収めた彼らは、1969年に再び日本を訪れました。その際、ブルガリアの子どもたちを感動的に見送った群衆の余韻がさめやらぬうちに、「再び来てくれるのだろうか、そして、それはいつなのか？」という声が報道に取り上げられました。

1970年の横浜到着の数週間前から、今回のツアーを主催する「日本電波ニュース」の関係者たちは、コンサートの日程についての電話や手紙での問い合わせに対応し続けていました。

今回が3回目の訪日となる小さな歌手たちは、日本全国のさまざまな場所で20回以上の公演を行う予定であり、その初回は沼津市民文化センターの大ホールでの開催です。日本では、観客から高い人気を集める児童合唱団の21曲を収録したLPレコードが販売されており、過去の来日時に録音された2枚のレコードも引き続き広く流通しています。

1970年大阪万博公式ガイドブックに掲載されたブルガリア館ページ
写真：イヴァン・ポプヨルダノフ個人アーカイブ

ブルガリアがEXPO'70で歌う

…祖国よ、祖国よ、こんなにたくさんの日光を集めたのはなぜだろう！」

心に響く、魅力的な子どもたちの歌声が、大阪で開催されたEXPO'70のブルガリア館に足を踏み入れた来場者の心を最初にとらえます。広いカラースクリーンから、喜びに満ちた子どもたちの顔と輝く笑顔が迎えてくれます。歌っているのは、ブルガリア国営ラジオ児童合唱団！

こうして始まるのは、BTAの発行する雑誌「Paraleli」1970年8月号（第34号）に全面掲載された記事です。

人々は足を止め、長く丁寧にその歌に耳を傾けたり、夢中で頭を揺らしたりします。中には、魔法のような歌声を録音しようと、自分のテープレコーダーのマイクを近づける人もいます。また、親切な案内係（彼女自身も元合唱団のメンバー）に合唱団について詳しく尋ね、レコードでその歌を手に入れたいと強く願う人も少なくありません。多くの来場者は、1967年と1969年の日本ツアーでこのブルガリアの小さな歌手たちを知っており、その芸術を深く愛しています。彼らの3度目の訪日が近いことも知っており、再会を心待ちにしています。

そして、ブルガリアの鶯たちがまた日本へやってきました！

今回は、東京での盛大な初演よりもさらに感動的な、特別な体験が待っています。世界的に有名な数々の演奏団体やアーティストと共に、彼らはEXPO'70の展示都市での単独コンサートに招かれているのです。万国博覧会という大舞台から、ブルガリアの子どもたちはその卓越した演奏技術を披露することになります。

ブルガリア国営ラジオ児童合唱団は、8月14日から9月26日まで日本に滞在します。この期間中、フリスト・ネディャルコフ指揮のもと、日本の主要都市を縦断しながら約25公演を予定しています。

また、東京ではLPレコード用のステレオ録音も予定されています。日本国内の音楽関係者の間でも大きな関心が寄せられており、静岡市では日本の合唱指導者向けに公開リハーサル兼コンサートが開催される予定です。過去の来日時に撮影された映画とあわせて、我が国の著名な児童合唱団における創作活動の技を学ぶ機会としても注目されています。

1986年1月31日 ソフィア：フリスト・ネデャルコフとブルガリア国営ラジオ児童合唱団
写真：ジヴコ・アンゲロフ（BTA）

ビリャナ・スタノイロヴィチ（当時、来日した合唱団の一員）：

パビリオン訪問の思い出は今も大切に残っています

今回の『LIK』誌の特集にあたり、ビリャナ・スタノイロヴィチさんに連絡を取り、彼女が55年前に「日出づる国」日本を訪れた際の思い出を語っていただきました。当時、彼女はブルガリア国営ラジオ・児童合唱団のメンバーとして来日していました。

「大阪万博EXPO'70のブルガリア館では、朝から晩までずっと、大スクリーンに映し出されるブルガリア国営ラジオ児童合唱団によるペタル・ストゥペル作曲の『ロディノ（祖国よ）』が来場者を出迎えていました。この歌はEXPO'70のスタッフの間でも非常に人気があり、9月1日に私たち合唱団が会場内の数多くのパビリオンを見学していたとき、皆が私たちに気づき、実際の歌声を聞きたいと声をかけてくれました…。私も36人のメンバーの一人であり、パビリオン訪問の思い出を今も大切にしています」と彼女は語ります。スタノイロヴィチさんは、その後ソフィアの第22高校を卒業し、1974年には東海大学の奨学金を得て日本での学びを続けました。この奨学金は、ブルガリア国営ラジオ児童合唱団のメンバーのために特別に設けられたものでした。「それ以来、私の人生は何らかの形で日本と結びついてきました。1994年から2018年までは、在ブルガリア日本大使館で9人の日本大使のアシスタントを務めていました」と語ります。

彼女はまた、EXPO'70に合わせて行われた1970年のコンサートツアーが、1969年から1972年にかけて行われた児童合唱団による3回の大規模な日本公演のひとつであることを振り返ります。彼女によれば、指揮者フリスト・ネディャルコフのもと、ブルガリア国営ラジオ児童合唱団のすべての公演が、小さな歌手たちの高い歌唱技術を証明する栄誉の舞台となっていたそうです。

ビリャナ・スタノイロヴィチ
写真：個人アーカイブ

1974年7月11日 ソフィア：ブルガリア国営ラジオ児童合唱団「私はブルガリア人」の演奏
写真：ディミター・ヴィクトロフ（BTA）

1988年5月12日 ソフィア：ブルガリア国営ラジオ児童合唱団コンサート
写真：ゲオルギ・カザコフ（BTA）

各公演後の拍手は鳴り止まず、少なくとも3曲のアンコールが披露され、公演の最後には大量の花かごや花束が舞台上に届けられました。

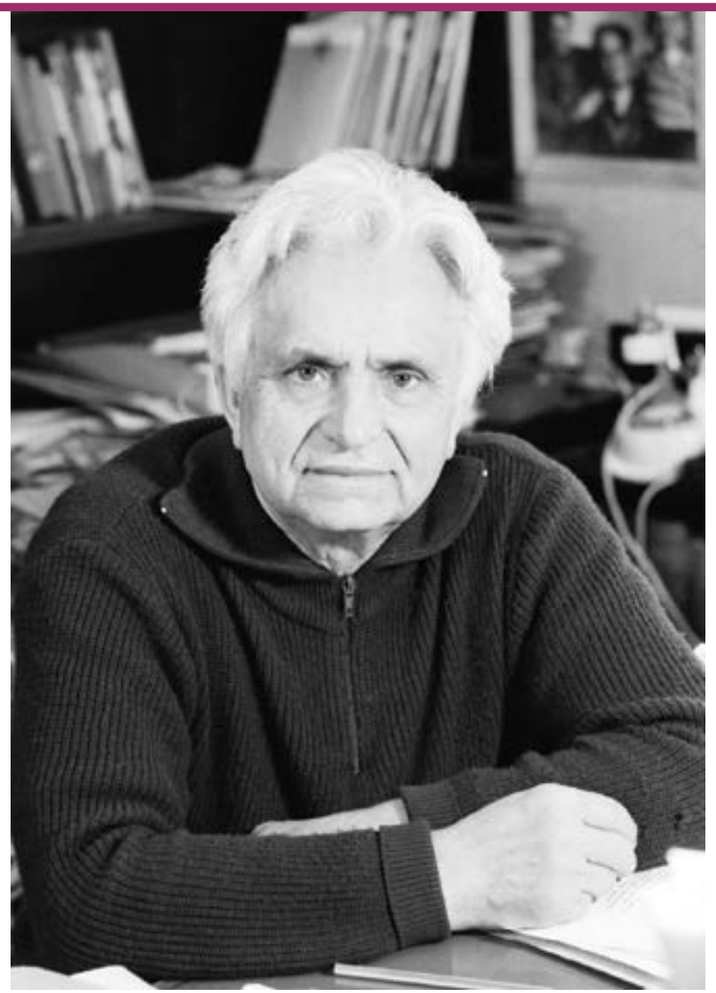
「日本人は花のアレンジメントにおいて素晴らしい技術を持っています。伝統的な日本の生け花の意味も『花に命を吹き込む』というものでしょう」とスタノイロヴィチさんは述べます。

「公演後、楽屋の前では多くのファンが待っていてくれて、その多くは私たちと同世代でした。私たちはお互いに記念品や連絡先、手紙の宛先を交換しました。こうした交流はいまでも続いています」と彼女は付け加えます。特に熱心なファンは、公演を追いかけて都市から都市へと同行することもあったそうです。「日本の同世代の若者たちは、自然体で親しみやすく、初対面では少し内気にも思えましたが、交流を重ねるうちに非常に好奇心旺盛で素直な人々だと分かりました。ほとんどの人がブルガリアについてあまり知らなかったので、私たちは母国やソフィアの街、家族、学校について話しました。そうすることで私たちの距離はどんどん縮まりました」とスタノイロヴィチさんは語ります。

彼女によれば、ブルガリア国営ラジオ児童合唱団は1967年から2007年までの間に計18回の日本公演を行っており、日ブル間の相互理解と音楽・文化交流の継続において重要な役割を果たしてきました。「だからこそ、日本の人々が『ブルガリア』という言葉を耳にすると、まず最初に思い浮かべるのはブルガリア国営ラジオ児童合唱団、ブルガリアのヨーグルト、そして日本の大相撲で活躍した力士カロヤン・マハリャノフ（琴欧洲）なのです」と彼女は語ります。

「EXPO'70のブルガリア館も、館の壁に映し出された合唱団の歌と共に、児童合唱団の認知度向上に大いに貢献しました」とスタノイロヴィチさんは言い添え、今日ではヴェネツィア・カラマノヴァ氏の指揮のもと、ブルガリア国営ラジオ児童合唱団が、音楽および文化の分野における日ブル交流を引き続き深めていることを伝えてくれました。

作家アセン・ボセフ（1986年）：
ラジオ児童合唱団は世界の奇跡



1988年4月4日 ソフィア：作家・児童文学作家・翻訳家アセン・ボセフ
写真：ボジダル・トドロフ（BTA）

1970年の日本ツアーにおいて、ブルガリア国営ラジオ児童合唱団には作家アセン・ボセフ氏が同行していました。1986年3月、合唱団の創設記念を祝う式典で彼が述べたスピーチは、ブルガリア国営ラジオのアーカイブに保存されています。同ラジオ局はその録音を『LIK』誌に提供してくれました。ここにボセフ氏のスピーチの抜粋を掲載します。

「私にとって、児童ラジオ合唱団は世界の奇跡です。私はその歌やコンサートが世界各地でどのように受け入れられているか、ブルガリアの奇跡として迎えられているのをこの目で見てきました」と語るボセフ氏は、若き歌い手たちの歌声がブルガリアの名を高めたと強調します。

ボセフ氏は、自身が1970年の日本ツアーに同行できたことは「忘れられない思い出」であり、人生における「消えることのない印象」だと語ります。「私たちは日本の北の島から南の島まで旅をしました。そしてコンサートの連続、連続、連続。私はそれらを何度も聞きました。聞いて、聞いて、聞いて、ブルガリアに帰国した後の最初のコンサートがあると聞いて、私はすぐにチケットを買い、また聞きに行きました。あなたたちの歌を聞きたいという欲求、渇望は、私の中で決して消えることはありませんでした」と振り返ります。

「私は、児童ラジオ合唱団の歌が日本でどのように迎えられたかの証人です。合唱団はこの国を征服しました」と作家ボセフ氏は語ります。彼の言葉によれば、「日本中が児童ラジオ合唱団の話題で持ちきりであり、日本のラジオやテレビ局も彼らに歌声を紹介する機会を提供してくれました。子どもたちが歌い、日本が耳を傾ける。学者、教授、作曲家、教師たちが彼らの演奏を聞く。日本ではラジオ児童合唱団が子どもの歌唱の「学校」と見なされ、その歌唱から学ぶべきだと日本人は考えたのです」と振り返ります。

アセン・ボセフ氏によれば、日本は技術面では超大国のような印象を与えるが、「その超大国が、ブルガリアから来た『超合唱団』から『超歌唱』を学ぼうとしたのです」と述べます。「ある晩のこと、500人の日本中の教師たちが集まり、フリスト・ネディャルコフ氏の講義を聞きました。どうしてこの『魔法の指揮者』が子どもたちからあんな声を引き出せるのかを学ぶために。そして彼らは座り、耳を傾け、学んでいました…」。ボセフ氏の言葉によれば、精密機器や機械工学、電子工学の分野でこれほど先進的な国が、他の何者でもなく、ブルガリアの児童ラジオ合唱団から学ぼうとしているという事実は、非常に誇るべきことであると。

また、ボセフ氏は、日本の子どもたちがブルガリアの合唱団をどのように迎えたかも語っています。「日本の子どもたちは、数百キロも離れた場所からやってきて、ホールに入れなくても、せめて合唱団が会場を出るときに並んで、挨拶し、プレゼントや花を手渡そうとしていました。私は、ある子どもが友達に会うために、前回の訪問で知り合った仲間に花やプレゼントを渡すために、列車で200キロ、300キロの距離を移動してきたのを覚えています」と述べました。アセン・ボセフ氏は、「これはブルガリアの声楽芸術、そして文化にとって驚くべき成功です」と結びました。

1988年4月15日 ソフィア：国際児童図書の日を祝うアセン・ボセフと子供たち
写真：ディミター・アルタンコフ（BTA）

LBブルガリクム

ブルガリアのヨーグルト ― トラキア人から火星まで

LBブルガリクム社提供写真

世界中のすべての大陸で、ヨーグルトといえばブルガリア、ブルガリアのヨーグルトといえば健康と力の象徴とされている。それはドイツやノルウェーから、日本、韓国、中国、タイ、そして遠く離れたグアテマラに至るまで同じである。何百万人もの人々が、国営乳製品会社「エル・ビー・ブルガリクム」が輸出するヨーグルトスターターにより、その卓越した効能を知っている。

ブルガリアのヨーグルトは、過去から現代に至るまで多くの著名人にも愛されてきた。たとえば教皇フランシスコは、幼少期に祖母が地元の薬局でスターターを買ってきて育てられたと語っている。さらに、遠く15世紀には、フランス王ルイ11世がブルガリアのヨーグルトによって苦しい胃痛を治したと伝えられている。この有名なブルガリアのスーパーフードは、昨年、NASAによって火星での製造と宇宙飛行士のメニューへの組み込みの可能性が調査された。つまり、ブルガリアのヨーグルトは過去、現在、未来にわたって生き続けるのである。

さまざまな研究によると、ブルガリアのヨーグルトは紀元前からブルガリアの地に住んでいたトラキア人によって作られていたとされている。しかし、世界的に知られるようになったのは20世紀初頭、ロシアのノーベル賞受賞生物学者イリヤ・メチニコフが、36か国を調査した結果、ブルガリアが最も長寿の人々が多い国であると結論づけたことがきっかけである。メチニコフは、その理由をブルガリアのヨーグルトの有益な微生物叢にあるとした。

この研究の過程で、発酵の原因となる微生物は何か、という問いが生まれた。その答えを導き出したのは、ジュネーブで学んでいたブルガリア人留学生、スタメン・グリゴロフ博士である。彼は数千回におよぶ実験の末、新鮮な牛乳をヨーグルトへと変える菌を単離することに成功した。彼は世界的な学者たちに招かれ、パリのパスツール研究所で発見を発表した。後に、この菌は発見者の母国にちなみ「ラクトバチルス・ブルガリクス」と名付けられた。

ブルガリア人は何世紀にもわたって自宅でヨーグルトを作り続けてきたが、1960年代に入ると産業的なヨーグルト生産が始まった。1960年に設立された国営企業「乳業工業総合体」（現在のエル・ビー・ブルガリクム）がその中心である。この会社は伝統を守りつつ、ブルガリア独自の乳製品レシピを発展させ、オリジナルのスターターによるヨーグルト製造ライセンスを国内外に提供している。「エル・ビー・ブルガリクム」は、世界で唯一、自社に研究開発センターを持つ乳製品メーカーであり、科学者たちが新しい有益なスターターを開発している。また、世界最大級の菌株コレクションを保有しており、それは乳製品の世界における最大の財産といえる。

近年、伝統の継承と業務の近代化を両立させる方針を採用し、その努力は成果を上げている。売上は増加し、収益も伸びている。最近では、若者たちが「エル・ビー・ブルガリクム」を志望する動きも強まっていると、CEOジフコ・ジフコフ氏が誇らしげに語っている。

ブルガリアがヨーグルトの故郷とみなされるもう一つの理由は、この地に発酵を促進する優れた菌株が豊富に存在することにある。ギリシャヨーグルトやトルコヨーグルトとは異なり、ブルガリアのヨーグルトは、カルシウム、マグネシウム、リン、水溶性ビタミンなどの有用成分を損なうことなく、独自の菌株と技術で作られている。さらに、ブルガリアのヨーグルトは、ギリシャやトルコのヨーグルトに比べてラクトバチルス・ブルガリクスの含有量が比較的高く、それがブルガリアヨーグルトを唯一無二でかけがえのないものにしている。

LBブルガリクム社提供写真

ブルガリアのダマスクローズ

ガリナ・ストヤノヴァ、カザンラク市長
写真：カザンラク市

**「この世を去るとき、唯一持っていけるものはバラだ。
バラはこの世のものではないからだ。」**

― 古代ペルシャのことわざ

ブルガリアのダマスクローズは、何世紀にもわたって世界中で知られている私たちの宝の一つである。そして、「バラがどこで育つか」と尋ねられれば、私たちはいつもカザンラクとバラの谷を思い出す。

カザンラクは、ブルガリアの美しく香り高い顔「バラ」、そして豊かな「トラキア文化遺産」という二つの宝物を結びつける文化的で歴史的な目的地である。バラの谷を訪れると、名高いローズオイルが生み出される無限に広がるダマスクローズ畑が広がり、同時にこの地の文化的・歴史的・考古学的遺産にも触れることができる。

バラ属（Roza）は、インド、中国、東アフリカ、アメリカの森林地帯や湿潤地帯に分布する小型の常緑樹から始まったとされている。優れた観賞価値と芳香を持つバラは、太古の昔から人々の心を惹きつけ、現在に至るまで愛され続けている。バラが人々の生活に広く取り入れられるようになったのは、数千年前、インダス川、アムダリヤ川、ナイル川、チグリス川、ユーフラテス川の流域に栄えた高度に発展した奴隷制国家からである。アッシリア、バビロニア、インド、中国、ペルシャ、エジプトでは、バラの花や実が香料、ワイン、茶、薬などに利用されてきた。

ローマ帝国の最盛期末期には、香水産業が発展し、カポア市がその中心地となった。バラ、ラベンダー、　クスノキ、ミントの香りは裕福なローマ人に常に寄り添っていた。これらの民族は、バラに神聖な起源を見出し、さまざまな伝説を生み出した。ギリシャの詩人アナクレオンによれば、古代ギリシャ人はバラの起源を、波間の泡から生まれた最も美しい女神アフロディーテに結び付けている。ローマ人は、バラは花と春と愛の女神ヴィーナスが愛する狩人アドニスに注いだ熱いキスから生まれたと信じていた。

カザンラクには、バラにまつわる伝説も残っている。ある若いダルヴィッシュがこの地を訪れ、美しいブルガリア娘に恋をしたが、運命により二人は永遠に引き裂かれた。彼は彼女への愛を記憶に留めるため、カザンラクのバラを母国の谷へと持ち帰ったといわれている。カザンラクの人々は、ダマスクローズがオスマン帝国支配初期に小アジアからこの地に持ち込まれ、最初に今日のシプカ市周辺に植えられたと伝えている。

カザンラク市提供写真

何世紀にもわたり、ブルガリアのバラ生産者たちは蒸留酒製造の技術を応用し、二重蒸留法によるローズオイル製造を発明・改良してきた。この技術によって、ブルガリアのローズオイルは世界で最も高品質で持続性のあるものとなったのである。

バラを讃える祭りには古い興味深い歴史がある。古代では、バラの美しさと香りを称える華やかな祝祭が行われていた。この伝統は中世、ルネサンスを経て受け継がれ、ブルガリアでもバラの美、若さ、喜びを讃える週と日が設けられた。

1903年、カザンラク市民は初めて「バラ祭り」を開催し、美、花、慈善をテーマにした。展示会が開かれ、バラの谷やバラ摘み、ローズオイル製造の様子を描いた絵葉書が販売された。

1930年代には祭りがさらに発展し、ブルガリア国鉄が割引切符を発行して「バラの週間」に全国からバラの谷への来訪を促した。

1971年、閣議決定によりカザンラクのバラ祭りは国民的祭典に認定され、「バラの女王」はブルガリアの象徴として正式に位置づけられた。

バラ祭り創設当初から現在に至るまで、「バラの女王」の王冠は、トラキア王たちの谷の支配者としての権威を象徴する欠かせないものとなっている。

バラ産業と世界に一つしかないバラ祭りのおかげで、カザンラクへの関心は国際的に高まっている。ブルガリア産ローズオイルは世界的な名声を博し、カザンラクは三大陸の都市と姉妹都市提携を結んだ。

1995年には、日本の福山市がカザンラクの国際的なファミリーに加わり、15年後には宗像市とも提携した。福山市との姉妹都市提携の証として、カザンラク市民は「日本人女性の像」と題された像を市の中心に設置した。

また、日本ではダマスクローズの香りを讃えて6月2日を「バラの日」と定めている。この日は日本語で「ロ・ズ」と発音され、バラ（ローズ）に似ているためである。

姉妹都市の市長たちが築いた絆に加え、日本人のブルガリア産ローズオイルとヨーグルトへの愛情も両国の友好を深めている。興味深いことに、日本の皇后雅子さまもブルガリアのローズオイルを使った化粧品を愛用している。調査によれば、世界各国のローズオイルを比較した結果、ブルガリア産が最も肌に良い成分を含んでいることが判明している。毎年バラ祭りの時期になると、カザンラクには日本からの観光客が訪れ、その数は年々増加している。中にはダマスクローズを故郷に持ち帰った人もいるが、バラの谷以外では育成が難しく、今のところ移植に成功したのは唯一、ある知られた庭園のみである。

こうして年月は過ぎてゆくが…
感動は色あせることなく続いている…
6月最初の週末に最高潮を迎えるバラ祭り！

カザンラク市提供写真

BTAのアーカイブより

ブルガリアと日本の外交・文化関係

ブルガリアと日本の外交関係は、1939年10月12日に樹立された。その後、1944年から1959年の間に一時的な中断を経て、ブルガリアは1964年に東京に大使館を開設し、日本は1966年にソフィアに大使館を開設した。これは、ブルガリア通信社（BTA）の「参考資料」部門の記録によるものである。両国の関係は、何十年にもわたり、外交、経済、貿易、投資の分野だけでなく、観光、文化、伝統と民俗の研究、そして両国民の日常生活や習慣の理解など、多岐にわたる分野で発展してきた。

ブルガリアの政治指導者による日本訪問、日本の皇室メンバーによるブルガリア訪問のニュース、両国間のさまざまなイニシアティブや協力に関する報道は、ブルガリア通信社のニュースの中でも重要な位置を占めている。雑誌『LIK』では、それらのうちごく一部ではあるが、両国間の精神的な絆の深さを示すエピソードを紹介したい。たとえ地理的に遠く離れていても、ブルガリアと日本の間には、強い結びつきが存在している。

1939年

「ブルガリア政府は、ワルシャワの日本大使館で参事官を務めていた蜂谷　輝雄氏を日本の全権公使としてソフィアに任命することに同意した」と、1939年10月17日発行のBTA公報に掲載された記事に記されている。

その少し後、12月28日のBTAの記事では、ブルガリア国王陛下が日本の全権公使である蜂谷輝雄閣下の謁見を公式に受け、信任状を受け取る荘厳な儀式の様子が紹介されている。

「私は、我が国政府によって任命された最初の者として、我々二国間の関係と心からの友好を築くためにここに参ることができ、大変光栄に思います」と、蜂谷公使は挨拶の中で語っている。

ブルガリア国王は、信任状を受け取り感謝され、次のように応えた。「貴殿が我々両国の関係を維持・発展させるために尽力されるとの誓約を、私は誠に喜ばしく受け止めます（...）本日、貴殿を日本からの最初の外交使節としてお迎えし、心から歓迎の意を表します。ようこそ、閣下」。

1942年

2月11日付のニュースでは、日本とブルガリアの間で締結された友好および文化協力協定について報じられている。この協定は、日本国外務大臣の谷正之氏と、ブルガリア全権公使のヤンコ・ペエフ氏によって、厳かに署名された。

谷氏は式典の中で演説を行い、「新しい世界秩序の実現のために勇敢に戦っているブルガリア国民の勇気」を称賛した。

これに対しペエフ氏は、日本国民が成し遂げた輝かしい成果を強調し、「その成功は我が同胞を大いに励ますものである」と応じた。

1959年

9月、BTAのニュース配信で発表された報道によると、ブルガリア人民共和国政府と日本政府は、両国間の外交関係を回復することを望み、ブルガリア人民共和国のワルシャワ駐在大使フリスト・ボエフ氏および日本のワルシャワ駐在大使太田三郎氏に、その目的のための交渉を行うよう指示したという。

この交渉の結果、両国政府の間で完全な合意が成立し、9月12日、ワルシャワにてボエフ大使と太田大使の間で、両国間の外交関係を回復する旨の書簡が交換された。

1977年

3月29日、首都ソフィアの「モスクワ」パークホテル」において、日本から来訪した60名の経済代表団とブルガリアのビジネス関係者との会合が開催された。

この会合は、ブルガリア商工会議所会頭ペンコ・ペンコフ氏と、日本通商産業省の顧問である小松勇五郎氏の主導のもと行われた。

日本側からは、大手産業企業、専門商社、輸出入銀行、各省庁および関係機関の代表が出席し、ブルガリアの経済的成果について紹介を受けた。

会合では、両国間の貿易拡大の可能性や、生産・技術協力の展望についても議論された。

1978年

「ブルガリアと日本の科学者の間で、精油植物の品種改良分野における有益な協力の第一歩が踏み出されました。カザンラク市にあるバラ・精油・薬用植物研究所では、東京農業大学育種研究所の放射線育種の経験が導入される予定です。ここ数年、ブルガリアでは放射線照射や化学物質を用いて植物の特性を変化させる新しい手法に取り組んでいます」と、3月14日付のカザンラクからの報道に記されてる。

さらに、同研究所は東京の「マザヒザ・アオキ」社の関係者との交流を継続しており、観賞用バラの育種と栽培に関する文献の交換が行われていると伝えられている。

1979年

10月10日、国家評議会議長トドル・ジフコフの招待により、日本国天皇の名代として皇太子明仁親王殿下と皇太子妃美智子殿下が公式訪問のためブルガリアを訪れられた。お二人はボヤナ官邸に滞在され、ジフコフ同志がお二人のために盛大な晩餐会を催した。

その席上、皇太子殿下が乾杯の挨拶を述べられた。「9年前、閣下はブルガリアの首相として大阪万国博覧会をご訪問されました。その博覧会において、貴国はバルカンの山々を象徴するパビリオンを建設し、出展されました。この万博への参加と閣下のご訪問は、両国の友好関係の礎となり、日本国民の心に深い印象を残しました」と述べられた。

また、皇太子殿下は、昨年のトドル・ジフコフ氏の日本訪問が、両国のさらなる相互理解と友好関係の促進に大きく貢献したことを付け加えられた。

1981年

日本の各地では、ブルガリア建国1300周年を記念するために数多くの新しい試みが展開され、日本社会はこれを盛大に祝った。各都市で開催された展覧会、コンサート、記念の夕べなどは大きな関心を集め、これらの催しは両国間の文化交流における重要な貢献となった。これは9月14日付の報道で伝えられている。

この記念すべき周年に際し、ブルガリア文化委員会の副議長トドル・リバロフ氏が日本を訪問した。ブルガリア通信社の記者に対し、同氏は、「日本の政治、社会、文化の著名人との会談を通じて、ブルガリアの国際的な威信の高まり、そして両国間の関係深化があらためて証明されました」と語っている。

1987年

6月11日、日本の皇室の一員である高仁親王殿下とその妃・百合子妃殿下が、閣僚会議副議長および精神文化発展評議会議長ゲオルギ・ヨルダノフ氏の招待により、ブルガリアを訪問された。

6月12日には、ソフィア大学「クリメント・オフリドスキ」大講堂にて、高仁親王殿下に「名誉博士」の称号が授与された。この栄誉は、歴史学および考古学分野における高い学術的業績に対する評価であると同時に、「両国間の精神的・文化的交流の深化に寄与されたご功績に対して贈られたものです」と説明された。

1990年

11月11日、BTA（ブルガリア通信社）の東京特派員ゲオルギ・アポストロフは、翌日に予定されている新しい日本の天皇、明仁天皇の即位礼正殿の儀について報じた。この儀式には3,500人の公式招待客が出席する予定である。日本側の招待により、ブルガリア共和国大統領のジェリュ・ジェレフも東京に到着した。

ブルガリア大統領の5日間にわたる訪日時には、日本の首相・海部俊樹との会談が予定されており、外務大臣の中山太郎、通商産業大臣の武藤嘉文、衆議院議長の桜内義雄、そして日本の経済界の代表者たちとも会談が計画されている。

1987年6月11日 ソフィア：日本皇室の三笠宮親王のブルガリアご訪問
写真：ステファン・ティホフ（BTA）

11月13日のニュースでは、武藤通産相との会談が報じられた。武藤大臣は、「ブルガリアの市場経済への移行を支援する用意があります」と述べ、「日本は経済運営、生産性向上、エネルギー資源の効率的活用に関する経験を共有できることを強調したいと思います」と語った。

1995年

ブルガリア国営ラジオ児童合唱団は、1996年7月12日に第11回目の日本ツアーに出発する。このことは、同年11月24日に行われた式典に先立ち、指揮者のフリスト・ネデャルコフ教授によって発表された。同式典では、日本の地引嘉博（じびきよしひろ）駐ブルガリア大使より、教授に対して「瑞宝章金章（ずいほうしょう・きんしょう・ロゼット付き）」が授与された。

地引大使は、「日本政府がネデャルコフ教授に対してこの勲章を授与した理由は、30年にわたるブルガリアと日本の文化交流の発展に多大な貢献があったからです」と述べた。

1996年

9月29日、日本の皇族である清子内親王殿下がブルガリア政府の招待により、公式訪問のため来訪した。訪問の目的は、ブルガリアにおける「日本文化デー」の開会式に出席することにある。滞在中、清子内親王殿下はジェリュー・ジェレフ大統領との面会、ジャン・ヴィデノフ首相との会談を行った。また、訪問日程にはヴェリコ・タルノヴォおよびリラ修道院の視察も含まれている。

9月30日、清子内親王殿下は次のように述べられた。「貴国を訪問し、茶道の儀式に参加できることを大変嬉しく思います。この儀式をもって第7回日本文化デーが開幕することは、とても意義深いことです」。また、殿下はブルガリアへの関心について、「私のブルガリアへの関心は、まず何よりも長い年月をかけて築かれた文化的価値にあります。それらは日本国内だけでなく、世界中でも知られています」と述べられた。

1997年

11月初旬、ブルガリア共和国大統領ペタル・ストヤノフは政令第459号により、日本国明仁天皇にリボン付きの「スタラ・プラニナ勲章」を授与した。また、ブルガリアと日本の友好関係の発展への貢献に対して、美智子皇后陛下には金製の「バラの勲章」が授与された。

同時に、日本の橋本龍太郎内閣総理大臣にもリボン付きの「スタラ・プラニナ勲章」が授与された。

1996年10月3日 ソフィア：ブルガリア大統領ジェリュー・ジェレフと日本の清子内親王
写真：ルスラン・ドネフ（BTA）

* * *

11月16日、東京の羽田空港にて、ブルガリア共和国大統領ペタル・ストヤノフが夫人および公式代表団とともに到着し、21発の礼砲で迎えられた。

ストヤノフ大統領は日本の橋本龍太郎首相と会談し、橋本首相はブルガリア大統領による今回の最高レベルの訪問を「日本がブルガリアにおける改革を全面的に支持しているという兆しです」と評価した。なお、橋本首相によれば、その改革はペタル・ストヤノフが大統領に選出されたことにより始まったものである。

明仁天皇と美智子皇后陛下は、ペタル・ストヤノフ大統領およびアントニナ・ストヤノヴァ夫人を、日本の閣僚全員の出席のもと歓迎した。

また、赤坂御所にて晩餐会が催され、天皇陛下は「我が両国の歴史的な道のりは異なるが、それぞれの文化と芸術を守ろうとする努力には共通点があります」と述べられた。

2004年

12月13日、ブルガリアのシメオン・サクスコブルクゴツキ首相が、5日間の公式訪問のため日本に到着した。サクスコブルクゴツキ首相と夫人のマルガリータは、明仁天皇および美智子皇后陛下とのご会見に臨んだ。首相は、天皇陛下よりお茶会に招かれた初めての首相であり、「これは極めて高い敬意と名誉を示すもの」と評価された。

12月15日には、サクスコブルクゴツキ首相が日本の小泉純一郎首相と会談を行った。両国政府首脳は「ブルガリアと日本のパートナーシップに関する共同声明」に署名し、その中で日本はブルガリア国民に対して短期滞在におけるビザ免除を導入することが明記された。

ソフィア、2001年10月17日　ペタル・ストヤノフ大統領が、松井 啓駐ブルガリア日本国大使に第一等「スタラ・プラニナ」勲章を授与する。
写真：ティホミル・ペノフ、BTA

2007年

11月、ブルガリアの副首相兼外務大臣イヴァイロ・カルフィン氏が日本を公式訪問した。カルフィン外相は、日本の福田康夫首相に表敬訪問し、ブルガリアの改革に対する日本の支援、すなわち経済・社会分野における優遇融資、無償援助、技術協力に対して謝意を表した。

11月5日、カルフィン外相は、ブルガリアの日本における2つ目の名誉領事館を開設した。名誉領事には宗政真一氏が任命され、九州および四国の12県を管轄とする福岡市に拠点が置かれた。

ブルガリア通信社は、「ブルガリアが日本に初の名誉領事館を開設したのは2003年12月であり、その際には中山久氏が横浜市を拠点とする名誉領事に任命されました」と伝えている。

2009年

1月25日、ゲオルギ・パルヴァノフ大統領が日本を公式訪問した。この訪問は「日本におけるブルガリア年」の幕開けを記念するものであり、本年はブルガリアと日本の外交関係再開から50周年を迎える。国家元首である大統領とその夫人ゾルカ・パルヴァノヴァ氏は、明仁天皇および美智子皇后陛下とのご会見を賜った。大統領はまた、麻生太郎首相および両院の議長とも会談を行った。

ソフィアでは、両国の外交関係再開50周年を記念した祝賀行事が2月3日に開幕し、和太鼓、三味線、篠笛による「ようそろ」グループの伝統的な日本音楽の

2004年12月15日 東京：ブルガリア首相シメオン・サクスコブルクゴツキと日本首相小泉純一郎、二国間関係強化の共同声明署名式
写真：ヴラディミル・ショコフ（BTA）

コンサートが開催された。

5月には、秋篠宮皇嗣同妃両殿下がゲオルギ・パルヴァノフ大統領の招待により公式ご訪問された。5月15日、大統領と秋篠宮殿下は、アレクサンドロヴォ村にある東ロドピ地方のトラキア芸術博物館センターの開館式を共にご出席された。この文化施設の建設は日本政府の資金協力により実現し、館内にはトラキア人の墳墓の精巧なレプリカが展示されている。

12月2日には、「日本におけるブルガリア年」の公式閉幕式として、日本の人形劇『人間国宝』が国立イヴァン・ヴァゾフ劇場で上演された。ブルガリアの観客にとっては初めて、日本の珍しい人形劇の形式「八王子車人形」と、語り芸「新内浄瑠璃」が紹介された。

2011年

1月22日、ボイコ・ボリソフ首相が日本を実務訪問のため訪れた。訪問中、首相は一月場所の大相撲千秋楽に出席し、ブルガリア政府杯を授与した。この大会にはカロヤン・マフリャノフ（琴欧洲）も出場している。

訪問3日目の始まりには、皇太子徳仁親王殿下のご接見を賜った。その後、ボリソフ首相は菅直人内閣総理大臣と会談し、日本経済団体連合会の米倉弘昌会長とも意見交換を行った。さらに、衆議院議長の横路孝弘氏および参議院議長の西岡武夫氏とも会談を行った。

東京、2009年1月26日　公式訪問中のゲオルギ・パルヴァノフ大統領と妻ゾルカ・パルヴァノヴァが、明仁天皇・美智子皇后のご接見を受ける。
写真：ヴァレンティン・ニコロフ、BTA

2012年

4月、東京のブルガリア大使館でのヴァシル・レフスキのレリーフ除幕式と、ブルガリア人留学生および日本のブルガリア語学者との懇談会を皮切りに、国民議会議長ツェツカ・ツァチェヴァの日本公式訪問が始まった。ツァチェヴァ議長率いるブルガリア国会代表団は、日本国参議院議長・平田健二氏の招待により、日本を公式に訪問した。

このレリーフは、ソフィア中心部にあるヴァシル・レフスキ像の複製であり、「ヴァシル・レフスキ生誕175周年を記念して、第41期国民議会および「ヴァシル・レフスキ財団」から寄贈された。

2014年

日本では6月2日が「バラの日」として制定された。この取り組みは、長年にわたりブルガリアのローズオイルを日本に輸入してきた原田博之氏によるものである。

5月に駐日ブルガリア大使館が主催した第15回チャリティー・レセプション「バラの祭典」において、原田氏は「日本語では6月2日が『ロ・ズ』と発音され、美しい花の名前『ローズ』に非常に近いことからこの日を選びました」と語った。また、「この祭典を始めた当初は、まさか15年も続くとは思っていませんでしたが、ぜひ25回目も迎えたいと思っています」とも述べた。

「バラの女王」に選ばれたユリア・ポポヴァ氏は、原田氏のブルガリア文化およびブルガリアのバラの普及に対する並々ならぬ貢献を称え、カザンラク市長の名のもとで名誉証書を授与した。

2015年

日本の「明治コーポレーション」社が実施した調査によると、毎朝、日本の半数以上の家庭がブルガリアヨーグルトを朝食に取り入れていることがわかった。この調査結果は、同社の代表取締役社長・川村一夫氏が来日中の経済大臣ボジダル・ルカルスキとの4月8日の会談の際に発表したものである。

「明治」は1972年から、ブルガリア国営企業「エル・ビー・ブルガリクム」のライセンスのもとで、ブルガリアヨーグルトを製造している。現在、日本では「明治ブルガリアヨーグルト」は「コカ・コーラ」や「ダノン」よりも有名なブランドとなっており、調査によれば「57.5％の日本人がブルガリアといえば『ヨーグルト』を連想します」とのことである。

川村氏は、「ブルガリア政府からの卓越したパートナーシップに対して、深く感謝しています」と述べた。また、「2013年からは中国、タイ、シンガポールの市場向けにもブルガリアヨーグルトの製造を行っています」と明らかにした。

2017年

5月11日、ドンドゥコフ2で行われた実務会合において、副大統領イリヤナ・ヨトヴァ氏と日ブル友好文化交流協会の事務局長猪谷晶子（いがやあきこ）氏は、ブルガリアと日本の経済・文化協力について協議した。猪谷氏によれば、「日本の中小企業にとって、ブルガリアはヨーロッパへの玄関口です」とのことである。

会談では、ソフィアに建設予定の日本文化センター「キズナ」プロジェクトについても話し合われた。猪谷氏は、「ブルガリアの首都に建設されるこの日本文化センターは、2019年までに完成する予定です」と述べた。2019年は、ブルガリア王室と日本の皇室との交流開始から110年、日ブル外交関係樹立から80年、そしてその再開から60年という、三つの重要な記念年にあたる。

2018年

「ブルガリアにお迎えできて大変光栄です。日本の内閣総理大臣による二国間関係史上初となるブルガリア訪問を、特に今年のようにわが国が初めて欧州連合理事会の輪番議長国を務めている重要な年に実現できたことを高く評価しています」と、ルーメン・ラデフ大統領は、1月15日にソフィアで日本の内閣総理大臣・安倍晋三氏と会談した際に述べた。ラデフ氏は、日本がブルガリアの伝統的な友好国であり、共通の価値観と国際的な重要課題に対する類似した立場を共有する優先的パートナーであることを強調した。

* * *

12月、閣議決定により、福岡市に駐在する名誉領事館が日本に開設されることが承認された。領事管轄区域は九州・沖縄および四国であり、日本国籍の宗政寛氏が名誉領事に任命された。

この領事管轄区域には、約1,700万人の人口を擁する12の都道府県が含まれており、その地域には40以上の大学が所在し、「その中のいくつかではブルガリア人留学生も学んでいます」と報告された。

2019年

ルメン・ラデフ大統領は、徳仁天皇陛下の即位礼正殿の儀に参列するため、10月21日から24日まで日本を訪問した。訪問中、ラデフ大統領は日本の大手企業「明治」の経営陣と会談を行った。「ブルガリアと『明治』との長年にわたる成功したパートナーシップは信頼を強化し、我が国での事業展開を目指す日本の投資家にとって模範となっています」と、ラデフ大統領は会談の中で述べた。

10月23日、ルメン・ラデフ大統領は東京の東洋大学で学生に向けて講演を行い、同大学より名誉博士号を授与された。

2023年

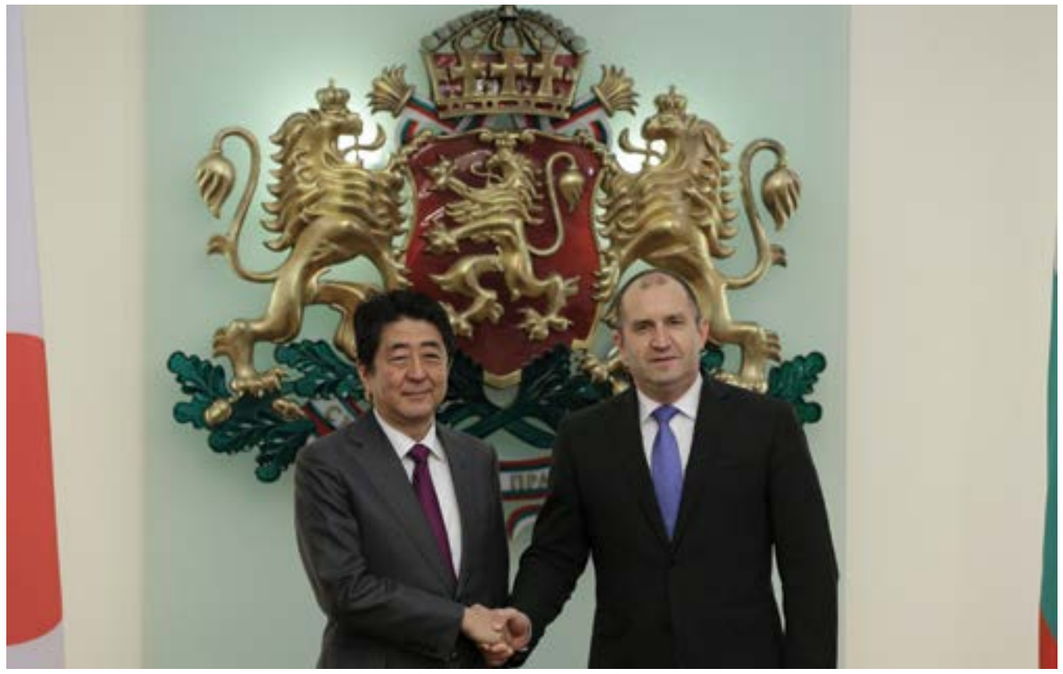
日本の西村康稔経済産業大臣は5月初旬にソフィアを訪問し、計算機科学・人工知能・テクノロジー研究所（INSAIT）を視察した。ブルガリアと日本の間における科学技術分野での協力の可能性が会談の主なテーマの一つとなった。今回の訪問は、日本の経済産業大臣によるブルガリア訪問としては過去50年間で初めてのものであり、INSAITへの訪問が公式日程の最初の訪問先となった。

＊＊＊

7月末、セント・ヴラスにて、日本の武士であり、ブルガリア解放戦争（1878〜1879年）に参加し、ブルガリアの国家的理念の支持者でもあった山沢静吾のレリーフが除幕された。このレリーフは、駐ブルガリア日本国大使の奈良平博史氏と、「ブルガリア記憶 – ディネフ兄弟」財団の共同代表であるディンコ・ディネフ氏およびヨルダン・ディネフ氏によって除幕された。山沢静吾の記念碑は、リゾート地にあるマリーナの「民族の小路」に設置されている。

ソフィア、2018年1月14日
ボイコ・ボリソフ首相が、日本の安倍晋三首相と会談する。
写真：フリスト・カサボフ、BTA

ソフィア、2016年7月11日　ローセン・プレヴネルリエフ大統領が、小泉 崇駐ブルガリア日本国大使に第一等「スタラ・プラニナ」勲章を授与する。
写真：アセン・トネフ、BTA



ソフィア、2018年1月15日　ルメン・ラデフ大統領が、ブルガリアを訪問中の日本の安倍晋三首相と会談する。
写真：フリスト・カサボフ、BTA

ヤニツァ・フリストヴァ

万国博覧会の歴史概略

1981年6月15日 プロヴディフ：狩猟万博開催式典・民族舞踊パフォーマンス
写真：ディミター・ヴィクトロフ（BTA）

産業化と経済発展の成果を紹介し、国際貿易関係を促進することを目的とする万国博覧会の伝統は、1851年、ロンドンで開催された最初の博覧会から始まった。それから一世紀半以上を経た現在も、EXPOは世界各地で開催され、開催国は政治家やビジネスリーダーのみならず、多くの観光客を惹きつける。万博はしばしば「時代の鏡」とも呼ばれる。それは、開催時における世界の到達点を、経済に限らず、科学、建築、芸術の分野に至るまで映し出すからである。

万博の研究者たちは、その歴史を三つの時代に分類している。すなわち、産業化の時代（1851～1938年）、文化交流の時代（1939～1987年）、そして国家アイデンティティを世界に示す時代（1988年～現在）である。

出展者たちのパビリオンが設置される都市は、博覧会開催に先立つ地域の整備や近代化によって姿を変えることがある。だが、多くの場合、その変化は博覧会のために特別に建設された建物や塔、テーマ施設によるものであり、それらは博覧会後も都市の一部として残り続ける。たとえば、1889年のパリ万国博覧会のために建てられたエッフェル塔は、その後パリを象徴する存在になった。また、技術革新の成果や、私たちが日常で使っているジャケットのファスナーのような便利な道具も、長年の万国博覧会の中で初めて一般に紹介されたものが多い。

大博覧会

最初の万国博覧会は、1851年5月1日から10月11日まで、ロンドンのハイド・パークで開催された。参加した国は25カ国だった。正式名称は「万国産業製作品大博覧会」だったが、「グレート・エキシビション」という呼び名で広く知られるようになった。展示ブースはガラス製の仮設建築物に設置されていたため、「クリスタル・パレスの博覧会」とも呼ばれた。

このイベントは、ヴィクトリア女王によって前年に設置された王立委員会が管轄していた。主な主催者は、女王の夫であるサクス＝コバーグ＝ゴータ家出身のアルバート公で、産業にも芸術にも詳しい実業家ヘンリー・コール卿の支援を受けていた。

グレート・エキシビションは産業革命の時代に開催され、人類と技術の進歩を中心テーマとしていた。テーマは「万国の産業」だった。開催期間中、600万人以上が訪れた。訪問者の中には、科学者チャールズ・ダーウィンや作家シャーロット・ブロンテなどもいた。来場者は、初期型のファクス機や、1時間に数千枚を印刷できる印刷機などの新発明に触れることができた。イギリスのグレート・ウェスタン鉄道会社が開発した最新型の機関車も展示され、視覚障害者が触覚で文字を読むための特殊なインクも紹介された。

現在までの万国博覧会の歩み

初期には開催間隔は一定ではなかった。

1855年、フランスで第2回万国博覧会が開催された。その背後には、フランス皇帝ナポレオン3世のイニシアティブがあった。彼は、自国で開催する博覧会をイギリスのそれよりも大規模なものにしたいと夢見ていた。クリミア戦争（1853～1856年）がしばらくの間この計画を遅らせたが、博覧会は1855年5月15日に開幕し、同年11月15日まで続いた。28カ国の参加国を結びつけたテーマは「農業、工業、美術」だった。博覧会では農業と工業に加えて、豊かなフランスの芸術作品も展示された。紹介された発明品には、世界初の芝刈り機や、最初の非工業用ミシン「シンガー」などがあった。

1862年5月1日から11月1日まで、第3回万国博覧会が再びロンドンで開催された。テーマは「産業と芸術」で、39か国が参加した。

1867年4月1日から11月3日まで、パリで万国博覧会が開催された。42か国が参加し、テーマは「農業、工業、美術」だった。来場者数は1500万人にのぼった。

1873年5月1日から10月31日まで、ウィーンで万国博覧会が開催された。35か国の参加者が「文化と教育」というテーマのもとに集まった。

1876年5月10日から11月10日まで、アメリカ・フィラデルフィアで万国博覧会が開催された。35か国が参加し、テーマは「芸術、生産、土壌および鉱山の産物」だった。

1878年5月20日から11月10日まで、パリで万国博覧会が開催された。「新技術」というモットーのもと、35か国が出展した。

1880年10月1日から1881年4月30日まで、オーストラリアのメルボルンで万国博覧会が開催された。テーマは「芸術、生産、農業および工業製品」で、33か国が出展した。

1888年4月8日から12月10日まで、バルセロナが万国博覧会の開催地となった。30か国が自国のパビリオンを出展し、テーマは「美術と産業芸術」だった。

1889年5月6日から10月31日まで、フランスが4回目となる万国博覧会を開催した。フランス革命100周年を記念するもので、35か国から6万1000以上の出展者が集まり、3200万人以上が来場した。この博覧会のシンボルとなったのがエッフェル塔であり、その建設には2年2か月と5日を要した。この万博は第二次産業革命の真っただ中で行われ、最新の技術革新が紹介された。トーマス・エジソン自身もパリを訪れ、自身が開発した白熱電球を披露した。また、アルマン・プジョーとレオン・セルポレが蒸気駆動の三輪自動車の初期型を公開した。

1893年5月1日から10月30日まで、アメリカ・シカゴで万国博覧会が開催された。テーマは「アメリカ発見400周年」だった。この万博には2700万人以上が来場し、その中にはブルガリアの作家であり社会活動家でもあったアレコ・コンスタンティノフも含まれていた。

1897年5月10日から11月8日まで、ブリュッセルで万国博覧会が開催された。テーマは「現代生活」で、27か国が参加した。

4月15日から11月12日まで、パリで万国博覧会が開かれた。40か国が出展し、テーマは「19世紀の回顧」だった。

この博覧会にはおよそ5100万人が来場し、パリの都市景観にも大きな影響を与えた。主な変化の一つは、パリ最初の地下鉄路線の開通だった。この万博では科学の進歩が中心テーマとなり、天文学や強力な望遠鏡の能力が紹介され、月の表面を詳細に観察できる様子が披露された。また、芸術分野では映画や写真の発展が取り上げられた。ここでは世界初の映画館の一つが作られ、リュミエール兄弟の映画が巨大スクリーンで上映された。

1904年4月30日から12月1日まで、アメリカ・セントルイスで万国博覧会が開催された。テーマはルイジアナ買収100周年記念だった。60か国が参加した。

1905年4月27日から11月6日まで、リエージュで万国博覧会が開かれた。ベルギー独立75周年を記念して開催された。

1906年4月28日から11月11日まで、イタリア・ミラノで万国博覧会が開催された。テーマは交通に関するもので、40か国が出展した。

1910年4月23日から11月7日まで、ブリュッセルで万国博覧会が開催された。テーマは「芸術と科学、農業および工業製品」で、26か国が参加した。

1913年4月26日から11月3日まで、ベルギーのヘントで万国博覧会が開催された。テーマは「平和、産業と芸術」で、24か国が参加した。

1915年2月20日から12月4日まで、アメリカ・サンフランシスコで万国博覧会が開催された。テーマはパナマ運河開通の祝賀に関連しており、41か国が参加した。この運河は「近代世界の七不思議」の一つとされている。

1929年5月20日から1930年1月15日まで、バルセロナで万国博覧会が開催された。テーマは「産業、芸術、スポーツ」で、29か国が参加した。

1933年5月27日から11月12日まで、さらに1934年7月1日から10月31日まで、シカゴで万国博覧会が開催された。テーマは「産業と科学研究の自立」で、21か国が参加し、3800万人以上が来場した。

1935年4月27日から11月6日まで、ブリュッセルで万国博覧会が開催された。これは国際博覧会事務局（BIE）のもとで開催された初の博覧会であり、第一種博覧会に分類された。テーマは交通で、大陸ヨーロッパ初の鉄道（ブリュッセル＝メヘレン間）の開通100周年を記念していた。

1937年5月25日から11月25日まで、パリで万国博覧会（第2種一般博）が開催された。テーマは「現代生活における芸術と技術」で、35か国が参加した。当時スペイン内戦が激化していたため、スペイン館はそれを反映した内容になった。スペイン共和国政府の依頼を受け、パブロ・ピカソが有名な絵画「ゲルニカ」を制作した。高さ3.5メートル、幅7.8メートルの大作だった。

次の万国博覧会（第2種一般博）は、1939年4月30日から10月31日、そして1940年5月11日から10月27日までニューヨークで開催された。途中中断されたのは、世界の政治情勢の悪化と第二次世界大戦の影が差していたためだった。テーマは「明日の世界を築く」で、54か国が参加した。

1949年12月8日から1950年7月8日まで、ハイチ最大の都市ポルトープランスで万国博覧会が開催された。テーマは「平和の祭典」で、このイベントは国際的な観光客の注目をハイチに集める助けとなった。

1958年4月17日から10月19日まで、ブリュッセルで万国博覧会が開催された。テーマは「世界観としての新しいヒューマニズム」で、39か国が参加した。この博覧会の象徴は「アトミウム」というモニュメントで、鉄の結晶構造を1650億倍に拡大したものを9つの鉄球で表現している。アトミウムは今でもブリュッセルの名所となっている。

1962年4月21日から10月21日まで、アメリカ・シアトルで万国博覧会が開催された。テーマは「宇宙時代の人間」で、49か国が参加した。

1967年4月28日から10月29日まで、カナダ・モントリオールで万国博覧会が開催された。テーマは「人間とその世界」で、62か国が出展し、来場者は5000万人を超えた。

1970年3月15日から9月13日まで、日本・大阪で万国博覧会が開催された。テーマは「人類の進歩と調和」で、ブルガリアを含む77か国が参加した。大阪万博には6400万人が訪れた。

1992年4月20日から10月12日まで、スペイン南部のセビリアで万国博覧会が開催された。テーマは「発見の時代」で、これはコロンブスによるアメリカ発見500周年を記念するものだった。フォーラムには108か国が参加した。

2000年6月1日から10月31日まで、新世紀に入って最初の万国博覧会がドイツ・ハノーファーで開催された。174か国が参加し、テーマは「人類・自然・技術」だった。このイベントは持続可能な発展と人間・自然・技術のバランスに関する国際対話の促進を目指した。

2005年3月25日から9月25日まで、日本・愛知県で万国博覧会が開催された。テーマは「自然の叡智」で、これは1997年12月に採択された京都議定書に触発されたもので、温室効果ガスの削減と地球温暖化対策を目指していた。121か国が参加した。この万博は、市民の地球に対する責任意識を高めるためのさまざまな取り組みの出発点となった。

2010年5月1日から10月31日まで、中国・上海で万国博覧会が開催された。テーマは「より良い都市、より良い生活」で、いくつかの記録を打ち立てた。敷地面積は5230デカールで最大規模、参加国・地域数は246、来場者数は7300万人に達した。

2015年5月1日から10月31日まで、イタリア・ミラノで万国博覧会が開催された。テーマは「地球に食料を、生命にエネルギー」で、139か国が参加した。

次の万国博覧会はドバイで2020年に開催される予定だったが、新型コロナウイルスのパンデミックの影響で1年延期され、2021年10月1日から2022年3月31日まで開催された。テーマは「心をつなぎ、未来を創る」で、200か国が参加した。

そして、今まさにこの「LIK」誌を手にしているころには、大阪での万国博覧会も現実となっている。大阪万博は2025年4月13日から10月13日まで開催される。

特別博覧会

特別博覧会は、いくつかの点で万国博覧会と異なる。その一つが開催期間であり、特別博は3週間から3か月の間で行われ、敷地面積もはるかに小さい。パビリオンは主催者側から提供され、参加国はそれを自国の判断で自由に装飾できるが、自ら建設するわけではない。特別博覧会では、世界市民が関心を寄せる特定のテーマが掲げられる。

これらの博覧会の開催条件も、年月とともに変化してきた。

1972年のプロトコルでは、開催間隔を最低2年と定めたが、国際博覧会事務局（BIE）の許可により例外も認められることになった。しかし、次の10年間で博覧会の数が増加したため、1988年には新たな規定が設けられ、特別博(認定博)の開催頻度は5年に1回とされ、2回の万国博覧会（登録博）の間に開催できる特別博は1回に限られることになった。

1936年5月15日から6月1日にかけて、最初の特別博覧会が開催された。開催地はストックホルムで、テーマは「航空」だった。8か国が参加した。

1938年5月14日から22日まで、フィンランドのヘルシンキで特別博覧会が開催された。テーマは「宇宙飛行」であり、25か国が参加した。

1939年5月20日から9月2日まで、ベルギーのリエージュで「水の芸術」をテーマにした特別博覧会が開催された。この博覧会は、北東ベルギーに建設された122キロメートルの運河「アルベール運河」の完成を祝う目的もあった。8か国が参加した。

1947年7月10日から8月15日まで、パリで「都市計画と住宅建設」をテーマにした特別博覧会が開催され、14か国が参加した。

1949年7月27日から8月13日まで、スウェーデン・ストックホルムで「スポーツとフィジカルカルチャー」をテーマとする博覧会が行われた。

同じく1949年9月24日から10月9日には、フランス・リヨンで「地方型住居」をテーマとする特別博覧会が開催された。

1951年4月28日から5月20日、フランス・リールで「繊維」をテーマとする展示会が行われ、24か国が参加、来場者数は150万人を超えた。

1953年7月26日から10月31日にはローマで「農業」をテーマとする特別博覧会が開かれ、170万人以上が来場した。

1953年9月22日から10月14日にかけて、エルサレムで「砂漠の開拓」をテーマにした特別博覧会が開催され、13か国が参加した。

1954年5月15日から10月15日には、イタリア・ナポリで「航海」をテーマとする特別博覧会が開催され、25か国が参加した。

1955年5月25日から6月19日、イタリア・トリノで「スポーツ」をテーマとする特別博覧会が行われ、11か国が参加した。

同年6月10日から8月28日、スウェーデン・ヘルシングボリで「現代人と環境」をテーマにした展示が行われ、10か国が参加した。

1956年5月21日から6月20日、イスラエル・ベイトダガンで「柑橘類」をテーマとする特別博覧会が開催された。

1957年7月6日から9月29日にはドイツ・ベルリンで「ハンザ地区再建」をテーマにした展示が行われ、13か国が参加、来場者数は100万人に達した。

1961年5月1日から10月31日、イタリア・トリノで「人間とその仕事：技術的・社会的発展の一世紀：成果と展望」をテーマに特別博覧会が開催され、19か国が参加、約500万人が訪れた。

1965年6月25日から10月3日には、ドイツ・ミュンヘンで「交通」をテーマにした特別博覧会が開催され、31か国が参加した。

1968年4月6日から10月6日まで、アメリカ・サンアントニオで「アメリカ大陸における文明の融合」をテーマとする特別博覧会が行われ、23か国が参加、来場者は600万人を超えた。

1971年8月27日から9月30日、ハンガリーの首都ブダペストで「世界の狩猟」をテーマとした特別博覧会が開催され、35か国が参加した。

1974年5月4日から11月2日にはアメリカ・スポケーンで「明日の新鮮で再生された環境を祝う」をテーマとする特別博覧会が行われ、10か国が参加、来場者数は550万人以上に上った。

1975年7月20日から1976年1月18日まで、日本・沖縄で「私たちが望む海」をテーマにした特別博覧会が開催され、35か国が参加、来場者数は300万人を超えた。

1981年6月14日から7月12日、ブルガリア・プロヴディフで「地球：生命の惑星」をテーマにした特別博覧会が開催され、70か国が参加した。

1982年5月1日から10月31日、アメリカ・ノックスビルで「エネルギーが世界を動かす」をテーマにした特別博覧会が行われ、16か国が参加、来場者数は1100万人を超えた。

2015年5月13日 ミラノ：EXPO-2015のイタリア館
写真：ガブリエラ・ゴレマンスカ（BTA）

1984年5月12日から11月11日、アメリカ・ニューオーリンズで「川の世界：淡水は生命の源泉」をテーマにした特別博覧会が行われ、15か国が参加、700万人以上が来場した。

1985年3月17日から9月16日、日本・筑波で「住居と環境」をテーマとした特別博覧会が開催され、48か国が参加、来場者数は2000万人を超えた。

1985年11月4日から30日にはブルガリア・プロヴディフで「発明」をテーマにした特別博覧会が行われ、54か国が参加し、来場者数は100万人に達した。

1986年5月2日から10月13日、カナダ・バンクーバーで「輸送と通信：動く世界・つながる世界」をテーマにした特別博覧会が行われ、55か国が参加、来場者は2200万人を超えた。

1988年4月30日から10月30日にはオーストラリア・ブリスベンで「テクノロジー時代の余暇」をテーマにした特別博覧会が行われ、36か国が参加し、来場者数は1800万人を超えた。

1991年6月7日から7月7日、ブルガリア・プロヴディフで「平和な世界のための若者の革新」をテーマにした特別博覧会が行われ、9か国が参加した。

1992年5月15日から8月15日、イタリア・ジェノヴァで「クリストファー・コロンブス：船と海」をテーマとした特別博覧会が開催され、52か国が参加した。

1993年8月7日から11月7日、韓国・テジョン（大田）で「挑戦：新たな発展への道」をテーマに特別博覧会が開催され、141か国が参加、来場者は1400万人を超えた。

1998年5月22日から9月30日にはポルトガル・リスボンで「海洋：未来への遺産」をテーマとする特別博覧会が行われ、160か国が参加、来場者数は1000万人を超えた。

2008年6月14日から9月14日、スペイン・サラゴサで「水と持続可能な開発」をテーマにした特別博覧会が行われ、108か国が参加、来場者は550万人を超えた。

2012年5月12日から8月12日、韓国・麗水（ヨス）で「生きた海と沿岸」をテーマに特別博覧会が開催され、103か国が参加、来場者数は800万人を超えた。

2017年6月10日から9月10日、カザフスタンの首都アスタナで開催された特別博覧会には137か国が参加し、「未来のエネルギー」をテーマに掲げた。

次回の特別博覧会は、2027年にセルビア・ベオグラードで開催される予定である。

園芸博覧会

国際園芸博覧会は、最大で6か月間開催されることが可能である。現在の規定では、二つの別々の開催回の間には最低2年間の間隔を設ける必要があり、さらに同一国内で開催される場合には最低10年間の間隔を空けなければならない。

国際博覧会事務局（BIE）の後援を受ける園芸博覧会は、国際園芸生産者協会（AIPH）の承認も必要である。これらのイベントは、農業や園芸、持続可能で健康的なライフスタイルに関する国際的な知識と経験の共有を促進し、グリーン経済を推進することを目的としている。

万博や特別博と同様に、園芸博もそれぞれの開催回ごとに異なるテーマに基づいている。

最初の園芸博覧会は、1960年3月25日から9月25日にかけてロッテルダムで開催された。テーマは「国際園芸」だった。

これまでに、世界各地で23回の園芸博覧会が開催され、さまざまなテーマが掲げられてきた。

直近では、カタールの首都ドーハで2023年10月2日から2024年3月28日まで開催された博覧会がある。テーマは「緑の砂漠、より良い環境」だった。この博覧会は、極めて乾燥した気候で開催された初めての園芸博覧会となった。その目標の一つは、このような地域での生活への理解を深めるとともに、環境意識の向上を促進することだった。

LIK 2025

プロヴディフの国際博覧会

世界各地で開催される博覧会に倣い、1892年8月15日、プロヴディフで初のブルガリア農業・工業博覧会が開かれた。

この博覧会は、国の経済と産業の発展を支援することを目的とし、国内産業の初期の歩みを後押しすることを目指していた。ヨーロッパ、アジア、アメリカ各地から25か国の出展者が参加し、ブルガリアの生産者たちに国際的な有益な交流の機会をもたらした。

博覧会は75日間続き、来場者は16万7000人を超えた。

博覧会の目玉の一つは、電気照明の実演と、ソフィアとの間で行われた電話通信だった。

当初、プロヴディフの博覧会は一度限りの開催とされていたが、時が経つにつれ、これを恒例の博覧会として復活させる構想が生まれた。そして1933年、最初の試験的見本市が開催された。翌1934年には、プロヴディフ博覧会はブルガリア経済の一翼を担う存在となり、1936年12月には国際展示会産業協会（UFI）に加盟し、国際博覧会としての地位を確立した。

最初の国際試験博覧会は1937年5月に開催された。

30年代末には、出展が業種別に専門化される動きも見られるようになった。この時期に生まれた「技術と科学における世界の動向を紹介する」というプロヴディフ博覧会の戦略は、今日の21世紀に至るまで引き継がれている。

1947年には、マリツァ川左岸に会場の建設が始まった。年々拡張を重ね、20世紀末には、南東ヨーロッパ博覧会の最大の会場として知られる現在の姿に成長した。

1960年代には、プロヴディフ博覧会にロゴとスローガン「新たな可能性を創造する」が制定された。

近年では、プロヴディフ博覧会は世界基準に応えるべく、最新のトレンドに遅れることなく、常に近代化を目指している。

1952年8月31日、プロヴディフ
プロヴディフ国際試験見本市の開会を待つ来場者たち
撮影：シメオン・ネノフ、BTA

ブルガリアのホストシティ

1981年6月15日 プロヴディフ：狩猟万博の各国パビリオン内
写真：ディミター・ヴィクトロフ（BTA）

これまでにブルガリアの都市プロヴディフは3回、特別博覧会の開催地となっており、これが同市の格式と、大規模国際イベントの開催地としての名声にさらなる権威を加えている。

最初の特別博覧会は1981年に開催された。この年に行われたのは「世界狩猟博覧会」であり、同様のテーマによる開催は1971年のブダペスト以来2回目だった。

イベントはわずか1年という記録的な短期間で準備され、ブルガリア建国1300周年の記念事業の一環として実施された。

博覧会のテーマは「地球ー生命の惑星」であり、その目的は、世界各地における狩猟業および漁業の発展を紹介するとともに、狩猟と漁業が現代人とどのように結びついているかを示すことだった。

雑誌『LIK』は、世界狩猟博覧会のメディア報道に携わった著名なプロヴディフのジャーナリスト、エヴゲーニ・トドロフ氏に連絡を取った。彼の回想は、当時へと私たちをいざなってくれる。彼によれば、当時、狩猟は主にエリート層の娯楽の一つだったという。「ご存じのとおり、ジフコフ同志の狩猟団は、ほとんど政権の一部だと言われていた。『共和国の狩猟ナンバーワン』と呼ばれていたのは政治局員のペンチョ・クバディンスキーであり、まさに彼が、ジフコフ同志と政治局の支持を受けて、この世界的な狩猟博覧会の開催を提案した」とトドロフ氏は語る。彼はさらに、イベントが「非常に大規模な催し」であり、数十か国がパビ

1981年6月15日 プロヴディフ：ブルガリア狩猟トロフィー館
写真：ディミター・ヴィクトロフ（BTA）

リオンと展示を出展していたことを付け加える。トドロフ氏は、共和国の主要な狩猟家たちがこの機会に自らの成果を披露し、優れた狩猟トロフィーには金メダルが授与されたことも明かしている。「わが国の指導者たちは素晴らしい狩猟家でもあった」と彼は振り返る。また、エヴゲーニ・トドロフ氏は作家ゲオルギ・マルコフの言葉も思い出している。「生前、マルコフは『狩猟は共産主義の一部であり、共産主義国家のエリートはみな狩猟家だった』と書いていたが、我々はそれを超えて世界狩猟博覧会を開催してしまった」と、トドロフ氏は述べた。

1985年、国際青年年に指定されたこの年、プロヴディフのフェアグラウンドでは、11月4日から30日までのほぼ1か月間、「世界若手発明家博覧会」が開催された。このイベントをブルガリアで開催しようというアイデアが生まれたのはその3年前のことだった。当時、世界知的所有権機関（WIPO）の副事務局長であったレフ・コスティコフ教授が、プロヴディフで開かれていた第12回ブルガリア青少年技術・科学創造展を視察した際、その内容に強い感銘を受け、ここで世界規模のイベントを開催すべきだと強く提案した。

ブルガリアが選ばれたのは偶然ではない。もう一つの理由は、1967年にブルガリアで「青少年技術・科学創造運動」が発足し、それが長期的な科学技術進展を目指す組織的な社会・国家的システムへと発展していたことにある。この運動は若者たちに発明の精神を吹き込み、科学技術への関心を高める原動力となった。

1985年の世界若手発明家博覧会では、73か国から4202件の発明が出展された。さらに、現代社会の課題をテーマとした数十回にわたる会議、ディスカッション、ラウンドテーブルも開催された。

若きブルガリア人発明家たちは、フェア会場の7つのパビリオンで自らのアイデアを披露した。彼らの開発テーマからは、当時の問題意識：生産の自動化と機械化への関心がうかがえる。

1991年6月7日から7月7日には、プロヴディフで第2回世界若手発明家博覧会が開催された。

この博覧会の目標は、世界各国の若き才能を奨励し、技術的、科学的、文化的な交流を促進するとともに、発明とイノベーションの成果を紹介することにあった。

この特別博覧会には33か国が参加し、16の組織が支援した。展示された作品は3150点以上、そのうち2000点以上がブルガリアからの出展だった。発明品は科学、技術、テクノロジーのすべての分野にテーマ別に分類された。

併催プログラムでは150を超える会議やシンポジウムが行われ、なかでも注目されたのが「経済・技術発展における若き発明家たち」というシンポジウムだった。このシンポジウムは2日間にわたり開催され、世界知的所有権機関（WIPO）とブルガリア政府が共催した。

プロヴディフでの万博は、アイデアと経験の交流、そして新たな出会いやパートナーシップの場を生み出すという主催者たちの意図を見事に実現した。

国際博覧会事務局（BIE）

万国博覧会が世界中で大きな関心を集めるようになったことで、その開催と運営に共通のルールを設ける必要性が生まれた。こうして1928年11月、パリにおいて31か国が国際条約に署名した。そして、その施行を監督するための組織として国際博覧会事務局（Bureau International des Expositions – BIE）が設立された。

事務局の本部はパリに置かれ、現在ではブルガリアを含む184か国が加盟している。

1928年に締結されたパリ条約では、博覧会を第一カテゴリーと第二カテゴリーに分類している。その違いは、第二カテゴリーでは参加国が自前でパビリオンを建設しなくてもよい点にある。また、この条約により、同一カテゴリーの万国博覧会の開催間隔は最低6年空けることが求められた。

その後、パリ条約はさまざまな議定書によって補足・改正されてきた。たとえば1988年の議定書では、現在適用されている「万国博覧会は5年ごとに開催」という間隔が定められた。

今日、国際博覧会事務局（BIE）の監督下で開催される博覧会には、万国博覧会、特別博覧会、園芸博覧会、そしてミラノ・トリエンナーレの4種類がある。

本稿における統計データの多くは、国際博覧会事務局（BIE）の公式ウェブサイトに基づいている。

LIK 2025

BTAアーカイブを通して紹介される世界博覧会

1851 年、ロンドンのハイド パークで最初の万国博覧会 (EXPO) が開催されました。正式名称は「万国産業博覧会」、またはよく「万国博覧会」と呼ばれます。それは今日まで続く伝統の始まりを示しています。これらの主要な国際イベントは世界各地で開催され、数十カ国からの代表者が集まり、貿易関係の構築に貢献し、経済と産業の発展を象徴します。

長年にわたる世界博覧会の開催と組織は、ブルガリア電信社 (BTA) の情報の流れの中で積極的に存在してきました。それらに関する情報は、手書きで書かれた同庁の最初の速報で見ることができます。 BTA は長年にわたり、万博が開催されているいくつかの国に特別特派員を派遣し、ブルガリアが参加していない場合でもイベントを綿密に追跡してきました。

LIK マガジンでは、BTA アーカイブから収集した世界の博覧会に関する出版物のハイライトを特集します。この機関は 1898 年に設立されたため、この国際的な取り組みの初版から本物のメッセージを見つけることはできません。しかし、1970年の大阪万博の特使ディミトリ・イワノフが次のように書いたことを私たちは思い出します。

万国博覧会の理念は、数十年にわたって変化してきました。150年前、ヴィクトリア女王の支援の下、ロンドンで開催された第1回万国博覧会では、当時の最先端の大砲など、現代の来場者を驚かせる展示品が展示されていました。1889年にパリで開催された第9回万国博覧会では、もはや軍事デモンストレーションの痕跡は見られませんでした。フランスは、万国博覧会のために特別に建設されたエッフェル塔でその工学技術力を披露し、新しい美術館や演劇作品によって、博覧会の伝統に文化的要素を加えました。セントルイスで開催されたアメリカ万国博覧会では、自動車時代の到来を予感させました。

次のページでは、いくつかの世界博覧会と、その派生である専門世界博覧会と園芸世界博覧会について詳しく説明します。

楽しい読書をお楽しみください!

1900年
フランス、パリ万国博覧会

ブルガリア電信社設立初期の速報に手書きで掲載されたニュース記事には、4月2日にパリで何が起こっていたかが記されていました。「万国博覧会の開会に際し、ルベ共和国大統領はアメリカ合衆国マッキンリー大統領とセルビア国王アレクサンドルから祝電を受け取りました。ヴァルデック=ルソー首相も、州内外から数多くの祝辞を受け取りました。万国博覧会は今朝8時に大勢の観客を迎えて一般公開されました。天候は良好です。」

* * *

8月9日のニュース記事には、「展覧会のブルガリア館のコミッショナーであるディミトロフ氏がレジオンドヌール勲章シュヴァリエに任命された」とある

1904年
アメリカ、セント・ルイス万国博覧会

4月18日の速報で発表された短い告知には、セント・ルイスで「万国博覧会が本日開幕した」と書かれていた。

1905年
ベルギーのリエージュ万国博覧会

「国際博覧会の開幕は昨日の午後、華やかな祝賀会とともに行われた」と、4月15日のリエージュからの報道は伝えている。

* * *

7月21日のメッセージには、外務省の政治部長とリエージュ博覧会のブルガリア代表が「リエージュ行きの列車」で出発すると書かれていた。

* * *

1975 年 7 月 15 日のニュース記事は、ベルコヴィツァの大理石の名声がいかにしてブルガリア国境を越えて広まったかを示す例として、リエージュ博覧会のひとときを回想しています。ベルコヴィツァのイヴァン・ヴァゾフ博物館には、1905年の万国博覧会に参加したトドル・イリエフに市から贈られた銅メダルの賞状が所蔵されています。彼が参加した大理石製品は、ブルガリア館のグループ11-a、シリアル番号63に登録されていることが示されています。

1906年
イタリアのミラノ万国博覧会

4月15日付ミラノ発の報道によると、イタリア王室夫妻はミラノに到着したという。「激しい雨にもかかわらず、国王夫妻を待つために駅に集まった群衆から熱狂的な拍手が送られた」とニュース報道は伝えた。悪天候のため、統治者たちは博覧会への訪問を延期することになった。当日の発表では、「国王は各国の首席委員に自己紹介するために、美術パビリオンへ行かなければなりませんでした。フランス、ベルギー、ハンガリーのパビリオンはすでに準備が整っています。イタリア・マリーナのパビリオンも準備完了です。その他のパビリオンはまだ準備が整っていません」と述べられていた。

1910年
ベルギーのブリュッセル万国博覧会

「今日の午後、国王、女王、外交団、大臣、国会議員らの出席のもと、万国博覧会が開会された」と、4月10日のブリュッセル発のニュース報道で報じられた。

* * *

5月11日付の出版物には、「ブルガリア皇帝陛下は、アルブレヒト国王陛下と共に本日、現地万国博覧会のドイツセクションを視察されました。両陛下は枢密顧問官兼帝国委員のアルブレヒト氏に迎えられました」と記されている。

ドイツ委員会の委員長とドイツ商工業者協会の会員がブルガリア皇帝に紹介されました。彼は、さまざまな場所から多くの良い話を聞いているので、ドイツセクションを訪問すると本当に喜びを感じると伝えます。国王陛下は、ドイツの鉄道産業を紹介する展示会のセクションに特に興味を持たれました。

* * *

6月19日、ブルガリアのマリノフ大臣とムシャノフ大臣は、参謀総長のフィチェフ将軍、外務省儀典長のミルチェフ氏に同行され、ブリュッセルに到着し、展示会も視察した。

1913年
ベルギーのゲント万国博覧会

BTA アーカイブでは、ベルギーのゲント市での展示会に関するニュース項目が 1 つだけ見つかりました。この文書は8月8日付で、イベントに参加していた国のパビリオンの1つで発生した火災について伝えている 。

1929年
スペイン、バルセロナの世界博覧会

5月20日、BTAはフランスの通信社アヴァスを引用し、ボンフー仏貿易大臣、グロー将軍、セルイ氏がバルセロナに到着し、同市での展示会フランスセクションの開会式を主宰したと報じた。

* * *

5月22日の報道によると、「フランス商務大臣、農務大臣、そしてグロー将軍は昨日、国王夫妻とプリモ・デ・リベラ将軍の臨席のもと、バルセロナ万博フランスセクションを開会した。フランスは2万2000平方メートルのスペースに1650の出展者を擁する。ドイツは1万7000平方メートルのスペースに800の出展者で3位、イタリアは8000平方メートルのスペースに300の出展者を擁する」と報じられている。

1935年
ベルギーのブリュッセル万国博覧会

4月27日、世界博覧会の開会式での演説で、ベルギー国王は、人々の孤立と貿易関係の拡大への願望の間には大きな矛盾があると強調した。この展覧会は後者の願いを証明するものである。「貿易関係が正常化し、貿易の自由が回復されるまで、経済発展への回帰は不可能だろう。時間は待ってくれない。新たな流れが世界経済を回復さ

せつつある」と、今日のニュースで報じられた。

国王は、36カ国が博覧会に参加し、会期中にブリュッセルで200の国際会議が開催されることに満足の意を表した。国王は、この展覧会が人々の間の連帯を強めるのに役立つことを願って演説を締めくくった。

* * *

5月29日、ブリュッセル国際博覧会のブルガリア館がオープンした。展覧会の主任コミッショナーであるウォーターズ氏がジャーナリストたちを迎えた。

6月1日、BTAはハバス通信社からのニュースも引用し、これもブルガリア館の公式オープンに焦点を当てた。続いて、パリ及びブリュッセル駐在ブルガリア全権公使K・バトロフ氏、博覧会のチーフコミッショナーのウォーターズ氏、国家経済大臣のヴァン・イザケル氏がスピーチを行った。

* * *

11月4日のニュースでは「国際博覧会は閉幕した」と報じられた。

1937年
フランス、パリ万国博覧会

5月24日、博覧会の開会式後、ポール・バスティード大臣はハバス社代表に対し、次のように述べた。「博覧会運営の最高責任者、そして貿易大臣として、本日皆様が出席された素晴らしい開会式に心からの喜びを申し上げます。この博覧会は、この偉大な事業に携わったすべての産業関係者、フランス国民、そして参加した外国人の皆様に敬意を表するものです。」BTA は　大臣がいった言葉を伝えた。

* * *

6月12日の出版物には、この日が「諸国民俗学代表団」が国際博覧会のためにパリにやって来て参加する「諸国民俗学代表団」が参加する「諸国民の祝典」の始まりの日であると記されている。

* * *

7月4日、アメリカ館の開館式典で、米国大使は次のように述べました。「今日、独立宣言の記念日にあたり、1億3000万人のアメリカ国民は、当時わずか300万人のアメリカ人が自由のために戦っていた時、フランスが私たちを助け、自由を実現させてくれたことを覚えています。アメリカとフランスの友情は、過去160年間、幾多の困難を乗り越え、揺るぎない絆で結ばれてきました。そして、その友情は今日も揺るぎないものです。」

* * *

7月5日、共和国大統領ルブラン氏は、1937年パリ万国博覧会の建物の定礎式を主宰しました。この場所には2つの美術室が建設され、博覧会終了後も保存され、近代美術館が入居する予定です。多くの外交団員がこの行事に出席している。商務大臣は、この展示会の成功が国際自由貿易による均衡の回復に貢献するだろうと強調した。

* * *

7月23日、展覧会の主要委員会は、パビリオンの一つで、来場した300人のブルガリアの地理教師を歓迎するレセプションを開催した。ブルガリアの教師たちは、モルティエ氏と公教育省の代表であるルーセ氏から祝福を受けた。レセプションにはブルガリア全権公使、公使館職員、アト教授、ボーリオ教授も出席しました。

* * *

7月27日には同博覧会の国際パビリオンがオープンした。ここには 13 か国と 2 つのユダヤ人組織のスタンドが入っています。他の外国のパビリオンを補完します。

同日午後2時過ぎにも次のような報告があった。国際博覧会の来場者数は二千万人に達した。

* * *

7月31日、BTAは、午後3時に、ハイマンス国務次官、ラベ博覧会委員長、ポルティエ副委員長、ジュスティーヌ・ゴダール上院議員、外務省代表、カレ全権公使、ミレット、ボワイエ、ボーリオ各教授、ピコ大使、ダール大使、多数の機関および組織の代表、数名の外国委員長、報道関係者、ブルガリア植民地、ブルガリア公使館職員などが出席する盛大な式典で、パリ博覧会のブルガリア館がオープンしたと報じた。

その日の少し後、BTA は　パビリオンのオープンを反映したハバス通信社によるパビリオンのオープンを報じたニュース記事を公開した。その後、展示会のチーフコミッショナーであるラベ氏がスピーチを行い、ブルガリアの参加を強調し、パビリオンが与えた好印象を強調しました。「最も印象的なのは、物質的・精神的な文化が急速に広がり、人口のますます大きな部分をカバーしている、最果ての村々にまで及んでいるという印象です」と彼は言う。「私たちは、国が急速に発展し、至る所に学校が建てられ、道路が建設され、鉄道網が整備され、黒海とドナウ川に港が築かれ、美術や彫刻といった芸術の発展が促進されているという印象を受けます。」

ブルガリアの展覧会コミッショナーであるバトロフ全権公使は、パビリオンのオープニングに出席した人々に感謝の意を表し、祖国が自らに課した目標「芸術家、職人、農民、土地が生み出すものの総合を生み出すこと」を概説した。

バトロフ氏はその後、ブルガリアではフランス文化の浸透と普及に常に有利な土壌があったと述べ、フランスに敬意を表した。

* * *

11月3日、BTAの会報で、展示会への外国からのお客様歓迎委員会が、展示会視察のためにパリを訪れたソフィア市長イワノフ氏とソフィア市代表団を歓迎して昼食会を催すという記事がのせられたいた。昼食会にはブルガリア全権公使バトロフ氏、リストルーベル大臣、博覧会コミッショナー全権公使モルティエ氏、ブルガリア公使館職員らが出席した。そして夜には、パリ市がソフィア市からの代表団を招いて夕食会を主催します。

11月12日、BTAはハバス通信社からのニュースを伝え、ゴールデンアロー号に乗ってパリ北駅に午後5時50分に到着したブルガリア皇帝ボリス3世と皇后ヨアンナの到着を伝えた。共和国防衛隊の一隊が彼らに敬意を表した。政府を代表して、儀典長のロゼ氏と共和国大統領の代表であるデ・ベルフォン大佐が彼らを歓迎した。出席者の中には、バトロフ氏、マリノフ氏、スタメノフ氏、シクステ＝ブルボン＝パルマ王女、ランジェロン知事などがいた。

パリに住んでいるブルガリア人民を代表して、バトロヴァ夫人は　ジョアンナ女王に豪華な花束を贈呈しました。その後、小さな行列ができて統治者の車まで進み、彼らをホテルまで連れて行って上げました。

* * *

11月13日午前10時、ボリス皇帝とヨアンナ皇后が正式に展覧会を訪問した。ブルガリア国旗がはためくブルガリア館の入り口では、第一公使館書記官のイヴァン・スタメノフ氏が両陛下を出迎え、豊かに漂うローズウォーターの香りが漂う館内を案内されました。統治者たちは下の階に長く滞在し、ウズノフ氏による素晴らしいフレスコ画を鑑賞し、ブルガリアの農民の家を訪問しました。次に、素晴らしい花瓶、絹、陶器、ファイアンス焼きの製品を集めた名誉サロンと民芸ホールがある1階と、カーペット、タバコ、果物、ローズオイルなどブルガリアのさまざまな産業部門の作品が展示されている産業ホールに向かいます。

* * *

翌日、11月14日、ブルガリア皇帝ボリス3世は「早朝にホテル宅を出て、再び展覧会に向かった。」国王はジョアンナ王妃に同行し、首席委員補佐官のポール・レオン氏の案内でパリ地方のパビリオンを視察した。その後、彼は鉄道部門を訪問し、「優れた鑑定家として」最新の改良が施された機関車をじっくりと観察した。

その後、ジョアンナ王妃が工芸部門とイタリア館を視察していたとき、ボリス皇帝はペレン教授に率いられて発見の宮殿に向かいました。

* * *

11 月 15 日、BTA ニュースレターに掲載された　ハバス通信社からの別のニュース記事を載せられた。このニュースは、展覧会のブルガリア館でブルガリアの統治者を訪問しているフランス共和国大統領とルブラン夫人について語ります。「昼食は、芸術家ウズノフによるフレスコ画で美しく装飾され、ブルガリアの生産の象徴であるバラの繊細な香りで満たされたパビリオンの栄誉の広間で個別のテーブルで提供され、パビリオンの入り口にはローズウォーターが流された」と、その日のニュースは伝えた。

* * *

11月18日の夕方、ブルガリアの統治者たちはパリを出発し、スイスに向かい、そこで短期間滞在した。そして11月25日、BTAが引用したハバスニュースによると、パリ万博は「正午過ぎ」に閉幕した。

1939年

ベルギーのリジュで開催された専門世界博覧会

「ベルギー国王は王子たちを伴い、今日の午後、リエージュで国際博覧会を開会した」と、BTAが引用した5月20日のハバス通信は伝えていた。

* * *

フランス共和国のルブラン大統領は7月19日午前7時30分にパリ北駅からリエージュへ出発した、リエージュ博覧会を公式訪問する予定であると、当日のニュースで報じられている。また、彼は水の博覧会とフランス館も訪問する予定。

ルブラン大統領は午前11時半に町に到着し、すぐに展示会のフランスセクションに向かいました。彼はまた、リエージュの州宮でベルギー国王レオポルドから昼食に招待された。

1939年

アメリカ、ニューヨーク万国博覧会

「ニューヨーク万博は明日、日曜日の午前11時に開場します。今日は一日中、5万人の作業員が会場と建物の整備に奔走しています。市内のホテルは急速に満室となり、周辺の道路はニューヨークへ向かう観光客の車で既に渋滞しています」と4月29日の報道は伝えています。

* * *

万国博覧会の開会演説で、ルーズベルト大統領は、今後数年間でヨーロッパ諸国の間に築かれた多くの障壁が取り除かれるだろうという希望を表明した。その後、彼はアメリカ合衆国の歴史を簡単に概説し、人類に捧げる展示会の開会を宣言した。

* * *

ニューヨーク万国博覧会で国際連盟パビリオンが開設され、ウォレス農務大臣も出席した。同大臣は演説で「民主主義の真の原理は、いつの日か世界中で確実に勝利するだろう」との確信を表明し、国際連盟はすべての人類の兄弟愛を実現する恒久的な存在となるだろうとも宣言したと、5月3日付の出版物で報じられている。

* * *

5月10日、イタリア大使の臨席のもと、ニューヨーク万国博覧会のイタリア館が正式にオープンした。ニューヨーク市長のラガーディア氏はイタリア語で演説し、「イタリアの子供の一人、クリストファー・コロンブスがアメリカを発見して以来」アメリカ文明に対するイタリアの多大な貢献を強調した。

* * *

ニューヨーク万国博覧会のジャパンデーが6月2日に平和宮で祝われた。堀内 謙介大使がアメリカと日本の友好関係を強調する演説を行いました。ニューヨーク市のラガーディア市長は応答の中で、近年の日本人の急速な進歩を強調した。彼は、国家が強くなればなるほど、その責任の重荷も重くなると付け加えた。そして彼はこう締めくくっています。「弱い国に対して融和的であることは、強い国の義務である。」

* * *

6月11日のニュース記事には、英国王室一家が万国博覧会を訪れ、「白昼堂々のイルミネーション」を鑑賞した後、英国とアイルランドのパビリオンへ向かった様子が伝えられている。

展示会場を出る後、行列は世界最大級の橋の一つであるトライボロー橋を渡ります。 45分の旅の後、国王夫妻はコロンビア大学に到着し、大勢の聴衆の歓迎を受けた。

* * *

「ニューヨーク万国博覧会は今夜閉幕する」と10月31日のニュース報道は伝えた。来年5月25日に再開する予定だが、「出展者が不足するのは確実だ」と書かれていた。新聞各紙は、展覧会の閉幕について概ね、この展覧会は民主主義と国家間の親善の旗印の下に行われたと論評した。

1958年

ベルギーのブリュッセル万国博覧会

「本日、1958年ブリュッセル万国博覧会が開幕しました。ベルギー国王、ベルギー政府関係者、博覧会参加国の代表、外交団、ベルギー国民の代表、そして数千人の市民が出席し、盛大な祝賀会が開かれました。世界中から3,000人のジャーナリストもブリュッセルを訪れています」と、BTAブリュッセル特派員は4月17日に報じました。

式典ではボードウィン国王とヴァン・アッカー首相が演説を行った。

近年、人類は極めて強力な自然の力を制御してきたことを指摘し、国王はこう述べました。「私たちの前に二つの道が開かれています。一つは、科学者の天才たちの発見を人類に押し付ける恐れのある、競争と軍備拡張の道。もう一つは、社会や政治の見解の違いに関わらず、理解へと向かう道です。理解こそが真の平和へと導く唯一の道です。この展覧会の目的は、協力と平和の雰囲気を醸成することです。」

この万国博覧会には、ソ連、チェコスロバキア、ハンガリー、ユーゴスラビアといった社会主義国を含む世界各地から50カ国と国際機関が参加した。各国および組織の個別のパビリオンのほかに、2 つの大きな共通パビリオンもあります。1 つは国際科学宮殿で、15 か国の科学者が力を合わせ、特に原子物理学、化学、生物学の分野における現在の科学レベルを実証しています。国際芸術宮殿では、世界最大級の美術館が参加した「近代美術の 50年」展や、芸術の歴史的発展に関する「人間と芸術」展が開催されます。

展示全体のシンボルは、巨大な「アトミウム」です。これは、1500億倍に拡大された鉄原子の模型を描いた高さ100メートルの金属構造物です。アトミウムは私たちの時代を象徴しており、その建設者の設計には、最も強力なエネルギーである原子力の平和利用を求める呼びかけが込められています。

* * *

4月19日、BTA特派員がソ連館について語りました。彼によれば、それは2万5千平方メートルの広大な建物だといった。長さ150メートル、幅72メートル、高さ22メートルです。パビリオンは金属構造とガラスを使用して長方形に建てられています。建物の壁は屋根を支えるのではなく、ガラスとアルミニウムでできており非常に軽量であるため、屋根から吊り下げられています。展示会では、ジル、チャイカ、モスクヴィッチなどソ連の乗用車の最新モデルも展示され、「美しい現代的な構造と素晴らしい室内設備で強い印象を与えた」といったう。

特派員は米国館の前でも立ち止まったが、そこは「決して小さくない」。金属とガラスを巧みに組み合わせて作られた、ローマの古代コロッセオに似た円形のアメリカ館の直径は 116 メートルです。しかし、BTA特派員によれば、最大かつ最強の資本主義国家の経済、社会、文化生活、国民の生活様式など、その包括的な姿を把握することは決して不可能だという。彼は、電子計算機の操作を実演するスタンドが最も印象的だと指摘しています。放射性同位元素を操作するための自動アームの働きを展示するブースの周りにも来場者が集まっています。

* * *

4月22日、BTA特派員はチェコスロバキアとハンガリーのさらに2つのパビリオンの状況を伝えた。「チェコスロバキア共和国のパビリオンは、その建築デザインにおいて広々としており、堂々としている。しかし、最も強い印象を与えるのは、間違いなくその素晴らしい配置である」と彼は書いている。彼によれば、パビリオンの制作者は素晴らしい趣味と創意工夫を発揮しており、訪問者は魅了されながらホール内を歩き回り、数メートルごとに独創的な展示物や装飾要素を発見するそうです。ジャーナリストは、チェコスロバキア館では、活気ある現代の文化生活を展示しているとともに、文化遺産とその保存にも大きなスペースを割いていると付け加えている。

「ハンガリー人民共和国のパビリオンはかなり小さいが、その独創的なレイアウトと内容でも際立っている」とBTA特派員は伝えていた。

* * *

ブリュッセル万博は開幕から1週間が経過したが、まだその完全な姿を来場者に披露できていない。「フランス、イタリア、スペインなどのパビリオンを含む多くのパビリオンはまだ準備が整っておらず、オープンは5月上旬に予定だ」と、4月23日のBTA特派員のニュースレポートを伝えた。

主要国のパビリオンの中でも、イギリスパビリオンは大きな関心を集めています。これは英国の科学技術の最新の成果という旗印の下に組織されています。興味深いモデルや予測を通じて、医学、航空学、考古学、電波天文学、その他の科学の分野における新たな研究や発見が紹介されます。ここでは、繊細な心臓手術中に、体から酸素を奪うことなく血液の循環を止めるのに役立つ機器の動作を見ることができます。

ブルガリアの隣国のうち、この博覧会に参加しているのはユー

ゴスラビアとトルコだけだ。ユーゴスラビア連邦人民共和国のパビリオンには、同国の成功を示す写真が展示されています。

トルコ館はまだ完全には完成していないが、訪問者はすでにその大部分を見ることができる。トルコ館は、民芸品や考古学、歴史の展示品でほぼ埋め尽くされる予定です。

* * *

4月26日、国際労働機関のモース事務局長がブリュッセル万国博覧会の国連パビリオンの公式オープンを宣言した。パビリオンの中央には巨大な原子模型が設置されている。原子核は地球であり、その周囲にさまざまな大きさの小さな球が電子として配置され、大きな国と小さな国を象徴しています。全体として、このモデルはパビリオンの主なアイデアを体現しています。つまり、原子のさまざまな粒子がつながっているのと同じように、世界のすべての国が地球上で互いにしっかりとつながっているべきだということです。

* * *

10月19日深夜、ブリュッセル万博は盛大な花火大会とベルギー国旗および参加国の国旗を降ろす厳粛な式典で閉幕した。博覧会の中央広場では、6か月間燃え続けていたトーチも消えた。

1961年

イタリア・トリノの専門世界博覧会

5月8日の報道によると、「昨日、トリノでイタリア統一100周年記念の一環として、国際労働博覧会が開幕した。『技術と国家の100年にわたる進歩、成果、そして展望』をテーマとした博覧会は、イタリア政府が国際労働機関（ILO）と共同で策定したプログラムに基づき、18カ国のパビリオンで展開されている」という。

各国は、この共通テーマの特定の側面を明らかにする展示を行います。たとえば、フランス館は研究方法の発展について、デンマーク館は住宅建設について、アルゼンチン館は農業の機械化について、日本館は新しい漁業技術についてなどについて話します。

社会主義国の博覧会の焦点は、大志とニーズを持つ人々です。たとえば、ポーランドのパビリオンは、労働者階級が権力を握っている国における労働者の社会保障について語っています。チェコスロバキア社会主義共和国のパビリオンは、村の協同組合運動の勝利後の農民の生活の大きな変化に捧げられています。 「すべては人類の幸福のために」は、「安全、衛生、労働条件」をテーマにしたソ連館のモットーです。

1962年

アメリカ、シアトル万国博覧会

5月7日、BTAはTASS通信社のニュース記事を引用し、米国を旅行中でワシントン州の州都シアトルに到着しているソ連のパイロット兼宇宙飛行士G・S・チトフ氏について伝えた。そこで国際博覧会が開催されていて、アメリカ、ブラジル、カナダ、デンマーク、フランス、イギリス、インド、日本、アラブ首長国連邦、メキシコなど15か国が参加しました。 4月25日にオープンし、6か月間続きます。展覧会のメインテーマは「宇宙時代の人間」です。数多くの展示ホールでは、原子力と宇宙開発の時代における科学技術の最新の成果が展示されています。

シアトルの住民と全米各地からここに到着した何千人もの観光客は、ソ連の宇宙飛行士を非常に暖かく心から歓迎した。ゲルマン・ティトフは市内滞在初日の大半を展示会に費やした。彼は展示物を注意深く観察し、パビリオンを案内してくれたアメリカ航空宇宙局の専門家たちと意見を交換した。いくつかの地点では、展示場内を移動することがほぼ不可能になります。非常に多くの人が常に宇宙飛行士を取り囲んでいるからです。

1964年

オーストリア・ウィーンで開催された世界園芸博覧会

4月16日付の報道によると、「オーストリア連邦共和国大統領アドルフ・シェルフ博士は本日、ウィーン国際園芸花卉博覧会を開会した。ドナウ川左岸の1,000デカレの敷地で開催されるこの博覧会は、今年10月15日まで開催され、ブルガリア人民共和国を含む28カ国が参加する」とされている。

1964/1965年

アメリカ、ニューヨーク万国博覧会

「本日、ゴヤの最も有名なキャンバス作品がスペインから到着しました。これらの絵画は、2日後に開催される万国博覧会のスペイン館で展示されます。ミケランジェロ、エル・グレコ、ピカソなどの著名な作品も各国の館で展示されます」と、BTA特派員が4月17日にニューヨークから伝えました。

* * *

「午前9時、ニューヨーク建国300周年を記念した1964-1965年国際博覧会が来場者に公開された」と4月22日のニュース報道には記されている。

この展示会には59カ国とほぼ半数の州が参加するが、大手自動車メーカーやその他の企業といったアメリカの民間企業の巨大なパビリオンが目立っている。

1965年

ドイツ・ミュンヘンの専門世界博覧会

6月25日から10月3日まで、ミュンヘン（ドイツ）で第1回世界交通通信博覧会が開催され、ブルガリアのブースも出展されます。わが国の鉄道輸送と通信の発展をさまざまな写真や図表で説明します。「バルカンツーリスト」は芸術的なボードを使って色々なリゾート建設の様子を示し、国際的な観光地としての我々の成功について伝えます。

1967年

カナダのモントリオールで開催された万国博覧会

「明日、最も独創的な世界博覧会の一つがここで開幕する。これは、カナダ連邦（現代カナダの前身）の100周年、博覧会の開催地であるカナダ最大の都市モントリオールの325周年を記念するものであるが、何よりも人類の進歩と人類が生み出した現代技術に捧げられている」と、BTA特派員G・ナイデノフ氏は4月26日に書いている。

合計で70か国がモントリオールに出展し、アフリカ諸国のグループが共同パビリオンを設置します。スカンジナビア諸国もまた、統一された屋根の下にあります。

ほとんどすべての宮殿の建築的外観は「未来的」で、大胆な「風通しの良い」形状をしており、あらゆる建築的アイデアを再現するための現代の材料と建築方法の可能性を示しています。

開催国は、一連の建設と建築の偉業を成し遂げようとしている。博覧会のために、ブリュッセルでの前回の世界博覧会の数倍の面積を持つ人工島を川の真ん中に丸ごと「建設」したのだ。カナダのいくつかのパビリオンの中で最も興味深いのは、まだ見ぬ住宅団地「ハビタット67」（「居住地67」）です。そこには、まるで存在しない山の斜面に建っているかのように近代的なアパートが建てられており、屋根が互いにテラスの役割を果たしており、外見は私たちのヴェリコ・タルノヴォの一部のように見えます。しかし、その下には「山」は存在しません。いずれも露出性に優れ、屋根付きの通り、歩行者用の広場、そしてその下には車やトラック用の通路が設けられており、歩行者の間を通り抜ける必要がありません。

明日から6ヶ月間、EXPO-67は世界の注目を集めるでしょう。展覧会の全体テーマ「人間とその世界」は、フランスの飛行家で作家でもあるテグジュペリの著書の一つに由来しており、英訳では同じ題名になっています。サブテーマは、研究者、生産者、創造者、農民、そして社会における人間です。「まさにその通りです」とBTA特派員は記しています。

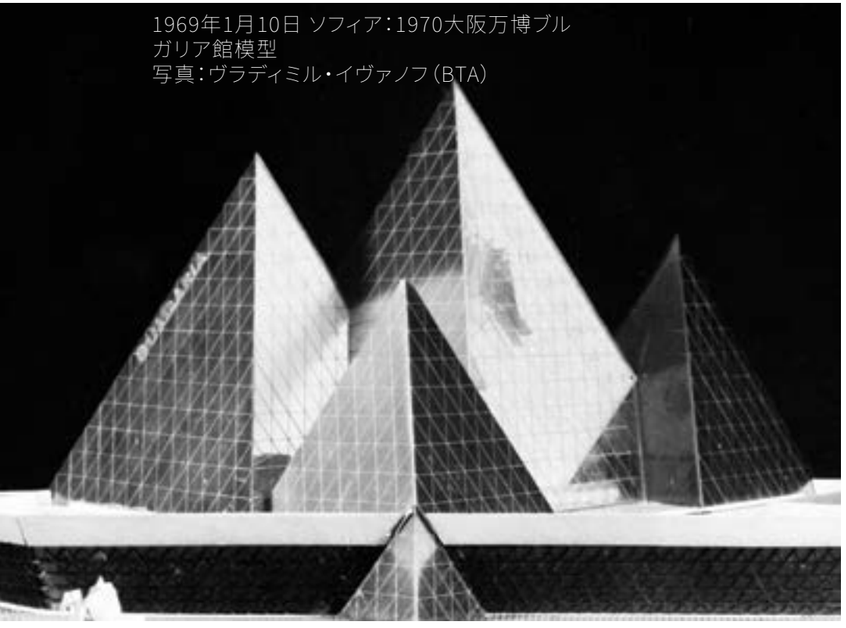
* * *

「これは人類の記念碑です。EXPO-67には、人類の作品と思想の最も重要なコレクションの一つが展示されています」―カナダの首相レスター・ピアソンは、4月27日にモントリオールで開催された万国博覧会の開会の辞でこう述べました。

展示会が開催されている6か月間、すべての参加国は国民の祝日が予定されており、これらの国や他の国の高官が訪問する予定です。モスクワ・ボリショイ劇場のバレエやミラノ・スカラ座など、世界の著名な劇場へのゲスト出演も予定されている。

さまざまな国の最高の技術的成果とともに、古代から現代までの多くの芸術作品がここに展示されています。

国際規則に従い、モントリオール万博では商業活動は行われませんが、ビジネスマンが情報や経験を交換するための会議のための特別なセンターがあります。



1969年1月10日 ソフィア：1970大阪万博ブルガリア館模型
写真：ヴラディミル・イヴァノフ（BTA）

* * *

「またしても、早朝から万博会場へと人の流れが広がっている。至る所から熱狂的な歓声が聞こえ、カメラのシャッター音、映画カメラのシャッター音が響く。多言語を話す群衆は一瞬たりとも静まることはない。既に多くの国からの観光客がEXPO-67を訪れている」と、BTA通信は4月30日にタス通信の記者の言葉を引用して報じた。彼らによると、万博の来場者数は最も楽観的な予測を上回っているという。初日には宮殿を33万5000人が訪れた、その間、電子計算機ではその日の訪問者数は12万人になると予測されていた。「しかし、報道機関と電子的な「知性」の両方によるもう一つの予測は裏付けられた。ソ連館が博覧会で最も人気を博したのだ」とジャーナリストらは主張し、米国、カナダ、チェコスロバキア、アフリカ諸国の館への来場者数も多かったと付け加えた。

* * *

ブルガリアのトドル・ジフコフ首相は、カナダ政府による万国博覧会への招待を受けてニューヨークからソフィアへ向かう途中、モントリオールに到着した。 6月26日、ジフコフ氏はワシントン駐在ブルガリア大使のリュベン・ゲラシモフ氏、オタワ駐在ブルガリア大使館長のキリル・シュテレフ氏、ブルガリア人ジャーナリストらとともにEXPO-67を訪問した。駐カナダ・ソ連大使の温かい歓迎を受けたブルガリアの来賓は、「すべては人間の名の下に、すべては人類の幸福のために」というモットーで飾られたソ連館を大変興味深く見学した。

ブルガリアのゲストはチェコスロバキア、ユーゴスラビア、キューバ、カナダのパビリオンも訪問し、友好的な会話を交わした。

翌日、ブルガリア人民共和国閣僚評議会議長のトドル・ジフコフ氏は、帰国前にモントリオール博覧会の他のパビリオンも訪問した。

彼は仲間とともに、フランス、イギリス、日本、アメリカのパビリオンを視察した。彼らはどこでも総代表やパビリオン関係者から温かく歓迎されます。

カナダ政府はトドル・ジフコフとその仲間たちを偲んで、展覧会場のエスキモーレストランで昼食会を主催する。その後、ブルガリアからのゲストは、オリジナルの実験住宅複合施設「ハビタット　67」や無線電話通信パビリオンを見学し、「ラビリンス」映画館での上映会に参加しました。

トドル・ジフコフ氏はモントリオール市長のドラポー氏、万国博覧会のコミッショナーのデピュイ氏とも会談した。

夕方、ジフコフは公式の栄誉を受けてソフィアに向けて出発した。

* * *

10月28日、BTA特派員ゲオルギ・トドルチェフ氏がEXPO-67の閉鎖について報道した。カナダ駐在のブルガリア通商代表、イヴァン・ゴロメーエフ氏も同庁特使と会談した。同氏は、この博覧会は「我が国にとって貴重な経験をもたらし、新たな科学的、技術的、経済的、商業的、文化的なつながりを確立した」と語った。同氏によれば、世界的に有名なブルガリアの歌手ニコライ・ギャウロフが、展覧会を記念したモントリオール世界音楽祭のミラノ・スカラ座ツアーの中心人物として参加し、素晴らしい成功を収めたという。

ジャーナリストは、10月29日日曜日には、数多くの祝賀行事、式典、コンサート、競技会、娯楽行事が行われるため、EXPO-67は閉幕すると指摘している。「参加国の国旗が国家広場に掲揚されます。今年最も華やかで華やかな国際イベントの一つが幕を閉じます。最新の報道によると、セントローレンス川の島に位置するこの美しい展示場には、過去最高の5,000万人が訪れました」と彼は記した。

1970年

日本の大阪で開催された万博

LIK マガジンのこの号のコンテンツの最初の部分では、大阪万博とブルガリアのその博覧会での活躍について読むことができます。

1971年

ハンガリー、ブダペストの専門世界博覧会

8月29日、ハンガリーの首都ブダペストで開催された国際狩猟博覧会に合わせて、世界26か国の作家による写真展「人間と自然」が開かれた。風景写真や動物、花などの珍しい写真など1,500点以上の作品が展示されています。

* * *

BTA特派員S・スタモフは、9月13日に開催されたブルガリアの建国記念日の第一回世界狩猟博覧会についてブダペストからレポートしています。スタモフによると、ブルガリア宮殿は最も多くの訪問者が訪れる博覧会の一つだそうです。展示会を訪れた約60万人のうち、50万人が当社の展示をご覧になりました。レビューブックには800件の肯定的なレビューがあります。展示されている500点のうち、300点は狩猟のトロフィーであり、290点はブダペスト博覧会でさまざまなメダルを授与されたものである。 5 つの展示作品がブダペスト 71 大賞を受賞し、116 作品が金メダルを獲得しました。鹿の角のコレクションだけで242.58ポイントを獲得し、世界第6位となった。

全体的な印象としては、私たちのパビリオンが展示会のテーマ「人間と自然」に最も近いというものです。テン、イタチ、フェレット、キツネ、ジャッカル、オオカミ、クマなどの狩猟動物の皮は非常に興味深いものです。専門家たちは、展示されているイヌワシ科、ノガン、クマ、コルキスキジの剥製を特に高く評価しています。これらの動物は、ヨーロッパの動物相では長い間絶滅危惧種とされており、我が国でのみ保護されてきました。

ご存知のとおり、第1回世界狩猟博覧会には52か国が参加しました。ブルガリアを含む42カ国には独立した国立パビリオンがあります。

* * *

9月30日、第一回世界狩猟博覧会が閉幕した。 1か月以上にわたり、この博覧会は200万人近くの来場者に地球上の動物の世界を見せ、狩猟スポーツの多くの新たなファンを獲得してきました。

ブダペストの展覧会はその代表性によって特徴づけられます。50か国以上のさまざまな組織や代表者が、80,000平方メートルの展示スペースに展示物を展示しました。展示会内で開催される馬術競技やドッグショーも大きな関心を集めています。展示されているのは狩猟や漁業、環境を汚染から守るための施設などです。展示会で展示された最も興味深い狩猟トロフィーには、「ブダペスト　1971」の刻印が入った金、銀、銅のメダルが数百個授与されました。

嬉しいことに、ブルガリアは世界狩猟博覧会で最も優れた成績を収めた国の一つであるという印象が一般的です。訪問者は狩猟のトロフィーが多数展示された私たちの展示場を強い興味を持って見ています。

その日のニュースによれば、ブダペスト世界狩猟博覧会は、その使命を立派に果たしたと断言できる。「人間と自然」というテーマにうまく取り組むことで、山岳地帯、平野、深海に生息する動物界の保護に対する関心を高めることに貢献し、環境を汚染から守るための緊急対策を講じる問題を議題に上げます。この展覧会は、国家元首、政府首脳や政府関係者、著名な公人や文化人がハンガリーを訪問する機会となった。狩猟観光の発展に貢献しているとともに、狩猟・漁業分野における国際協力の枠組みをはるかに超えた意見交換の機会を提供します。

1981年

ブルガリアのプロヴディフ市で開催された専門世界博覧会

狩猟用の角笛の音が会場に響き渡り、色とりどりの若い男女が

ブルガリア・トロフィー・パレス前の広場を埋め尽くす。彼らの独創的で陽気な構成で、世界狩猟博覧会EXPO-81の厳粛な開会式が始まる。狩猟衣装をまとった騎手を従えたディアナの戦車が通り過ぎる。弓を持った少女が標的に矢を放つ。プロトブルガリア騎兵隊が現れ、猟場管理人、猟師、漁師たちが狩猟行進の音に合わせて行進する」。これは、BTAプロヴディフ特派員シメオン・シメオノフとリリア・トドロヴァによる6月14日のレポートの冒頭である。

何千人もの市民がこの印象的な光景を見るためにやって来ました。古代の狩猟シーンを背景に、何世紀にもわたる人間と自然の関係、そして自然の法則に従った調和のとれた存在を目指す人間の努力が表現されています。

公式スタンドには、トドル・ジフコフ、ペコ・タコフ、ペンチョ・クバヂンスキーなどの政府指導者、および多くの外国の来賓が出席している。ここには我が国に認可された外交使節団の代表や団員、多くの外国人ジャーナリストがいます。

狩猟者の行列が終わると、広場は踊り子たちで埋め尽くされ、民族衣装が輝き、民族音楽グループが100本のバグパイプの音に合わせて歌い上げます。群衆は厳粛な式典の参加者に長い間拍手を送り、彼らの視線は公式の演壇に向けられていた。

ハンガリー農業食品産業省のガボール・ソス次官が、ブダペストで開催された第1回世界狩猟博覧会のシンボルである様式化された鹿の像をEXPO-81のコミッショナーであるペンチョ・クバヂンスキーに手渡した。彼は、この展覧会が自然の宝の保護と賢明な利用に貢献するであろうことを大成功に祈った。

ペンチョ・クバジンスキー氏は、「地球は生命の惑星」をモットーに全大陸から60カ国以上が参加した世界狩猟博覧会の意義と目標について講演しました。

彼は世界狩猟博覧会EXPO-81の組織委員会を代表し、ブルガリア最古の都市の一つであるプロヴディフにすべてのゲストと出展者を温かく歓迎します。講演者は、この展示会が国際狩猟・野生生物保護評議会と国際スポーツフィッシング連盟の後援のもとで開催され、国家評議会議長トドル・ジフコフ氏の後援を受けているという事実が、この展示会の権威と認知度の高さを物語っていると強調した。

世界狩猟博覧会の目的は、さまざまな国の狩猟および漁業の発展を一般の人々に知ってもらうことです。この展覧会では、現代社会における狩猟、漁業と人間の関わりを紹介しています。産業、交通の発達、大都市の成長は、自然環境の汚染を招く条件を作り出します。当然、これは狩猟対象や魚類の減少、場合によっては完全な絶滅につながります。そのため、展示会の展示では自然保護が大きな位置を占めています。

ペンチョ・クバヂンスキー氏は、この国際イベントが地球の美しく豊かな自然についての知識の向上に貢献し、出展国の野生生物の保護と繁殖に対する配慮を示すことで、展示会のモットーである「地球 - 生命の惑星」を現実的に実現できるという確信を表明しています。ブルガリアが開催地に指定されたことは、同国における狩猟や漁業の発展のための継続的な配慮、そして自然環境とその生きた装飾である狩猟動物の保護に対する配慮が認められたことを意味します。

EXPO-81 の来場者は、世界の野生生物の多様性を示す11,500 点以上のトロフィーを見ることができます。近年多くの国々から入手した最高級のトロフィーが展示されており、そのほとんどはこの展覧会で初めて公開されるものです。間違いなく、ハンターや自然愛好家など、あらゆる人々に忘れられない印象を与えるだろうと講演者は言う。

展示会の主な目的である狩猟のトロフィーの展示に加え、ここでは個別のテーマ別パビリオンも組織され、自然環境の保護、土地とその肥沃さの保護、森林の保護、狩猟と漁業、ブルガリアの美しさなど、さまざまな分野におけるブルガリア人民共和国の成功を紹介しています。

1981年6月15日 プロヴディフ：狩猟万博開会式・各国代表者たち
写真：ディミター・ヴィクトロフ（BTA）

さらに、来場者は、展示会のメインテーマに直接的または間接的に関連するさまざまな他のプログラムを訪問する機会も得られます。しかし、他にも達成されるものがあります。それは、あらゆる大陸のさまざまな国の関係者を知り、団結させることであり、それは間違いなくこの分野での協力の拡大に貢献し、最終的には人類の最も貴重な善である平和を強化し、守ることにつながるでしょう。

熱狂的な嵐のような心からの拍手を受け、国家評議会長のトドル・ジフコフ氏が三色リボンをカットし、世界狩猟博覧会 EXPO-81 の開会を宣言しました。

* * *

6月15日、世界狩猟博覧会のペンチョ・クバヂンスキー総コミッショナーは、EXPO-81の主催団体の公式代表者である国際狩猟・野生動物保護評議会のアルフォンス・リヒター・フォン・ヴュンシュハイム副会長と国際スポーツフィッシング連盟のヨアヒム・ディース副会長と会談しました。

イタリア狩猟協会副会長エンツォ・ミンゴッツィ上院議員も会話に参加した。

権威ある2つの国際機関の代表者は記者との会話の中で、盛大なオープニング式典が展示会のレベルの高さに相応していると述べた。展示会は、出展国の数、トロフィーの数、そして世界新記録の樹立という点で、このテーマでこれまで開催されたすべての国際展示会、さらにはブダペストで行われた第1回世界狩猟博覧会を大きく上回っている。

* * *

6月15日、世界狩猟博覧会の来場者にとって最も興味深いイベントは、最初の犬種競技である外観展示競技であった。その目的は、世界における犬学研究の発展を紹介することです。 25種類以上の犬種、約600匹の犬が国際委員会の前に展示されました。

4日間にわたり、犬学愛好家は展示されている犬の狩猟能力について学ぶ機会を得ました。ヴォイヴォディノヴォ村とトゥルド村の近くで現地試験が実施されました。

* * *

6月18日、世界狩猟博覧会のペンチョ・クバヂンスキー総コミッショナーが、「狩猟、漁業、環境保護」をテーマにした国際図書博覧会の枠組み内で開催され、最優秀レイアウト・印刷パフォーマンス・コンテストの賞を授与した。

イタリアの出版社「アルノルド・モンタドーリ・エディトリ」の豊富なイラスト入りマニュアル「自然の中での写真」が最優秀賞と金メダルを受賞しました。 銀メダルは、ドイツの出版社ポール・パライの「アカシカ」「ノロジカ」「保全」シリーズに授与されました。

このコンテストでは、23か国34の出版社から約700冊の本が出品されました。展示会のブルガリア部門で最も多く展示されているのは、約 80 タイトルの「ゼミズダット」とブルガリア科学アカデミーの出版社です。 「祖国」出版社による動物界に関する人気の児童書が展示されています。

* * *

6月22日、EXPO-81の科学プログラムは、ノボテルプロヴディフで開催される2日間のシンポジウム「野生生物と環境」の「農業 - 森林 - 狩猟」セクションのトピックに関する全体会議から始まっています。「主要な環境保護問題に関する包括的な議論は、世界の狩猟科学の発展への新たな貢献となるだろう」と、高等林業研究所学長タチョ・イリエフ教授はシンポジウム参加者への挨拶で述べた。このシンポジウムには、13か国から狩猟と自然保護の分野の科学者や専門家約250人が参加しました。シンポジウムのプログラムでは100件を超える報告が求められました。

* * *

世界狩猟博覧会のモットー「地球 - 生命の惑星」は、6月22日にバルカン映画館で開幕した狩猟、漁業、環境保護に関する国際映画祭の全体テーマである。科学、科学普及、ドキュメンタリー、教育映画約120本を上映します。20カ国の映画作品を展示します。

「この映画祭で最も重要なのは、映画の真正性と、その制作者の真摯な取り組みです」と、ブリュッセルの国際シネテカ会長で、審査員でもあるポーランド出身のヤン・ヤコビ教授は語る。

ブルガリア、ソ連、ジンバブエ、

1981年6月15日 プロヴディフ：ソ連館内の様子
写真：ディミター・ヴィクトロフ（BTA）

カナダ、アイルランド、フィリピンからの映画が上映され、非競争プログラムでは、観客はベルンハルト・グジェメク教授による3時間の映画「セレンゲティを滅ぼしてはならない」を鑑賞した。

* * *

6月23日には、シンポジウム「狩猟動物と環境」に引き続き、「狩猟動物の保全と繁殖」セクションの会議が開催されます。狩猟産業が野生の動物に与える影響、希少動物種の狩猟と保護、環境汚染の指標としての狩猟動物など、さまざまな狩猟管理問題について報告が行われました。ブルガリアの専門家が、ブルガリアにおけるオオライチョウの人工繁殖の試みの結果、猛禽類の状態と保護、ヒグマの家畜や狩猟動物に対する行動について報告します。

* * *

6月24日、「現代の生態学的条件におけるアカシカの管理」に関する学術会議が大きな関心を集めて開催されました。このイベントは、国際狩猟・野生動物保護評議会のビッグゲーム委員会の参加により開催されます。ほとんどすべてのパビリオンでアカシカのトロフィーが代表的な場所を占めているという事実を考えると、出展者が議論されたレポートに注目するのは当然のことです。

* * *

6月25日に「現代の狩猟における犬」をテーマにしたセミナーを開催し、EXPO-81の科学プログラムは、現代の狩猟慣行に影響を与える具体的な問題にますます近づいています。

ソ連、東ドイツ、チェコスロバキア、キューバ、ルーマニア、ブルガリアの専門家らは、狩猟中に負傷したり発見されなかった獲物による損失を減らすために、狩猟犬の質を向上させる可能性と方法について議論した。

* * *

EXPO-81の科学プログラムは、6月26日の「魚の養殖とスポーツフィッシング」に関する国際セミナーで終了しています。養殖と漁業の理論家による会合では、メッシュケージ、ワイス装置、密度の異なる魚養殖のため資料を入れた桶などを使用して貯水池からの漁獲量を増やす新しい方法に大きな関心が集まりました。ブルガリアにおける集約的な温水盆型魚養殖の発展の見通しが議論されました。

* * *

7月12日、1か月前のEXPO-81開幕時と同じように、狩猟笛の常の音が再びフェアシティに響き渡った。参加64カ国の国旗が徐々に降ろされていきます。わが国では初、組織的狩猟の歴史では3回目となる世界狩猟博覧会が終了に近づいています。

出展者と来場者は、色とりどりの光に照らされた会場の湖に向かいます。ここでは、ミュージシャンやダンサーたちがすでにそれぞれの場所に着いています。彼らは、EXPO-81 のプログラムにある多様な文化、科学、スポーツ イベントの成功に貢献した来場者、出展者、競技者、射手、漁師たちへの感謝の印として組織委員会が主催した盛大な舞踏会の参加者です。

世界狩猟博覧会の公式閉会式は短く、博覧会ディレクターのイヴァン・グルエフ森林・林業第一副大臣がスピーチを行い、その後、ブルガリア狩猟漁業連合中央評議会議長のフリスト・ルスコフ中将が優秀な出展者に大賞を授与します。

EXPO-81 のコミッショナー、ペンチョ・クバヂンスキー氏が受賞者と来賓全員に挨拶を述べた。

夜も続くお祭り気分は、ヴォイヴォディノヴォ村、トゥルド村、そして「40の泉」の競技会場付近で、ホールに展示された美しい狩猟のトロフィーを前に、映画、写真、貨幣収集と切手収集のコレクション、そして展示会のテーマサークル「地球 - 生命の惑星」のモットーにまとめられた本の多くの競技の賞の発表が行われる間、日々の興奮と調子と気分において一致しています。

今月懸命に努力してきた主催者たちは、まだ努力の最終結果を評価できていないが、ひとつはっきりしているのは、世界の動植物の多様性を11,000点以上展示したこの素晴らしい展示会を見たすべての来場者の心に、消えることのない思い出が残るということだ。

「テーマは狭いがアイデアに富んだこの展示会は、我が国が重要な世界的課題の解決に成功裏に参加できることを改めて証明しています。

生態系のバランス、天然資源の保護、希少種や絶滅危惧種の保全、狩猟資源の維持など。

私たちは、展示会の科学プログラムで発表されたテーマに対して、多くの外国人科学者が関心を持って反応してくれたことを嬉しく思います。「展示会の質自体に満足せざるを得ません。これほど多くの希少で貴重な狩猟トロフィーが一堂に集まったのはかつてありませんでした」とクバヂンスキー氏は述べた。さらに彼は、「世界狩猟博覧会の閉幕によって、あらゆる大陸の様々な国の代表者の間で得られた理解は、EXPO-81の高い目標の実現だけでなく、我が国の平和政策の強化にも貢献するだろうと確信しています」と付け加えた。

1985年

つくば市で開催されている輝る専門的世界博覧会

国際博覧会EXPO-85が本日、筑波科学館で正式に開会されました。6ヶ月間、この博覧会は科学者、専門家、そして一般の人々の注目を集めるでしょう」と、BTA特派員のイヴァン・ガイタンジエフ氏が3月16日に報じました。

この大規模な国際イベントのメインテーマは、「住まいと環境 ― 人類に役立つ科学技術」です。

20万平方メートルの敷地にそれぞれ独自の展示やパビリオンが設置され、47か国と37の国際機関のほか、富士通、三菱、東芝、日立など数十社の日本企業が出展します。

つくばEXPO-85の参加者は、日本および世界各地からの来訪者に現代世界における科学技術の役割を紹介し、次の世紀の文明の方向性と展望を示します。

我が国にとって、世界博覧会は人々の進歩と相互理解を促進する重要かつ影響力のある手段であり、独立したパビリオンで参加しています。ブルガリアは、1970年の大阪万国博覧会と 1981 年の神戸万国博覧会という、日本で開催された過去 2 回の万国博覧会に出展し、大きな成功を収めました。

今回の参加テーマは「命と子ども」です。主催者は、このアイデアは関連性があり重要であるだけでなく、特に 1985 年が青年の年と宣言されて以来、非常によく練られたものであると断

1981年6月15日 プロヴディフ：ブルガリア狩猟トロフィー展示館
写真：ディミター・ヴィクトロフ（BTA）

言しています。さらに、最も現代的な表現手段を用いて展示されるこの展覧会では、現代ブルガリアとその歴史的、文化的ランドマークを来場者に紹介します。

EXPO-85への関心は非常に高いです。2,000 万人を超える来場者が見込まれており、大成功となることはほぼ間違いないと思われます。

ブルガリア館の最初のゲストの一人であり、ブルガリア日本経済科学技術協力委員会日本側の会長で、日本のビジネス界の著名な代表である永田隆夫氏は、ブルガリアのEXPO-85への参加は、日本での同国の宣伝に役立つだけでなく、理解を深めることにも貢献するだろうと語った。

* * *

4月4日、特派員は、日本の筑波科学センターで開催された世界博覧会の枠組み内で行われたブルガリア科学の日について報告した。

この重要なブルガリアのイベントに関連して、国家科学技術進歩委員会の副委員長であるマリン・ペトロフ教授の率いるブルガリアの著名な科学者の代表団が来日しています。

筑波のEXPO-85プレスセンターの大ホールで行われた興味深く有益な会合の後、ブルガリア科学代表団長は記者会見で新聞や専門科学出版物の記者に対し、ブルガリア科学の個々の成果、その構造、そして社会主義国や一部の西側諸国とのブルガリアの科学技術協力の課題と目標を紹介した。

科学技術庁や日本科学者会議でも重要な会議が開催されます。会談では、ブルガリアと日本の間の科学技術協力は前向きに発展しているものの、情報交換において科学技術関係を拡大するために、より積極的かつ合理的に利用すべき機会があることが強調された。

* * *

4月4日、特派員は、日本の筑波科学センターで開催された世界博覧会の枠組み内で行われたブルガリア科学の日について報告した。

この重要なブルガリアのイベントに関連して、国家科学技術進歩委員会の副委員長であるマリン・ペトロフ教授の率いるブルガリアの著名な科学者の代表団が来日しています。

筑波のEXPO-85プレスセンターの大ホールで行われた興味深く有益な会合の後、ブルガリア科学代表団長は記者会見で新聞や専門科学出版物の記者に対し、ブルガリア科学の個々の成果、その構造、そして社会主義国や一部の西側諸国とのブルガリアの科学技術協力の課題と目標を紹介した。

科学技術庁や日本科学者会議でも重要な会議が開催されます。会談では、ブルガリアと日本の間の科学技術協力は前向きに発展しているものの、情報交換において科学技術関係を拡大するために、より積極的かつ合

1981年6月15日 プロヴディフ：新築パークホテルから万博会場を望む
写真：ディミター・ヴィクトロフ（BTA）

理的に利用すべき機会があることが強調された。

* * *

5月12日、世界博覧会EXPO-85の枠組み内でのブルガリアのイベントは大盛況のまま継続されています。この日は国際子ども会議「平和の旗」に捧げられています。「平和の旗」運動の崇高な理念は日本国内に多くの支持者を抱えております。「平和の旗」運動の第3回大会が国際青年年と宣言された年に開催されていて、関心は高い。

* * *

筑波万博EXPO-86の開館以来、ブルガリア館は、最も興味深く、多くの来場者を集める場所の一つとして、当然ながら高い評価を得てきました。その大きな理由は、「子どもたちの目を通して見る人生」というテーマが、日本の一般観客に非常に魅力的だったからです。「これまでに70万人以上がブルガリア館を訪れ、感想文には私たちの展覧会に対する好意的で熱狂的なレビューが満載されていることがその証拠です」とBTA特派員は5月15日に書いている。

* * *

5月27日、イヴァン・ガイタンジエフ氏は、ブルガリア人民共和国国家評議会議長トドル・ジフコフ氏の日本訪問2日目について語り、その訪問では「重要かつ非常に有益な会談」が行われたと伝えた。ブルガリアの国家元首は昭和天皇の賓客である。宮殿での会談では、ブルガリアと日本の発展の成功を互いに願う気持ちが表明された。二国間関係における現在の良好な環境は相互理解を深めるのに有益であるという意見が表明された。その後、日本の皇太子明仁親王と妻の美智子も会話に加わった。

トドル・ジフコフ氏は中曽根康弘首相の公邸も訪問した。ここで、日本政府のトップが貴賓を歓迎して公式昼食会を開催しました。

* * *

5月28日は、つくば万博の中心となるイベントとして、ブルガリアの建国記念日を祝う式典が開催だった。午前10時30分、エキスポプラザの中央広場で数千人の観客が見守る中、開幕した。トドル・ジフコフ氏とブルガリア側および日本側の随行員らは公式ボックス席に着いた。ブルガリアと日本の国歌斉唱後、ブルガリアの国旗とこの素晴らしい国際イベントの開催国の国旗がフェスティバル広場の塔に掲揚されました。

展覧会総コミッショナーの井川勝一氏がブルガリア人民共和国国家評議会議長のトドル・ジフコフ氏に挨拶の言葉を述べた。

「EXPO-85の目標は、人類の幸福に真に貢献するために、21世紀の科学技術がどうあるべきかを示すことです。もちろん、21世紀は現代の子供たちの世紀であり、ブルガリア館のテーマはまさにふさわしいものです。展示の魅力をさらに高めるため、ブルガリアはEXPO-85に素晴らしい子供たちの代表団を派遣しました。その中には、子供ラジオ合唱団、子供ダンスグループ、新体操のチャンピオンたちが含まれていました」と彼は語る。トドル・ジフコフ氏も歓迎の挨拶を行い、その後、豊かで多様な音楽と芸術のプログラムが始まりました。この公演には、日本で非常に人気のあるブルガリアテレビ・ラジオの児童合唱団と、芸術監督の人民芸術家フリスト・ネディャルコフ氏、そして児童民族舞踊団「セヴェルニャチェ」が出演します。

ここには、ブルガリアの素晴らしい新体操選手、リリ・イグナトワ、ビアンカ・パノバ、マヤ・タスコバ、そしてアンサンブルコンビネーションの6人の少女たちもいます。観客は私たちの代表者たちのあらゆるパフォーマンスに拍手喝采を送ります。トドル・ジフコフが最初に訪れるのはブルガリア館です。同氏は、つくば博覧会のブルガリア人民共和国のペータル・ルセフ総局長の歓迎を受けました。古い民俗習慣に従い、民族衣装を着た若い女性らがパンと塩を贈呈した。その後、ブルガリアの指導者は「子供時代」というモットーのもとに企画された展示会を視察した。彼は、国際子ども会議「平和の旗」の理念のもとに集まった世界中の子どもたちがソフィアで楽しい集会を開いたことを伝える特別ビデオグラムや、平和と友情をテーマに最新の表現手段で用意されたメインのショーを鑑賞しました。その後、ジフコフ氏とその随行員は　日本政府の主要　展示パビリオンを訪れた。このパビリオンは「我々の土地」と「我々の生活」という 2 つの大きなブロックに分かれています。数々の展示品は、日本の国土や自然、産業、そして人類の生活と調和した科学技術の成果の特徴を伝えています。

* * *

ブルガリア観光デーは7月18日に開催されています。展示会の最も代表的なホールには数百人が集まり、その中には若者も多くいます。バルカンツーリスト社の副総裁アレクサンダー・スパソフ氏は、出席者に対し、ブルガリアの観光分野における大

きな可能性を紹介した。私たちの最も有名な海辺と山のリゾートを紹介するドキュメンタリー2　本が上映されました。青年のダンサーたちは、気まぐれな北地方、トラキア地方、ショピア地方のダンスの感動的な見事なパフォーマンスで、一を喜ばせました。

「ブルガリアを知っていますか？」クイズ大会を開催しました。正解者数が非常に多いため、賞品を分配するために抽選が必要となります。最優秀賞はブルガリアでの1週間の無料休暇です。

* * *

9月16日、つくば万博が閉幕した。「184日間にわたり、この一大国際イベントは科学者、専門家、そして一般大衆の注目を集めました。2030万人という来場者数だけでも、この博覧会への関心の高さを物語っています」と、BTA特派員のイワン・ガイタンジエフ氏は記しています。彼によれば、EXPO-85では見るもの、学ぶものがたくさんあったそうです。「何よりも、平和な生活のために科学的、技術的、経済的問題を解決することに向けられた人間の思考には、計り知れない可能性と力があることを証明した」とこのジャーナリストは記した。

1985年

プロヴディフ市の専門世界博覧会

「若手発明家の世界博覧会『ブルガリア-85』が11月4日から30日までプロヴディフ市で開催されます。これは国際青年年における最大のイベントの一つであり、地球上の若者たちの創造的思考の祭典とも言えるでしょう」と10月28日の報道は伝えている。

この展覧会は、国家評議会議長トドル・ジフコフ氏と世界知的所有権機関事務局長アルパド・ボグシ氏の後援のもとで開催されます。我が国がこの博覧会の開催国として選ばれたのは、ブルガリアが17年以上にわたり青少年の科学的創造性を組織してきた豊富な経験と、これまでに青少年技術科学的創造性運動（TNTM）の12の全国博覧会で発表された発明の高い技術レベルによるものです。

若手発明家業績世界博覧会「ブルガリア-85」には、人類の活動のさまざまな分野から3,300点の発明品を携えた約70か国の代表者が参加します。ブルガリアの展示会は最も印象的です。850　点を超える発明が選ばれています。ブルガリアの若者のこの報告書は、「TNTM 第 13 回全国博覧会」と呼ばれ、2　年間の創造活動とブルガリアの若い革新者の大胆さをまとめたものです。

* * *

11月4日、若手発明家業績世界博覧会「ブルガリア-85」が開幕しました。

「創造性と創造力への高い志に突き動かされ、世界の若い科学技術思想の最高の代表者がプロヴディフ市にやって来た」とBTA特別特派員のペータル・コチャノフとゲオルギー・ナイデノフが報じている。

開会式には国内の政治家や海外からの来賓など関係者が出席している。式典はブルガリア国歌で幕を開けています。少女たちは参加国の国旗を展示会に持参しています。

展示会組織委員会の委員長で、閣僚評議会第一副議長のチュドミル・アレクサンドロフ氏はスピーチの中で、何千人もの若いイノベーターが展示会への参加の招待に応じたことに満足の意を表した。

世界知的所有権機関の事務局長アルパド・ボグシ氏も演説した。彼によれば、発明は経済発展の基盤である。それらは生産をより効率的にし、私たちの生活をより安全で快適なものにします。つまり、発明は大きな社会的価値を持っているのです。それらは社会進歩の条件の一つです。トドル・ジフコフも挨拶をしていた。「ブルガリア人民共和国は、国際的な経済、科学、技術、文化協力の発展を目指すあらゆる取り組みを積極的に支持する」と彼は述べた。

* * *

「今夜、青年の街で、世界若手発明家業績博覧会『ブルガリア-85』の旗が降ろされました。」「地球上の科学技術の進歩における若き創造者たちの祝賀行事が終わりを迎えようとしている。彼らは約1か月間、人類の平和な現在と明るい未来のために自らの才能と仕事を捧げる意志をここで示してきた」とプロヴディフのBTA特派員は11月30日に書いた。展覧会の終了を記念する祝賀会では、展覧会組織委員会の副委員長であるヴァシル・ネデフ氏がスピーチを行った。同氏によれば、展覧会の「戦争と破壊の炎ではなく、創造の炎と科学技術の新たな高みを目指す闘いの中で奮闘しよう」という呼びかけは、平和に暮らし、善を創造するためにあらゆる努力をしたいという若い芸術家の揺るぎない願いを一つにするだろう。

1990年

大阪で開催される園芸万博

「環境保護をテーマにした初の国際花と木の博覧会が本日、大阪市で開幕しました。会期中の6ヶ月間で、フラワーEXPO-90には2,000万人以上の来場者が見込まれています」と、BTA特派員のゲオルギ・アポストロフ氏が3月31日に報じました。

この展示会にはブルガリアを含む54の国際機関と80か国が参加しています。展示会には　ヒマラヤ、東アフリカ、南アメリカからの極めて珍しい種を含む250 万種類の花が展示されています。

これは、過去 20 年間で日本で開催される　4　回目の国際博覧会であり、大阪では EXPO-70 に続いて 2 回目となります。

* * *

4月23日、世界フラワーショーのブルガリア展示品は、一連のコンテストの最初の部門で最も名誉ある賞をアイルランドと共同受賞した。

庭園デザインコンペティションの第1ラウンドでは、建築家ラシュコ・ロベフ氏のリーダーシップのもとに開発された作家チームが金メダルを獲得しました。

コンテスト第2ラウンドでは、今回は参加80カ国と54の国際機関によって推薦された金メダリストの中で、ブルガリアとアイルランドの庭園が最高の栄誉を獲得しました。

大きな人気を博したEXPO-90は、最初の20日間だけで200万人を超える来場者を集めました。

* * *

3月21日、日本の皇太子徳仁親王は世界フラワーショーを訪問し、ブルガリア館を含む参加80カ国の展示物を視察された。徳仁親王は、14の賞を受賞したブルガリアの展覧会全体を視察されている。ブルガリア館の発表は、ブルガリアの参加費用を全額負担した日本のスポンサー企業の社長らと、EXPO-90のチーフコミッショナーである西田誠也氏らが出席する中、大使館代理のスタニスラフ・バエフ館長によって行われた。皇太子は、建築における国民的要素と、展覧会でアイルランドの庭園と一等賞を分け合った庭園のレイアウトに特に興味を示した。ブルガリアの展示には、伝統的な木造パビリオンと伝統的な中庭の噴水が含まれます。

* * *

9月6日、大阪90年万博のブルガリア公式代表、ペータル・ベロン博士が東京で国会議員や政治家らと会談する予定。会談の主な議題は、ブルガリアで進む民主化の文脈における二国間協力の拡大の見通しであった。ブルガリアの来賓を記念して、衆議院ブルガリア友好議員連盟会長の小此木彦三郎氏が公式昼食会を主催していいる。

1991 年

ブルガリアのプロヴディフ市で開催された専門世界博覧会

„「1991年6月7日から7月7日まで、第2回世界若手発明家功績博覧会EXPO-91がプロヴディフで開催される。これは前に国際博覧会事務局（IB）第104回総会で正式に承認された。同博覧会は、国家評議会議長トドル・ジフコフ氏とアルパド・ボグシ博士、　世界知的所有権理機関の事務局長の名誉後援を受けて開催されている予定だった」と、１９８９年1月27日の報道で報じられた。その後、EXPO-91組織委員会の第1回会議が首都で開催された。ブルガリアおよび外国のジャーナリストは、組織委員会の委員長である経済企画大臣ストヤン・オフチャロフ氏から若手クリエイターの世界展の準備について説明を受けた。

* * *

「ブルガリア万博1985から6年後、再びブルガリアは若手発明家万博を開催します。前回の万博は、政権の組織力と自信を世界に示すという使命を帯び、実際的な目標よりもイデオロギー的な目標を掲げていましたが、今やブルガリアの経済状況と政治的多元主義が、この万博に新たな局面をもたらしています」。6月8日に開幕する万博1991のニュースは、この言葉で始まります。

「私たちは今日、若い発明家たちの功績を称えるためにここにいます。彼らの激励と支援は、将来への大きな財産であり、投

資でもあります」と世界知的所有権機関のシャヒド・アリハン副事務局長は開会の辞で述べた。

ブルガリアのジェリュ・ジェレフ大統領が博覧会の開会を宣言した。彼は、数百人の公式ゲストを喜ばせたフォークロアコンサートプログラムに出席し、展示会を鑑賞しました。博覧会の屋内面積は32,000平方メートル、屋外面積は4,000平方メートルで、3,000を超える展示物が展示されています。これまでに25カ国の代表者が会場に到着しているが、7月7日の展示会閉幕までに合計32カ国からの企業や個人の参加者がここを通過することになる。公式出席国はベルギー、中国、韓国、チェコスロバキア、スイス、ユーゴスラビア、日本、ソ連、ブルガリアである。国際審査員が最も興味深い展示品に賞を授与します。主催者は約300枚のメダルを用意しており、ジェレフ大統領に賞が授与されるほか、世界知的所有権機関の事務局長アルパド・ボグシ博士にも賞が授与される。

* * *

6月21日、発明協会東京支部長の大野家達氏率いる日本代表団が見本市会場に到着した。 NTTデータ、新日本製鐵、三菱、日立、小松製作所、サッポロビールなど14社の企業と特許事務所の代表者が、EXPO-91で発表された若者の発明や革新を審査しています。ゲストはブルガリアのビジネスマンや特許専門家とも会いています。

* * *

7月6日、EXPO-91賞の授賞式が厳粛に行われました。全部3,493人の応募者から、国際審査員団は若手発明家・革新者博覧会で金メダルを受賞した189人を選出していた。

自然換気を制御し、動物飼料を加工、投与、分配するための一連の技術設備を備えた畜産農場を開発したコンデュ・アンドノフ氏率いる専門家チームが「ブルガリア最優秀発明家」に選ばれた。韓国のウォンヨン・チェ氏は、産業用ロボットの安全システムの開発により最優秀外国人発明家賞を受賞した。

EXPO'92

1992年
スペインのセビリア万国博覧会

「地球最古の金製品は、古代文明の発祥地であるシュメールやエジプトでは発見されませんでした。ペルーやコロンビアの金で知られるコロンブス以前のアメリカでも発見されませんでした…6000年以上前の最古の金の宝は、ヴァルナ近郊で発見されました。この最初の農耕・牧畜文明の輝きは、EXPO-92のブルガリア館を訪れる何千人もの来場者の目を惹きつけるでしょう」と、ヨシフ・ダビドフは4月9日、セビリアからBTAに寄稿しました。

パビリオンの最初のゲストはジャーナリストたちです。今週、セビリア万博のリーダーたちは、メディア向けに EXPO-92 のプレゼンテーションを数日間にわたって企画しています。 4月20日に正式にオープンし、10月12日まで開催されるこの展示会には、世界中から900人を超えるジャーナリストが訪れる。

ブルガリア館では、館長のコスタディン・ヴラドフ氏がジャーナリストたちを歓迎した。彼はヴァルナとヴァルチトランの宝物から出土した古代の金製品の実物を披露した。来場者は、キュリロスとメトディオスの作品、完璧なイコン、巨匠ウラジミール・ディミトロフの素晴らしいキャンバスなど、展示会の他のセクションにも興味を持って鑑賞します。

* * *

「セビリアで開催される世界博覧会 EXPO-92 のブルガリア館は完全に準備が整っています」と4月10日のニュース報道は伝えています。

ブルガリア館の総責任者であるウラジミール・ランブレフ氏によれば、私たちのプレゼンテーションは控えめではあるものの価値のあるものになるだろうとのことです。ブルガリアは多くの文化の歴史的中心地であり、遠い過去の記憶を守りながら未来に向かって進む国です。これが私たちの展覧会のテーマです。パビリオンのゲストは、2階のレストランでブルガリアの郷土料理を試すこともできます。

* * *

「セビリアのように万国博覧会の開催にこれほどふさわしい都市は世界にほとんどありません。ローマ人のセビリア、アラブ人、ユダヤ人、キリスト教徒、インディアンのセビリア。このセビリアが築き上げた文化遺産を、私たちスペイン人は今、世界中から訪れるお客様にお見せしています。万国博覧会は、来場者に、人間が創造した文化の多様性と豊かさ、人間の個性の再生能力、そして寛容、多様性の尊重、国際的な連帯といった理念を伝えたいと考えています。」 4月20日、スペインの国家元首フアン・カルロス国王は、この言葉をもって、アンダルシア州の州都セビリアで世界博覧会を正式に開会した。

王室全員、スペイン政府、スペインの17自治州の指導者、そして何千人ものゲストが出席する中、セビリアが世界の象徴的な首都となる176日間の最初の日が始まります。

ここで、フェリペ・ゴンサレス首相は「…私たちは過去 5 世紀にわたる人類の創造的精神と、次の千年紀という新たな発見の時代の到来を祝います」と述べています。

* * *

レフ・ワレンサはアンダルシア州の州都で開催された世界博覧会を訪問した最初の外国の国家元首であった。スペインで人気のポーランドの政治家は、5月3日のポーランド記念日の祝賀行事に参加した。この日は、展示会場やセビリア市内で多くの文化イベントが開催された。

BTA代表の質問に答えて、ワレンサ大統領はEXPO-92の「ポーランドのメッセージ」として「ヨーロッパと世界中の人々の世界的な連帯」を明らかにした。

レフ・ワレサはスペイン、ロシア、ドイツ、アメリカ、ブルガリアの国立パビリオンを訪問。

* * *

万国博覧会にはさまざまな定義があるが、英国のチャールズ皇太子は、ジャーナリストたちの心を即座に捉えた新たな定義を加えた。「万博は変化を反映している」皇太子と妻ダイアナ妃は、5月21日に厳粛に祝われる英国デーの主賓となっている。

ヘンリー・キッシンジャー元米国務長官もオランダ館で選ばれた政治学者や実業家らを前に「変化」について語った。「ヨーロッパを見つめて」セミナーの一環として、ノーベル平和賞受賞者が旧ソ連と東欧諸国の変化について興味深い見解を述べています。

5月22日、EXPO-92のゲストとしてノルウェー王室のメンバーがノルウェーデーに参加しました。ドイツのリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領もセビリアに到着。

* * *

5月24日、ブルガリア共和国のジェリュ・ジェレフ大統領は、セビリア万博において、適切な軍の栄誉と国歌を背景にした国旗掲揚をもってブルガリアの日を開会した。

EXPO-92の文化生活の中心である超近代的なパレンケホールで、ブルガリア大統領は、博覧会の何百人もの来場者の前で、「ここセビリアでのこの会合で、ブルガリアは千年の歴史を持つ国の威厳と新しい未来への意志を持って立ち上がっている」と指摘した。

ジェリュ・ジェレフと仲間たちは万国博覧会の一部を見学している。ブルガリア館で彼らはパンと塩で歓迎され、展示会について紹介されましていた。

大統領はまた、スペイン、ポーランド、欧州共同体、ドイツのパビリオンも訪問した。夜には、セビリア市長アレハンドロ・ロハス・マルコス氏が市庁舎でブルガリア国家元首を歓迎するレセプションを主催する予定。

また、ABC 新聞はブルガリアデーに 3 ページを割き、ブルガリアが 1893 年のシカゴ博覧会に参加したことを強調しています。

* * *

「万博のブルガリア館は、来場者数が100万人を超えた後も、展示だけでなくさまざまな取り組みで注目を集め続けている」と9月17日の報道は伝えている。

「古代の金の魔法」をモットーに2日間の科学会議が開催されました。現在セビリアに滞在しているスペイン、ロシア、トルコ、エクアドル、チリからの専門家や博物館職員25名が参加し、報告や発表を行っている。

科学会議自体も発見物の一つである。ラテンアメリカ諸国のほとんどを統合したパビリオンに展示されたインカの黄金、セビリアの宮殿の一つに収蔵されている「エル・カランボロ」の財宝、ブルガリア博覧会の中心を占めるヴァルナとヴァルチトランの財宝などである。

EXPO'93

1993年
韓国・大田[テジョン]市で開催される専門世界博覧会

AP通信によると、国旗がはためき、マーチングバンドが演奏し、ダンスが繰り広げられる中、次期国際博覧会EXPO-93が本日、韓国の大田市で開幕した。BTA通信は8月6日、AP通信の報道を引用した。130以上の国と国際機関が参加し、来場者向けに充実した文化イベントやアトラクションが企画されている。41ヘクタールの敷地に常設パビリオンの大半は、ヒュンダイ、サムスン、大宇といった韓国の複合企業がスポンサーとなっている。展覧会は3か月間開催され、約1,000万人の来場者が見込まれている。

昨年セビリアで開催された世

界博覧会をきっかけに起きた観光ブームとは異なり、ソウルの南約140キロに位置する大田市を訪れる外国人は減少しそうだ。しかし、多くの韓国人にとって、世界の科学技術の成果に触れることは人生最大の出来事です。約 20 のパビリオンでは、高度な技術、宇宙技術、環境保護の成果を紹介しています。すべてのパビリオンを見て回るには 20 ～ 30 時間かかるため、訪問者は忍耐力を備えておく必要があります。

展示会の主催者は、記録的な数の参加者を集めたことを誇りに思っている。彼らは、EXPO-93が韓国の科学技術の成果に世界の注目を集め、経済を活性化させる可能性があると期待している。

金容三大（キム・ヨンサム）統領は開会式の演説で次のように述べた。「世界は新たな発展の道を模索するために大田万博に集まっています。すべての人々の幸福に必要な科学技術について語るとき、『我々』と『彼ら』という区別があってはなりません。」

* * *

11月7日、韓国の大田市で開催された世界博覧会「EXPO-93」は、約50万人の外国人を含む1,400万人が来場し、254億ウォン（3,140万ドル）の黒字で閉幕した。93日間にわたる展示会には108カ国と33の国際機関が参加した。

「韓国は1988年のソウルオリンピックに続き、大田で開催されたEXPO-93で再び世界を驚かせた。そして今、韓国人は誇りに思うに足る十分な理由を持っている」と国際博覧会事務局長テッド・アラン氏は述べた。「EXPO-93によって、我々は必要な飛躍を遂げ、先進国となるための大きな自信と可能性を示した」と、韓国の黄寅性［ファン・インソン］首相は博覧会閉幕時の声明で述べた。

1998年
ポルトガルのリスボンで開催された専門世界博覧会

5月22日、リスボン万博が、ポルトガルの首都東部、テージョ川沿いの98ヘクタールの敷地に集まる向けて厳粛に開会した。

展覧会場の4つの扉のうちの1つ「ポルタ・デュ・ソル」を最初に訪れたのは、54歳のスイス人男性だ。彼は　さっそく、EXPO-98の目玉である巨大水族館「オーシャナリウム」へ向かいます。

主催者は、展示会場に毎日10万人から15万人が訪れると予想している。 9月30日の閉幕までに、EXPO-98は1500万人が観覧することになる。

EXPO-98の初日は、ポルトガルのマスコミによって誇りと高揚感をもって祝われた。

スペイン国王フアン・カルロスは自国のパビリオンを視察し、リスボン万国博覧会は「真の奇跡」だったと宣言した。

* * *

5月24日、昭和天皇と皇后美智子さまは2週間の欧州歴訪の始まりとして、3日間のポルトガル公式訪問のため到着された。両陛下はリスボンで開催される世界貿易博覧会にもご来場される予定です。

* * *

「ペタル・ストヤノフ大統領は本日、リスボンで開催されたEXPO-98においてブルガリアの建国記念日を開幕した。現地時間午前11時ちょうど、EXPO式典広場において、ブルガリア大統領、ポルトガルのアントニオ・コスタ国会担当大臣、そして博覧会コミッショナーのトレス・カンポシ氏らが出席する中、ブルガリア国歌が鳴り響く中、国旗が掲揚された」と、BTA特派員のエフゲニア・ドルメヴァ氏が9月6日に報じた。

今世紀最後の博覧会となるリスボン万博は、大西洋とインド洋を越えてヨーロッパとアジアを結んだヴァスコ・ダ・ガマの航海500周年を記念したもので、「海洋 ― 未来への遺産」がメインテーマとなっている。

「今日グローバリゼーションについて語るなら、その根源はテージョ川（リスボン）の岸辺から始まった旅に見出すことができる。この5世紀の間に、人類は驚異的な進歩を遂げたが、5世紀が経った後も、世界で最初の通信路を築いた人々の先駆的な仕事は忘れ去られることはないだろう」と、ストヤノフ大統領はポルトガル宮殿での歓迎式典での演説で述べた。 ブルガリア大統領によれば、世界のさまざまな地域の人々を結びつけるつながりとしての海洋というテーマは、ポルトガルにとって最も適切であり、経済のグローバル化と大規模なインフラプロジェクトの実施に関連する新世紀の始まりに特に関連しているという。

その後、ペータル・ストヤノフ氏と同行の代表団は博覧会のブルガリア館を訪問した。宮殿の前で披露される「トラキア」アンサンブルのダンスは、すぐに訪問者の注目を集めます。

ブルガリア館のメインテーマは「過去から未来へ」です。合計136点、968点の展示品が展示されています。その中には、ヴァルナ博物館所蔵の世界最古の加工された金の複製、ヴァルナ造船所で製作された船の模型、ブルガリア科学アカデミーで設計された海洋調査船の模型などがある。ブルガリアと黒海のつながりも追跡されました。

2000年
ドイツ、ハノーバー市の万国博覧会

「ハノーバーに一目惚れする人はまずいないと言われています。北ドイツ、ニーダーザクセン州の州都であるハノーバーは、有名な見本市会場ではありますが、ニューヨークのような世界的な大都市でも、パリのような芸術の聖地でも、インドのバンガロールのような情報技術の中心地でもありません。しかし、このハノーバーが、2000年という節目の年に開催される万国博覧会「EXPO-2000」のために6月1日に開会します。万国博覧会の150年の歴史において、ドイツは初めてこのような国際イベントを開催するという栄誉に浴するのです」と、BTAのイスクラ・ボリソワ氏は5月20日に書いています。

人々は協力してこそ未来を築くことができる、それがこの展覧会の公式メッセージです。すべての大陸の約 200 か国の文化や伝統に直接触れ、人間生活のあらゆる分野からアイデアを得る機会が、千年紀最後の展覧会に独自性を与えています。 マルチメディアとインターネットの時代においても、異なる人種の人々との直接の接触や会合は、ユニークな体験であり続けます。これはドイツのゲアハルト・シュレーダー首相の言葉です。これがEXPO-2000　の真のメッセージであるように思われます。

この展覧会は、「人間・自然・テクノロジー」というモットーのもと企画されており、未来の課題に人間がどのように対処できるかという問いに対する独創的な視点、アイデア、答えを 153 日間にわたって研究する実験室となることを目指しています。

これは決して単なる技術的な驚異の集大成ではなく、テクノロジーの助けを借りて人間と自然の間の新たなバランスを見つけようとする試みです。

* * *

5月31日の夜、ゲアハルト・シュレーダー首相はハノーバーで、各界の著名人3,000人が出席した祝賀晩餐会で、EXPO-2000万国博覧会を開会した。

シュレーダー氏は演説で「国際社会がドイツに２０００年万博の開催を託したことは、我々にとって大きなチャンスだ」と述べた。「地球規模の視点で考え、計画し、行動することが、私たちにとって当然のことになるべきです。誰も、未来の問題の解決策を独力で見つけることはできません。EXPO-2000は、世界中の人々が経験、アイデア、そして意見を交換する素晴らしいフォーラムです。」

* * *

6月1日、ドイツのヨハネス・ラウ大統領は、ドイツ初の万国博覧会「EXPO-2000」を一般公開した。「ここに来る人は、親切で寛容で、世界に対して開かれたドイツに出会うはずだ」と彼は言う。彼の言葉によれば、外国の文化や生活様式を知ることは人を豊かにすることができる。

ハノーバーの170ヘクタールの展示エリアには、170を超える国と国際機関が参加します。

* * *

万国博覧会の開幕日だけで15万人が万国博覧会を訪れました。ヨーロッパ諸国の宮殿で開催されるブルガリアの博覧会は、この博覧会の精神に完全に沿っています。タイトルは「人間の健康とレクリエーションのための自然の贈り物」です。主催者はブルガリアの自然、建築、文化の豊かさを組み合わせることに重点を置いています。ブルガリアの参加のハイライトは、何世紀にもわたる歴史の象徴として特別に作られたトラキア人の墓の模型です。

現代のブルガリアは、バイオテクノロジー、マルチメディア、レーザー技術の製品で知られています。ブルガリア科学アカデミーの宇宙食品研究所が、初めて非専門分野の展示会で自社製品を展示する。ブルガリア館の訪問者は、宇宙飛行士の食事がどのようなものかを見ることができる。ブルガリア館では1時間ごとに民族音楽が流れます。

* * *

7月2日、ハノーバー万博に参加する100カ国の代表が、国連事務総長コフィー・アナン氏をEXPO-2000に迎えました。万博で祝われた国連デーには、壮麗な国連通り沿いで、仏教僧、アラブ系ベドウィン、そして「青いヘルメット」の人々が事務総長夫妻に拍手を送りました。

2000年万博のテーマ「人間、自

然、技術」は、現在の状況に極めて適切であるとコフィー・アナン氏は言う。なぜなら、彼の言葉によれば、人々が直面している問題の複雑な性質上、人々が力を合わせる必要があるからだ。2000年万博が、世界をより良い場所にするためにあらゆる努力をしようという私たちの意欲を高めてくれることを、コフィー・アナン氏は願っています。

* * *

10月7日はブルガリアの建国記念日です。式典は、博覧会の中央広場にブルガリア国旗を掲揚することから始まっています。ペタル・ジョテフ副首相は挨拶の中で、ブルガリアの建国記念日は、ブルガリアが古代の歴史と文化、そして美しい自然を持ち、現代社会を勇敢に歩んでいる国であることを世界に見せる機会であると強調した。「ブルガリアは世界史の中で地位を確立しており、将来的には未来の世界の共通ホームにその地位を確立するだろう」とジョテフ氏は言う。

EXPO-2000 のブルガリアの雰囲気は、民俗アンサンブル「スレデツ」、ビセロヴィ姉妹、合唱団「子供の花」によって演出されます。ボニョ・ルンゴフ監督のアルベナ劇場のアーティストたちが、ミニチュア人形劇で観客を熱狂させている。

* * *

10月31日、数千人の来賓が見守る中、ドイツ議会のヴォルフガング・ティールゼー議長がドイツ初の万国博覧会の閉幕を公式に宣言したとDPA通信が報じ、BTAが引用した。式典中、2005年に次回の万博を開催する愛知県知事に万博旗が手渡された。

2002年
オランダのハールレムで開催された世界園芸博覧会

5月24日、メフメト・ディクメ農林大臣とニハド・カビル副大臣は、第5回国際博覧会「フロリアダ2002」に出席するため、オランダのハールレム市に到着した。展覧会は4月に開幕し、10月に終了する予定。現在までにこの世界園芸博覧会を100万人以上が訪れています。大きな関心を集めているブルガリアのブースのモットーは「ブルガリア - 古代の文化と純粋な自然の国」です。

ブルガリアの建国記念日と宣言されたブルガリア文化とスラブ文学の祝日を記念した式典で、大臣は世界博覧会に参加するブルガリア企業20社を歓迎し、農業が我が国の経済発展における優先分野であることを強調した。

式典には万国博覧会の会長デュイスブルク氏も出席し、その後、組織委員会のメンバーとともに、総面積500平方メートルに展示されたワイン、ブランデー、チーズ、果物、バラ、ゼラニウムなどのブルガリア産品の豊富さを視察しました。

2005年
愛知万博

本日名古屋で開幕した国際博覧会 EXPO-2005 には 120 か国以上が参加しているす、BTA が引用した ITAR-TASS が 3 月 24 日に報じた。

開会式には天皇、皇后両陛下、小泉純一郎首相が出席している。

185日間開催されるこの展示会は、東京、大阪に次ぐ日本で3番目に大きな工業中心地である名古屋地域の173ヘクタールの面積を占めています。

EXPO-2005 の目的は、最先端のテクノロジーと環境に対する配慮が共存できることを示すことです。展示の主役は、掃除をしたり、子どもと遊んだり、来場者に情報を提供したりしてくれる数多くのロボットです。展示会場では、水素と酸素で走る環境に優しいバスや、「スマート」な自動運転車が走行している。

2005年3月25日 愛知県：経済大臣ミルコ・コヴァチェフと駐日ブルガリア大使ブラゴヴェスト・センドフによるブルガリア館開館式（愛知万博）
写真：ミルコ・フリストフ（BTA）

* * *

3月27日、フランスのジャック・シラク大統領が愛知県で開催された世界博覧会を訪問した。彼はまず日本のパビリオンに立ち寄り、それからフランスのパビリオンまで歩いています。

1851年以来の世界博覧会の歴史で初めて、フランスとドイツは共通のパビリオン、真の「共通の家」を持つことになったと、BTAが引用したAFP通信が伝えている。シラク大統領にはベルナデット夫人とティエリー・ブルトン財務大臣が同行している。

* * *

5月13日には、ブルガリア共和国のアンゲル・マリン副大統領の出席のもと、世界博覧会におけるブルガリア建国記念日の公式開会式が開催されます。

日本政府を代表して、谷川外務審議官が挨拶を述べる。

祝賀会の主催者と来賓に対する演説で、ブルガリア共和国のアンゲル・マリン副大統領は、日本政府と万国博覧会の主催者らのおもてなしに感謝の意を表し、人間と自然の寛容な共存を目的としたこの世界的なイベントの開催を高く評価した。

ブルガリアの建国記念日は、フィリップ・クテフ国立民謡舞踊団、テオドシイ・スパソフ・トリオ、芸術監督ネシュカ・ロベヴァ率いる国立芸術団、歌手ニーナ・ニコリナ、バグパイプ奏者のクラシミラ・チュルトヴァらが出演するガラコンサートで祝われました。

* * *

ブルガリアのブースは、愛知万博2005で最も多くの来場者を集めたブースの一つです。ブルガリア産のローズオイル、ヨーグルト、ワイン、ミネラルウォーター、蜂蜜、ハーブなど、ブルガリアは多くの来場者を博覧会に惹きつけています。万博へのブルガリアの参加テーマは、「ブルガリア：健康、豊かな生活、そして寛容な共存のための自然の知恵と恵み」です」と、ブルガリア貿易協会（BTA）特使ミルコ・フリストフ氏は6月5日に報告しました。

私たちの国立パビリオンは324平方メートルの面積にあります。イタリア、スペイン、ドイツ、フランス、トルコ、ギリシャのパビリオンの隣にある展示会の中心部にあります。

「3月24日の展示会開幕後、最初の数日間は毎日約2,000人が来場しました」とブルガリアブースの副ディレクター、ヴィクトル・ナルバントフ氏はBTAに語った。「しかし、今日は1万人を超える来場者がいました。」ヴィクトル・ナルバントフ氏はプロヴディフ国際博覧会の副理事長であり、ブルガリアの EXPO-2005 参加を主催しています。

朝早く、ブルガリアのブースの前にはバラジャム入りのブルガリアヨーグルトを試食しようとする人たちの列ができています。ミルクには飾りとして新鮮なブルガリア産のバラも加えられています。ブースにお越しのお客様は、日本で最も人気のあるブルガリア製品であるヨーグルトに加えて、バラの香りのブルガリアアイスクリームも無料でお試しいただけます。

朝から晩まで、当館の郷土パビリオンではブルガリアの音楽が流れ、アンサンブル「ブルガレ」のダンサーたちがお客様をお迎えています。来場者全員にブルガリアに関するパンフレット、展示品、ちょっとしたプレゼントが贈られています。

* * *

日本の皇太子徳仁親王殿下は、6月6日にEXPO-2005のブルガリアブースを訪問されました。

「本日、ブルガリア館にて皇太子をお迎えすることができ、大変光栄に存じます。皆様のお越しはブルガリアにとって大変光栄であり、日本との伝統的に良好な関係と協力関係を維持・発展させるための努力に新たな弾みを与えるものとなるでしょう」と、万国博覧会におけるブルガリア参加のコミッショナーも務めるミルコ・コヴァチェフ経済大臣は皇太子への挨拶の中で述べた。

「30年前、前回の博覧会で天皇陛下が初めてブルガリアヨーグルトを味わっていただきました。今ではブルガリアヨーグルトは日本人なら誰もが知る、貴重な商品となっています」と大臣は指摘した。

* * *

愛知万博の最終日は9月25日です。万国博覧会は6か月間開催され、予想より700万人近く多い2,200万人が来場した。

小泉純一郎首相は展覧会の閉幕式で「地球資源を守る考えが世界中に広がり、人と自然が調和して生きる社会を築いていくことを願っています」と述べた。

2008 年

スペイン、サラゴサの専門世界博覧会

6月13日には、スペインのサラゴサ市で「水と持続可能な開発」と題した展覧会の公式オープニングが開催されています。ブルガリアも参加しています。ブルガリアのプレゼンテーションの主なテーマは「生命のための水」です。キリスト教の儀式の要素としての水の使用についてのプレゼンテーションが予定されています。水とスポーツ、水とレジャーは、パビリオン内のブルガリアの展示のその他のテーマです。訪問者はパビリオン内のレストランで伝統的なブルガリア料理を試食したり、お土産を買ったりすることができます。

この国際展示会の目的は、参加者が社会の持続可能な発展に適合したこの資源を管理するための新しい技術に関する情報を交換することです。

9月14日まで開催されるこの博覧会には、650万人の来場者がサラゴサを訪れると予想されている。

EXPO-2008 は 25 ヘクタールの敷地に開催され、参加国の 102 のパビリオンが展示されます。

* * *

「水の使用は国民の最優先の権利であり、すべての国と政府の共通の責任であるという考えを、ブルガリアは全面的に支持する」と、アンゲル・マリン副大統領は6月21日、サラゴサで開催された世界博覧会のブルガリア建国記念日に来賓らに語った。

彼は、ブルガリアのブースを訪れる投資家が水資源の保護と利用に関する多くのアイデアを見つけることを期待していると述べた。

ブルガリアのスタンドは383平方メートルの面積をカバーしています。 EXPO-Zaragoza の来場者はブルガリア館でパナギュリシテの黄金の宝を見ることができます。建国記念日のプログラムには、ブルガリアの民俗芸能のダンスと音楽パフォーマンス、伝統的な歌と踊りに現代的な響きを与える現代的アレンジを含む「ブルガリア民俗芸能の魔法」という2つのコンサートと、「ブルガリア民俗芸能の源泉から現代の響きまで」という音楽とダンスのパフォーマンスが含まれます。

2010 年

中国の上海万博

「誇り高き上海は今日、花火、動く噴水、レーザー光線を特徴とする豪華な式典で2010年世界博覧会の開会を厳粛に祝った。その式典は、2008年北京夏季オリンピックの印象的な開会式に匹敵する」とAP通信は4月30日に報じ、BTAはこれを引用した。

胡錦涛国家主席は、式典観覧に招待された著名人らを招いた祝賀晩餐会での乾杯の挨拶で、世界中の人々が成功し、壮大で忘れられない展示会を目撃するだろうと自信を表明した。

屋内プログラムには合計 2,300 人の参加者がおり、その中にはさまざまな国や文化界のスターもいます。主賓の中にはフランスのニコラ・サルコジ大統領と妻のカーラ・ブルーニ氏もいる。

この展覧会は5月1日に一般公開され、6か月以内にブルガリアを含む約200か国のパビリオンを7,000万人が訪れると予想されている。地球上で最も重要なテクノロジーイベントのモットーは、「より良い都市、より良い生活」です。

* * *

上海万博における我が国の建国記念日は、6月14日に中華人民共和国とブルガリアの国旗掲揚式で始まります。

このイベントには、ブルガリア参加の国家総局長でもある経済・エネルギー・観光大臣のトライチョ・トレイコフ氏と上海市の副市長の趙文氏が出席した。

世界最大のこの見本市は、メディアから「経済オリンピック」と呼ばれ、産業、科学、技術、文化の分野で192か国と50の国際組織の成果が結集します。今年のEXPOはこれまでで最大の展示会となります。その面積はモナコの2倍、スペインのサラゴサ市で行われた前回の展覧会の20倍の広さです。黄浦江両岸に沿った5.3平方キロメートルが展示スペースに割り当てられています。閉鎖後は公園と森林地帯として上海初の「緑の肺」となる。

この博覧会は初めて環境に配慮したテーマに焦点を当てており、同博覧会は初の環境に優しい「グリーンEXPO」として宣伝されている。施設の一部として中国最大の太陽光発電所が建設され、輸送にはゼロエミッション車が提供される。「エネルギー、資源、水の節約、環境汚染の削減、『スマート』ハウス、風力・太陽光パネル、電気自動車といったテーマは、ブルガリアの経済とエネルギーの優先事項の重要な部分である」とトレイコフ大臣は述べた。趙文副市長との会談で主に強調されたのは観光と、二国間関係の拡大におけるこの産業の役割だった。

面積324平方メートルのブルガリアのスタンドは、共通ヨーロッパパビリオンのゾーン「C」にあります。私たちのプレゼンテーションのテーマは「共通の遺産を持つ都市」です。「リュウトヴァ・カシタ」のブルガリア・ルネッサンス建築の通り、出窓、ベランダは、12 の文化層の変容した遺産と現代都市 (および現代のライフスタイル) のフィルムイメージと絡み合っています。展示の環境への配慮はファサード下部の緑によって示され、私たちの国民的アイデンティティはファサード上部の三色旗によって示されています。

* * *

中国は10月31日、国家の誇りを盛大に示して記録破りの上海万博を閉幕し、この大規模イベントの主催者は持続可能で均衡のとれた成長に向けて努力し続けることを誓った。

来場者数は、1970年に日本・大阪で開催された万国博覧会が記録した6421万人というこれまでの記録を上回った。5.2平方キロメートルの展示エリアには1日平均37万人の来場者が訪れ、10月16日には1日当たりの来場者数103万人という記録を樹立した。

次回の世界博覧会は「グリーン成長、ブルーエコノミー」をテーマに韓国で開催され、2015年にはイタリアのミラノで開催される。

2012年

オランダ、フェンロで開催された世界園芸博覧会

4月4日、オランダのベアトリクス女王は、10年に一度開催される農業、園芸、花卉栽培の世界博覧会「フロリアード」をフェンロー市（リンブルフ州）で開会した。ブルガリアも参加しています。

展示面積は66ヘクタールで、サッカー場130面分に相当します。この展覧会のために、180万本の球根花、5,000本のバラ、18,000本の低木、19万本の多年草、3,000本の樹木がここに植えられました。こうしたさまざまな色彩と香りが、緑の牧草地、池、ガゼボ、彫刻、噴水、そして気まぐれなパビリオンと見事に融合します。領土の一部は本物の森林に占められています。

来場者は展示のスケールを堪能し、全長1.1kmのエレベーターで端から端まで素早く移動することができます。 6人用パノラマキャビンでは、高さ30メートルから素晴らしい写真を撮ることができます。

展示会には100社を超える企業が参加し、35カ国からパビリオンが出展します。最大のものの一つは中国にあります。1,500平方メートルの面積に、中国庭園の何世紀にもわたる伝統と現代のトレンドが紹介されています。

ドイツ、イタリア、スペイン、ベルギー、ロシア、トルコ、アゼルバイジャンなどの国々が、フロリアード 2012 に独自のパビリオンを出展します。

今年のフロリアードにおけるブルガリア国立庭園と博覧会は、展示会のメインテーマである「自然の劇場の一部になろう!」に沿っています。自然と文化は密接に結びついています。民俗芸術、文化、娯楽は園芸分野に刺激を与え、またその逆もまた同様です。したがって、ブルガリアの世界園芸博覧会への参加のビジョンは、「ブルガリア - 古代の文化と純粋な自然を持つ国! リラクゼーションとトリートメント!」というモットーに従属しています。

ブルガリアの参加は、油を生産し、観賞用のブルガリアのバラに焦点が当てられています。ブルガリアのハーブ — ブルガリアの土地の生命線。アロマテラピー - 治療と喜び、そして環境に優しい天然製品。

今年のフロリアードでは、子供向けのプログラムに大きな注目が集まっています。彼らのために、インタラクティブなゲーム、遊び場、料理コンテストなどが考案されました。イチゴ、キノコ、野菜、果物がどのように栽培され、蜂蜜がどのように生産されるかを詳細かつわかりやすく示す特別なパビリオンも作られました。

この展覧会はテーマ別に5つのセクションに分かれており、今年10月7日まで開催されます。6か月間を通して非常に豊富な文化プログラムも実施されます。

2015年

イタリアのミラノ万国博覧会

5月1日、ミラノで世界博覧会EXPO-2015が開幕します。テーマは「地球に食料を。生命にエ

ネルギーを。」イタリアの主催者によれば、これはこれまでに開催された食に特化したイベントとしては最大規模となる予定だ。主催者の目標は、地球上の人々の生活に関わる多くの疑問に答えることだけでなく、地球の天然資源と環境の保護に関わる疑問にも答えることです。

ブルガリア、国連、EUを除く135カ国の代表がミラノで開催される2015年ミラノ万博に参加します。今年のミラノ展示会には、オックスファム、カリタス、イタリアの歌手アンドレア・ボチェッリ財団など、数多くの非政府組織や人道支援団体も参加する予定だ。参加者の中には食品業界からの企業も多数含まれています。

これらはすべて独自のパビリオンで展示されており、そのいくつかは建築の真の傑作であり、想像力の飛躍を示し、建築の革新に触発されています。それぞれの国で栽培される特定の作物や特定の気候条件に応じて、9つのテーマ別ゾーンが区別されています。

万博タウンは総面積110万平方メートルで、ミラノの西に位置しています。

中国の上海と韓国の麗水麗水(ヨス)で開催された過去2回の展覧会では、都市生活、海洋、海岸線が主なテーマでした。2017年にカザフスタンのアスタナで開催される次回の展示会では、エネルギーとエネルギー源が焦点となります。

ミラノ博覧会のテーマは、これまでの博覧会のテーマとは異なり、地球上のすべての国が参加できるものとなっています。彼らのうちのある人々にとっては、農業や食料生産における自分たちの能力を示す機会であり、またある人々にとっては、より多くの観光客を誘致するために、自分たちの食べ物、文化や伝統、生物多様性や気候を宣伝する機会である。他の人にとっては、潜在的な投資家や他の国々との協力を模索する機会となります。

イタリアのマッテオ・レンツィ首相がミラノ万博を正式に開会した。「今日、イタリアは世界を受け入れつつあるようだ」と彼は指摘する。

フランシスコ教皇はビデオメッセージで、食をテーマにしたこの博覧会が「連帯を世界規模で実現する」機会となるよう呼びかけた。

* * *

5月13日、BTAのガブリエラ・ゴレマンスカ氏が世界博覧会にみんなさんを案内させています。「ミラノ万博では、イタリアと国連のパビリオンに加え、多くの国のパビリオンも素晴らしい。ネパールのパビリオンは伝統的なネパールのパゴダを思わせるもの、ルーマニアのパビリオンは木造の農家風、トルコのパビリオンは鮮やかなブーゲンビリアとモザイクで彩られた農家風だ」とBTA特派員は書いている。

ベルギーとスペインのパビリオンは、カシーネと呼ばれる典型的なイタリアの長い木造農場に似ており、ベルギーのパビリオンの中央には、ラーケンの王立温室と温室を彷彿とさせるガラスの半球もあります。メキシコとマレーシアのパビリオンは、それぞれトウモロコシの殻と小麦粒のような形をしています。

オマーン・パビリオンは砂漠の真ん中にあるピンク色のオマーン風の大邸宅で、一方UAEパビリオンは波打つ砂丘を思わせるピンク色の波打つ形をしています。カタールパビリオンもアラブの邸宅ですが、その中央には巨大な籐のかごが置かれています。ポーランド、アンゴラ、エストニア、日本、チリ、スロベニア、スロバキアでは、木の板を織り合わせた特徴を持つ木造建築物が建てられています。

タイのパビリオンは、田んぼで働く人がかぶっている帽子のような、巨大な木製のタイの帽子です。麓には小さな田んぼがあり、その中央には労働者や動物の像が置かれています。パビリオン内には 3 つの映画館があり、映画や光と音のショーでタイの食と農業、そして国王の環境保護、農業、水資源に関する政策が紹介されます。一方の映画館では、スクリーンはパビリオンのタイ帽の内側の輪郭に沿って設置されており、もう一方の映画館では、スクリーンは鏡張りの井戸の底に設置されています。ある時点で、おいしい食べ物を表現するさまざまな形容詞が飛び交い始め、その中に「おいしい」という言葉が登場します。

オーストリア館の前には小さな森があり、アゼルバイジャン館には植物が生い茂った巨大なガラスの地球儀があります。ベラルーシのパビリオンは、2 つの緑の丘に挟まれた水車です。カザフスタン館は、騎士の甲冑に似た、膨らんだ銀色の光沢のある壁が特徴です。一方、トルクメニスタン館は色鮮やかで、正面にはトルクメニスタン絨毯に似たスクリーンがあります。エクアドルのパビリオンは、ネックレスに似た色とりどりのビーズの列で覆われています。アルゼンチンはサイロ型のパビリオンで展示され、モナコのパビリオンは積み重ねられたカラフルな貨物コンテナで構成されています。

いくつかのパビリオンは船のようなデザインになっています。

2015年5月13日 ミラノ：EXPO-2015の散策風景
写真：ガブリエラ・ゴレマンスカ（BTA）

クウェート館の前にはダウ船の帆が絡み合っている。その下には砂漠から運ばれた砂が敷き詰められており、その後ろには展示エリアへの入り口があります。一定の間隔で、入り口の前に水の壁が降りてきて、この壁の噴流に巧みに光が反射し、「水は生命の鍵」という言葉が青い文字で書かれています。

ハンガリーのパビリオンは、片側は木造船に似ており、もう一方はかじられた動物の骨格に似ています。ロシア館は巨大なノアの箱舟で、この船の船首の下部は巨大な鏡になっています。アメリカ館は巨大な木造の納屋ですが、その形を最もよく理解するには屋上テラスに登る必要があります。 5月9日、ロシア館の前で、赤軍兵士に扮した美しいロシアの少女が、ナチスドイツに対する勝利を記念して、来場者一人ひとりに聖ゲオルギオスのリボンを結びました。

いくつかのパビリオンでは、子供の頃を思い出すことができます。ドイツのものは滑り台を降りて残るもので、オランダのものは遊園地になっています。ブラジル館の細長い木造ホールでは、来場者は硬い木の床の上を歩くのではなく、巨大なハンモックの上でバランスを保とうとします。エストニア館のブランコは、競技者が巨大なブランコに乗って頭上を転がることを目的とする、エストニアの典型的なスポーツであるキーキングを彷彿とさせます。

フランスは、ミラノ万博で、木製の洞窟と、その前にあらゆる種類の野菜が育つ緑豊かで香り豊かな果樹園を展示しています。洞窟の天井からはワインのボトル、銅製の食器、シリアルやパスタの入った巨大な瓶が吊るされています。フランスのチーズの盛り合わせがニッチに並べられています。

英国パビリオンは白い蜂の群

れのような形をしています。彼の目の前の緑豊かな庭園では、ミツバチの羽音やコオロギの鳴き声が聞こえます。

中国は3つのパビリオンで参加しています。1 つ目は国営企業、2 つ目は万科不動産ホールディングス、3 つ目は中国企業です。国営のものは中国の建築家の作品であり、訪れる人の想像力次第で、波打つ麦畑や波打つ屋根を持つ奇妙な家のように見える。彼の目の前には香りの良い黄色い花の海が広がっています。建築家ダニエル・リベスキンドが設計した万科パビリオンはカタツムリのような形をしているが、企業パビリオンはチェコ共和国、韓国、リトアニアのパビリオンと同様にまばゆいばかりの白色である。

エキスポタウンには緑があふれています。米国とイスラエルのパビリオンの壁には、万博の6か月間に収穫が期待されるさまざまな作物が植えられた垂直庭園があっています。アメリカ館では、天井の照明もさまざまな植物が入った箱になっています。ベトナム館では巨大な竹の漏斗に木が生えており、コロンビア館の白い柵の中には、高度に応じて気候が変化する同国の5つの温泉地帯で見られる植物種が囲われている。

ミラノでの展覧会のテーマは、地球の食糧と生存です。しかし、参加国のパビリオンが食べ物でいっぱいになっているわけではありません。食糧、生産、生存、食糧不足は別の形で存在します。たとえば、スペイン館では、これらすべてが巨大なスクリーンに映し出され、作物の栽培、国の自然、典型的な料理の調理などの映像が映し出されます。パビリオンのホールの 1 つは、壁と床が透明なパネルで覆われた板で作られており、食べ物や食事を思い出させます。

* * *

ミラノ万博は110万平方メートルの敷地面積を誇り、135カ国、数多くの国際機関、企業、NGOが参加しています。50以上の国と企業が独自のパビリオンを建設しています。上空から見ると、万博は魚のように見えます。かつての集落を模して、十字形に建てられ、2つの大きな通りが交差しています。長い方のデクマーノ通りは1600メートルに及び、その両側には万博参加国のパビリオンが並んでいます。それを横切る通りはカドロ通りと呼ばれ、その両側にはイタリアの様々な地域のパビリオンと、壮麗なイタリアパビリオン、そしてその向かい側には、より控えめな欧州連合パビリオンがあります。2つの通りが交差する広場は、もちろんイタリア広場で、日差しや雨から来場者を守るために巨大な日よけが張られています」と、 5月14日BTAのガブリエラ・ゴレマンスカ記者は書いています。

エキスポビレッジの最東端には地中海の丘があり、そこからすべてのパビリオンを眺めることができます。最南端には野外劇場があります。そしてその反対側、最北端には、磁石のように訪問者を惹きつけるエリアがあります。丸い湖のある湖ゾーンで、その中央には「生命の木」と呼ばれる巨大な木造建築物が立っています。湖の面積は28,000平方メートルで、最大20,000人を収容できます。円形の湖自体の直径は 90 メートルで、その水は、エキスポタウンの他の場所にも水を供給している隣接するヴィロレジ運河から供給されています。一日の特定の時間になると、湖畔では大音量の音楽が響き渡り、生命の樹には巨大な造花が咲きます。

万博の街を訪れる人々を魅了するもう一つのものが、金メッキのブロンズで作られた高さ4メートルの聖母マリア像です。これは、1774年にジュゼッペ・ペレーゴによって作られた金メッキの銅で作られたマドンナ像の正確な複製で、ミラノ大聖堂の上にあり、街のシンボルとなっています。この像の複製は、万博の町の最も西側にある最大の入口に設置されている。

エキスポビレッジのパビリオンは環境に優しい材料で建てられています。木材とガラスが主流です。博覧会終了後、パビリオンは解体され、資材はリサイクルされる。パビリオンの建築は目が回るほどです。この点で、おそらくその素晴らしさと壮観さのリーダーは、ミラノ万博のツアーが必然的に始まるイタリア館と国連館もであり、後者はパビリオン ゼロと呼ばれています。

12,000平方メートルのイタリアパビリオンは複数の企業の共同作業で、4つのレベルに分かれており、最上階にはパノラマテラスがあります。この構造は白く、枝が絡み合ったような光起電性で、使用されているセメントは「イタルセメンティ」社によって特別に設計されたもので、光触媒特性を持ち、光と接触すると空気中の汚染物質を捕捉して不活性塩に変換します。建築における真の革新の殿堂であるこのパビリオンは、万博後も存続し、新技術センターが入居する予定です。

ゼロのパビリオンは、ディレクター兼セットデザイナーのダヴィデ・ランペロと建築家のミケーレ・デ・ルッキの作品です。万博会場の西側の入り口にそびえ立ち、その外観はエウガネイ丘陵（イタリアの都市パドヴァの南西に位置し、平坦なヴェネト州の真ん中に群島のようにそびえ立つ火山起源の丘）に似ています。パビリオン ゼロの丘の奥深くには、まるで地球の中心にいるかのように暗闇が支配しています。それぞれのパビリオンの丘の下には、さまざまなものが展示されている独立したホールがあります。ホールの 1 つには、人間が家畜化し、農業活動に取り入れるようになった動物の像があり、別のホールには何世紀にもわたる集落の発展の様子が示され、3 つ目のホールには巨大な木の幹があり、4 つ目のホールには人工の果物と野菜の巨大な山があり、世界中で何億人もの人々が栄養失調に苦しんでいる一方で、人類が年間13 億トンもの食料を無駄にしていることを思い起こさせます。ホールの一つの壁には色とりどりの皿がずらりと並んでいます。近づいてみると、大理石やテラコッタ、彩色ガラスでできているのではなく、2枚のガラス板の間に敷き詰められた本物の穀物やさまざまな色の作物であることが分かります。人が地球の奥底から現れると、パビリオン ゼロの中庭にたどり着きます。そこには、イタリアの家具会社 Riva 1920 が Pangea という名の巨大な木製のテーブルを設置しています。それは、かつて全世界を一つにまとめた広大な大陸を思い出させるものであり、団結の象徴であり、世界には国境や偏見や違いがあってはならないことを訪問者に思い出させるものです。テーブルの表面は、ニュージーランドの樹齢千年のカウリ材の 19 個の要素で作られており、テーブルの脚はベネチアの潟湖で採れるブリコラ材の栗の棒で作られています。

この必見の場所の後は、エキスポのタウンのツアーが始まっています。ツアーには少なくとも 1 日かかります。パビリオンの中にはプログラムや上映会が行われるものもあれば、軽量で解体しやすい構造のため、一定数の人しか収容できないものもあります。いくつかのパビリオンの前には必ず長い行列ができているので、たとえばイギリス、クウェート、エクアドル、中国、ドイツ、スイス、イタリア、コロンビア、タイ、アラブ首長国連邦の博覧会を見たい場合には、忍耐力が必要です。不思議なことに、自らを世界のリーダーと称するアメリカやロシアのパビリオンは、大きな関心を集めていない。 4月25日の壊滅的な地震とその後の一連の強い余震によって壊滅的な被害を受けたネパール館は、この悲劇のために当局が完了することができなかったため、今も無人のままである。しかし、ボランティアたちは毎日努力を惜しまず建設に取り組んでおり、完成すれば訪問者を受け入れるようになるだろう。

* * *

ブルガリアとイタリアの 90 社を超える企業が、我が国における協力、貿易、投資の機会を探しています。彼らは、9月8日にミラノ万博の枠内で開催される我が国の全国プレゼンテーションに参加します。

フォーラムの開会式で、リュベン・ペトロフ経済副大臣は「我が国が最も大きな潜在力を持つ分野は、機械工学、自動車部品製造、電子・電気工学、IT、食品・飲料、製薬産業だ」と述べた。このイベントは、ミラノ商工会議所、イタリア企業国際化促進庁（PROMOS Milano）、ブルガリアのイタリア商工会議所が主催しています。

「ブルガリアはビジネスを行う上で最も有望な場所の一つと考えられている」と、ブルガリア駐在イタリア大使マルコ・コンティチェッリ氏はフォーラムで述べた。

* * *

ミラノ万博は10月31日に閉幕していた。次回の万博は2年後、カザフスタンの首都アスタナで開催され、「未来のエネルギー」をテーマとし、「二酸化炭素排出量の削減」、「エネルギー効率」、「すべての人のためのエネルギー」をサブテーマとする。これまでに100か国が参加を招待されている。

EXPO 2017 ASTANA

2017年

カザフスタンのアスタナ市で開催されていた専門世界博覧会

カザフスタンの専門世界博覧会は、2017 年 6 月 10 日から 9 月 10 日まで開催されています。「セルビアのアレクサンダル・ヴチッチ大統領は本日、アスタナでカザフスタンのバクイツァン・サギンタエフ首相と会談した。EXPO-2017国際博覧会の開会式のためアスタナに滞在しているヴチッチ大統領は、サギンタエフ首相と二国間関係や協力拡大の必要性について協議した」と6月9日の報道は伝えている。

7月12日の出版物によると、ドイツのフランク＝ヴァルター・シ

カザフスタンの首都アスタナで開催された世界博覧会の広告
撮影：BTA

ュタインマイヤー大統領はカザフスタンを中央アジアにおける「安定の錨」と定義している。ドイツ大統領の訪問は、アスタナで開催されるエネルギー部門の将来に関する国際展示会と関連している。ドイツ館は、より環境に優しいエネルギー源への移行を推進しています。

2020年

（2021-2022年）

アラブ首長国連邦ドバイ万博

H2020年3月30日、EXPO-2020国際博覧会の主催者は、コロナウイルスのパンデミックによりイベントの延期を要請した。このフォーラムは当初、2020年10月20日から2021年4月10日までアラブ首長国連邦（UAE）のドバイで開催される予定でした。主催者は5月初旬、2021年10月1日から2022年3月31日までの間に開催することを提案した。

* * *

2021年9月30日、ドバイで世界博覧会EXPO-2020が開幕しています。この博覧会には190か国以上が参加し、コロナウイルス危機が始まって以来最大の世界的イベントとなっていります。この未来的な展示複合施設は、ドバイの南郊外のかつて砂丘だった場所に建てられ、まるで都市全体が建っているかのような雰囲気を醸し出しています。

このイベントは「心を一つにして未来を創る」をテーマに開催されます。

1,000人の出演者とプロのスタッフが、最新のテクノロジーと視覚的な光のショーを駆使して90分間のスペクタクルを演出しています。ショーは、世界最大の360度投影面であるアルワスルプラザの70メートルの格子ドームに投影されています。パノラマ画像やビデオを表示することができ、屋内でも屋外でも画像がはっきりと見えるというユニークな効果を生み出します。

オープニングを記念したガラコンサートには、ゴールデングローブ賞受賞者のイタリア人テノール歌手アンドレア・ボチェッリ、女優、歌手、ソングライターのアンドラ・デイ、イギリス人歌手エリー・ゴールディング、中国のピアニスト名手ラン・ラン、ベナンの歌手アンジェリカ・キジョー、そしてアラブ世界で人気のアーティストたちが招待されている。

* * *

2021～2022年にドバイで開催された世界博覧会におけるブルガリア館の様子
撮影：BTA

ブルガリアは、世界博覧会EXPO-2020　に独自のパビリオンで参加しています。「ブルガリア：コネクティビティの中心、未来のエンジン」はブルガリア館のコンセプトであり、ブルガリアのサブテーマ「モビリティ」とドバイEXPO-2020のメインテーマ「心をつなぎ、未来を創造する」をインタラクティブに展開しています。

世界中の訪問者が見るがことになっているブルガリア館で展示される展示品の中には、パナギュリシテの金の財宝のレプリカやヴァルナの墓地遺跡の金などがある。この展示品は国立歴史博物館の専門家も同行しています。

EXPO-2020のために特別に制作されたビデオインスタレーションがパビリオンの床と壁を覆いています。この構造は、空間を記念碑的な展示に変えるマルチプロジェクションシステムで構築されています。ビデオ　インスタレーション「伝統と芸術」および「科学と成果」は、合計高さ350 cm、幅 180 cm の 6 台のモードマウント垂直モニターを含むマルチ　スクリーンで表示されます。

パビリオン、ロゴ、付随プログラムは、バルカン半島、ヨーロッパ、中東の連携の中心としてのブルガリアの地位と役割を紹介しています。ここは、人と物の移動、東洋と西洋、宗教と文化、過去と未来、自然と観光、経済と社会、人と技術のつながりを刺激するセンターです。

このコンセプトは、1,300年の歴史の中で、さまざまな時代を通じてイノベーションを生み出す原動力としての我が国の役割を示しています。

サブテーマ「モビリティ」の5つの主要テーマとEXPO-2020のメインテーマは、パビリオンの建

2021～2022年にドバイで開催された世界博覧会におけるブルガリア館の様子
撮影：BTA

築デザイン、ロゴ、6か月間のプログラム、ブルガリア建国記念日の特別イベント、そして記念品や販促資料の提供からブルガリアパビリオンのソーシャルネットワークやウェブサイトの維持に至るまで、付随するすべての活動に概念的に組み入れられています。

* * *

2022年2月9日、ブルガリアの機関の代表者による公式訪問はなかったものの、ブルガリアの建国記念日がドバイ万博で非公式に、インパクトと感動をもって祝われました。

このパビリオンはアラブ首長国連邦のさまざまな地域から来たブルガリア人たちの集会の場となっていて、中には家族連れで来る人もいています。参加者は全員、「ラクリマ」社の色付き塩と乳製品を使ったパンを試食しています。

この非公式の祝賀会では、オリンピックの新体操チャンピオン、無形文化遺産、ブルガリアの民間伝承や料理の紹介が行われました。

ブルガリアの「ダイヤモンドチーム」、つまり東京第32回夏季オリンピックで優勝した新体操チームは本当にセンセーションを巻き起こしている。少女たちは大きな関心を持って迎えられました。ファンたちは、チームの一員であるシモーナ、エリカ、シュテフィに会うために、わざわざブルガリア館にやって来ました。

* * *

「世界中から何百万人もの来場者が、象徴的なドーム型のアルワスル広場の下、182日間にわたり多様で充実した活動やイベントを楽しんだ後、中東、アフリカ、南アジア地域で初めて開催され、アラブ諸国で初めて開催された万国博覧会であるドバイ万博2020が昨日閉幕しました」と、UAM事務局長のモハメド・ジャラル・アル・ライシ氏は4月1日に述べたし BTAの報道を引用していた。

EXPO2020ドバイにおけるブルガリア館
撮影：BTA

「アラブ首長国連邦、のような難しい決断をした、大世博会開催国として、最高の展覧会を催すことで、不可能という言葉を語り消し去り、このイベントの長い歴史に残る素晴らしいエディションを披露した、とアラブ首長国連邦副大統領兼首相、ドバイ首長シェイク・ムハンマド・ビン・ラシッド・アル・マクトゥーム殿下は、この巨大世界的イベントの閉会式で配信された音声メッセージで述べた」。

日本の大阪で開催された万博

2022年5月5日、政府は、2025年4月13日から10月13日までの期間、日本の関西地方大阪市で開催される国際博覧会「EXPO-2025」へのブルガリア共和国の参加を承認しました。

* * *

2024年5月17日、ブルガリア中小企業促進庁（BSMEPA）のボイコ・タコフ長官と道上尚史駐ブルガリア日本国大使が、ブルガリアの大阪万博参加準備について協議しました。二人は、2025年博覧会におけるブルガリアのプレゼンテーションのビジョンと構成について話し合い、会議では準備が予定通りに進んでいることが伝えられました。

会談で、ボイコ・タコフ氏と道上尚史氏は、1970年の万博後に日本人がブルガリアに恋をしたように、2025年には我が国も両国民を結びつけるもの、すなわちブルガリアの古代文化と歴史、伝統、功績、革新への敬意を示す必要があることに同意した。

* * *

2024年5月、ボイコ・タコフはBTAのデリアン・ペトリシュキにインタビューを行った。ブルガリアの大阪万博（EXPO-2025）への参加に係る当初予算は、過去3年間の米ドルとブルガリア・レフの為替レートの差異を除き、変更はありません。将来的にこのような変更が行われるかどうかは、経済環境における客観的なプロセスの進展次第です。パビリオンのレンタル予算も更新されておらず、為替レートの差異も依然として存在しています」と、BSMEPA事務局長は述べています。彼は、すでに2022年に閣僚理事会が一貫してタイプ「B」のパビリオンを選択したが、その枯渇によりタイプ「A」になったと述べている。ボイコ・タコフ氏は、行われた交渉を踏まえ、現時点では「A」タイプのほうが下位クラス「B」のパビリオンよりも有利な賃料が実現されていると伝えた。ブルガリアは、ブルガリア館をリースする日本の企業である大和リース株式会社と契約を締結しました。次のステップは、屋内および屋外展示エリアのコンセプト設計と、ブルガリアの実際のプレゼンテーションです。2025年に大阪で開催されるブルガリアのビジュアルプレゼンテーションの概念提案の手続きも完了しようとしています。ブルガリアの参加計画を改良するプロセスには、全国的に代表される雇用主および業界団体のメンバーも含まれ、参加の招待状が送られる予定である。「国民の間には、自分たちのアイデンティティを名指しせずに、同じような形でしか自分たちの姿を表現できないという疲れを感じます。個人的には、ブルガリアの顔は色鮮やかで現代的であり、世界に見せるべきものがあると信じています。特に、この博覧会のテーマと私たちの位置する地域を考えるとなおさらです」と、ボイコ・タコフ氏はコンセプトについての自身のビジョンを語った。

* * *

2025年4月13日 大阪：EXPO-2025に参加するブルガリア
写真：イヴァン・ラザロフ（BTA）

我が国が世界博覧会に参加するブルガリア館の建設開始を記念する厳粛な式典が大阪で行われた。これは、東京駐在の外交使節団のチームがFacebookページの投稿を通じて発表したものです。公開された情報から、式典は2024年6月24日に行われ、東部の国の伝統と文化の精神にのっとって行われたことは明らかです。

式典には、駐日ブルガリア特命全権大使のマリエタ・アラバジエヴァ氏、東京の貿易経済サービス局長（STEV）のクラシミル・イワノフ氏、ブルガリア経済社会開発庁（BSMEPA）のボイコ・タコフ長官、日本ブルガリア協会、泉大津市のブルガリア名誉領事館、日本国際博覧会協会、在日ブルガリア人コミュニティの代表者らが特別出席した。

* * *

ブルガリアは、国のブースを出展して世界博覧会に参加し、観光省の提案によりブルガリアの学生がそこで働くことになると、観光省は2025年3月3日に発表した。

観光省は、ブルガリアの参加組織に関するすべての決定を行う省庁間作業グループの一員です。これは、ミロスラフ・ボルショシュ大臣とBSMEPA長官ボイコ・タコフ博士との会談の議題でもありました。

ブルガリア政府は、私たちの学生たちに大阪万博で自国を代表するまたとない機会を与えることができます。全国の大学から観光学と日本学を専攻する学生を推薦し、博覧会期間中にブルガリアブースで6ヶ月間働く60名のブルガリアの若者を選抜します。「これは、最も若く、最も経験豊富なブルガリア人が交代で参加し、貴重な経験と実践的なスキルを習得できる十分な期間である」とボルショシュ大臣は指摘する。

ブルガリア館は376平方メートルの広さがあり、シンガポール館とオランダ館の間にある展示会用に新しく建設された島の900平方メートルの敷地に位置しています。その主なコンセプトは、過去、現在、未来を共通の時間的空間的次元に統合するこ

2025年4月13日 大阪：副首相・イノベーション成長大臣トミスラフ・ドンチェフ、駐日ブルガリア大使マリエタ・アラバジエヴァ、建築家小林博人、ブルガリア館公式開館式
写真：イヴァン・ラザロフ（BTA）

とを目的としています。

* * *

大阪万博で最高クラスの「Aタイプ」のパビリオンを出展する全47カ国のうち、博覧会の準備と運営を担当する日本の協会からすでに認定書を受け取っているのは、ブルガリアを含むわずか8カ国だけだ。これは3月13日に共同通信が報じたもので、日本の首都で開催される世界博覧会の準備状況について報じている。

この展示会には世界中から2,820万人の来場者が訪れると予想されている。大阪湾に位置する人工島「夢洲」で開催されます。

* * *

日本企業のブルガリアへの回帰と両国間の良好な関係は、大阪で開催される2025年国際博覧会EXPOを契機として、日本とブルガリアの交流における新たな「黄金時代」をもたらす可能性がある。これは、3月24日にソフィア・ヒルトン・ホテルで開催された、日本ブルガリアビジネス協会（JBBA）がブルガリア駐在日本大使館および中小企業促進庁（BSMEPA）の協力を得て主催したビジネス朝食会で、道上尚史駐ブルガリア日本大使が述べたものである。

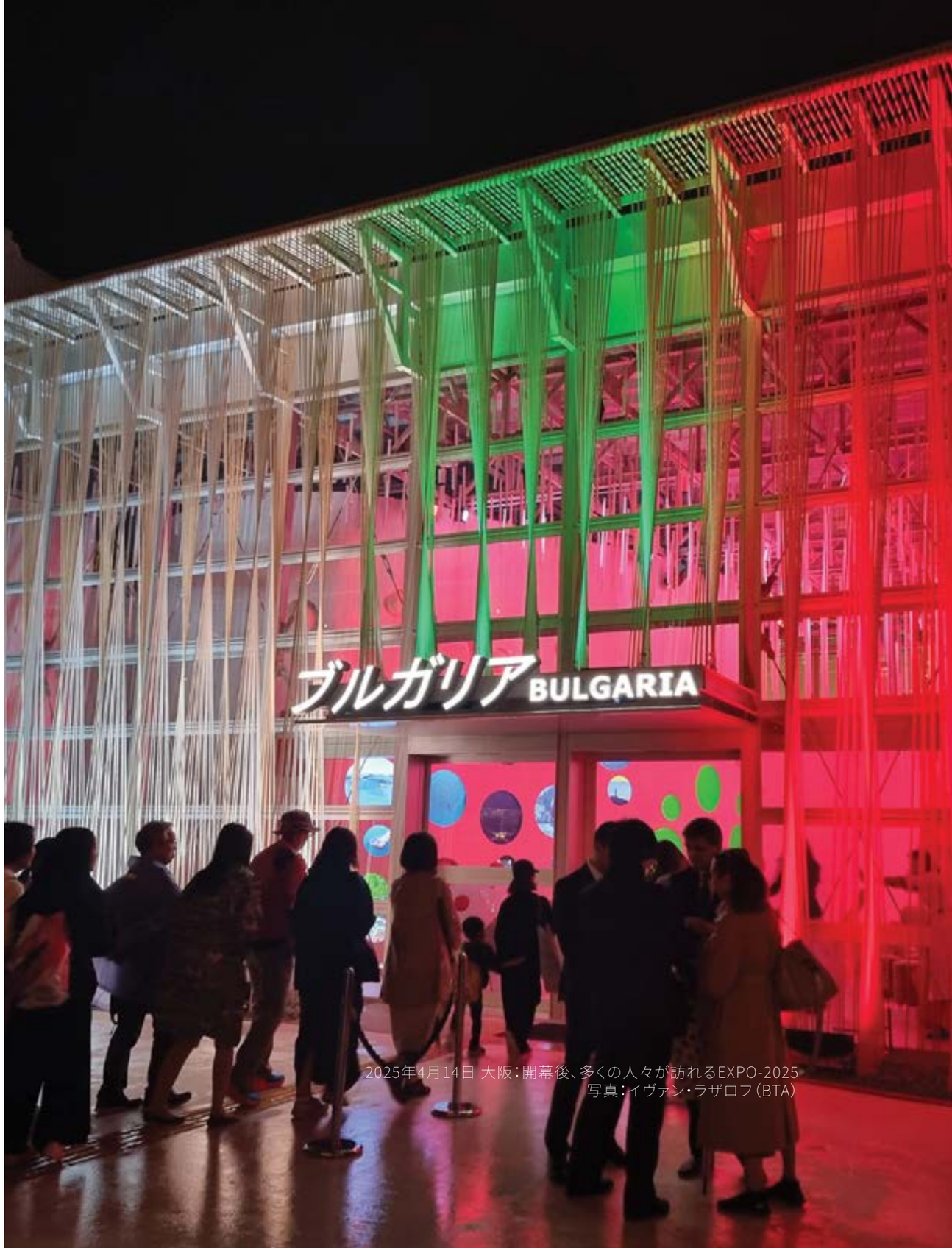
外交官は、大阪で開催される2025年世界博覧会「EXPO-2025」は未来と先進技術に捧げられたものだと回想する。

「オリンピックは4年ごとに開催され、万博は5年ごとに開催されることは皆さんご存知でしょう。（中略）人類の生活と技術の発展という点では、万博の方が少し重要だと言えると思います」と、オリンピックの方が歴史が長いにもかかわらず、道上氏は言う。

同氏によれば、日本や世界の人々は、先進技術と人間性が同等に重要であり、技術だけでは十分ではなく、むしろ補助として使われるということを明確に理解しているという。

道上大使閣下は、1970年、当時11歳だった自分が大阪万博を6回訪れたとき、当時アメリカとソ連の2つのパビリオンに月の小石が展示され、何百万人もの来場者を集めたことを思い出したと語りました。 「この展覧会には毎回膨大な数の来場者が訪れます」と道上氏は言い、前回の大阪での展覧会には6400万人が来場したことを指摘した。

大使は、1970年の博覧会にブルガリアが独自のパビリオンを出展したことを思い出し、ブルガリア館の三角形の構想を個人的に覚えていることを示唆した。彼によれば、その後、日本の



2025年4月14日 大阪：開幕後、多くの人々が訪れるEXPO-2025
写真：イヴァン・ラザロフ（BTA）

2025年4月13日 大阪：民族衣装を纏った少女たちがブルガリア館のゲストを歓迎
写真：イヴァン・ラザロフ（BTA）

天皇がブルガリア館を訪問し、そこで天皇皇后両陛下がヨーグルトを試食して大変気に入ったのが「明治ブルガリアヨーグルト」の始まりだったという。このことに気づいた例の会社が日本でのこの製品開発を始めていたのだ。

また、ブルガリアの首脳らも日本を訪問し、日本の発展に感銘を受け、教育分野での交流を希望していることが大使の言葉から分かった。

「これが、ビジネスだけでなく、両国間の緊密な交流の始まりでした。これが両国間の黄金時代の始まりでした」と道上氏は語る。

同氏の言葉によれば、かつての大阪博覧会がブルガリアと日本の緊密な関係とビジネス活動の出発点となったように、今年の博覧会でも同じことが起こる可能性があり、「私たちの次の黄金時代」の出発点となる可能性があるという。

ビジネス朝食会にはブルガリアのルメン・ラデフ大統領、ミロスラフ・ボルショシュ観光大臣、ペータル・ディロフ経済大臣が出席した。

「ブルガリアは、その戦略的な地理的位置だけでなく、質の高い人的資本、安定性、社会経済的環境、そしてブルガリアへの投資とビジネスを行うための条件によって、東欧・中央ヨーロッパ地域にとって日本の真の戦略的パートナーとなり得る」と、ビジネス朝食会の参加者を歓迎したルメン・ラデフ大統領は述べた。

国家元首は、ブルガリアの大阪万博への参加は、両国を結びつけるもの、すなわち何世紀にもわたる文化、古代の伝統、科学、経済、ハイテクにおける先駆的な成功を示す機会となるだろうと指摘した。

「1970年の大阪万博については何度も言及されました。半世紀前、あの万博によってブルガリアと日本の経済関係は新たな段階に入りました。歴史は繰り返さないと言われますが、今年の万博をきっかけに、本当に新たなページがめくられ、新たな段階に入ることを期待しています」と、トミスラヴ・ドンチェフ副首相兼イノベーション・成長大臣は述べた。同氏によれば、良好な政治関係や国民間の友好感情に加え、日本企業がブルガリアに戻ってくるなど、その兆候はすべて現れているという。

「ブルガリアは日本ではヨーグルト、ローズオイル、そして屈強な体格の男性でよく知られています。これは否定しませんが、ブルガリアの位置づけを変える必要があると私は考えています。これらに加えて、ブルガリアはビジネスを行うのに適した環境、科学、情報技術、機械工学、人工知能といった分野における独自の成果で知られる必要があり、これらは新たな発展の機会を切り開くでしょう」とドンチェフ氏は述べた。

「ブルガリアは日本をアジアにおける戦略的パートナーとみなしている」とペタル・ディロフ経済産業大臣は述べた。同氏は、経済産業省は、現地で企業が参加する経済的なイベントを開催することで、EXPO-2025に積極的に参加する予定であると述べた。大臣は日本が大阪で開催する万博に祝意を表し、大きな潜在力を持つ日本が万博を成功裏に開催するだろうと自信を表明した。

「博覧会の主な目的であるビジネス以外に、観光省の私たちにとって、日本国民とブルガリア国民はお互い歴史を知る出会うのはもう大切なことです」とミロスラフ・ボルショシュ観光大臣は述べた。「私たちの国が知られていないという事実について話すことがどんどん少なくなることを望んでいます。そして、大阪がそれが起こる場所になることを願っています」と彼は付け加えた。

「ビジネスにおいて、持続可能なパートナーシップは、忍耐、努力、そして長期的なビジョンによって構築されます」と、日本ブルガリアビジネス協会（JBBA）の会長トドル・ケシモフ氏は語る。彼は、大阪万博への参加はブルガリアにとってその潜在力を示す機会であり戦略的に重要であると指摘する。「ブルガリア館は、技術と伝統が出会う魅力的な中心地となり、我が国の文化と歴史を展示するとともに、ブルガリアの製造業者や企業とのビジネス、投資、協力の機会も紹介することになるだろう」と彼は付け加えた。

BSMEPA事務局長ボイコ・タコフ博士は、今日の博覧会は、現代の最も重要な課題に対する人類の対応を形作る対話とアイデアの場であると述べています。彼によると、私たちのパビリオンを含むこの展示会のサブテーマは人命を救うことであり、地球上の人々と生命を脅かす課題を網羅しています。このサブテーマは、健康、幸福、平和、人間の安全保障、尊厳などの分野に関連しています。

ブルガリアは、参加準備の過程で、特別にカスタマイズされた貸し出し用パビリオンを提供するよう認可を受けた日本企業にアプローチし、提出された提案、技術分析、オンライン会議、ワーキンググループの決定を検討した結果、大和グループの一員であり、日本最大の産業用スペース貸し出し企業である大和リース株式会社が選定されました。このパビリオンは、慶応義塾大学建築学部教授で建築家の小林博人氏の協力を得て設計・施工されました。建築家の小林氏は、建築庁、建築家組合、建築家会議所との業務会議のためにブルガリアを数回訪問しています。タコフ氏によると、空間的な観点から見ると、私たちのパビリオンは伝統的な要素と現代のインタラクティブ　テクノロジーを組み合わせており、モダンなデザインと概念的にクリーンな空間だけでなく、独自の没入型デジタル　エクスペリエンスも生み出しています。タコフ氏はさらに、工芸品や織物、自然のシンボルなどの伝統的な要素を丁寧に織り込むことで、ブルガリアと日本の類似点が生まれると付け加えた。私たちのパビリオンだけでなく、EXPO全体においても、循環型の政治と持続可能性が中心的な位置を占めています。展示会終了後、パビリオンのすべての部品はリサイクルまたは再利用されます。建設には木材や繊

2025年4月13日 大阪：ラクトちゃん –
ブルガリア館公式マスコットキャラクター
写真：イヴァン・ラザロフ（BTA）

維などの環境に優しい素材が選ばれ、施設のあらゆる部分は将来の用途を考えて慎重に検討されたとタコフ氏は語る。

私たちのパビリオンのコンセプトを選択する過程で、我が国のビジュアル表現に関するアイデアや提案を公募しました。この目的のために、作業グループが拡大され、省庁、機関、協会など19 の機関が一連の会議と議論を経て、指名された 5 つの概念提案を発表するよう招待されました。その後、建築家マリア・ゴスポディノワ、イスクレン・クラステフ、MP-Studio社のプロジェクトが投票によって選ばれました。

2025年万博におけるブルガリア館のモットーは「自然と共に進化する」です、とイスクレン・クラステフ氏は報告します。彼は先見の明を持つ起業家であり、数百社の企業を指導するメンターでもあります。イノベーション・エコシステムの構築や、規制産業におけるAI技術の導入を主導しています。クラステフ氏は、ブルガリアの乳酸菌「ラクトバチルス・ブルガリクス」が何世代にもわたって世界中の人々の生活を向上させてきたことを改めて強調します。55年前、再び大阪万博で、昭和天皇ご夫妻がヨーグルトの効能を好まれたことで、ヨーグルトは日本の食文化と健康の一部となり、「ブルガリア」と名付けられました。命を救うという世界的な使命において、ブルガリアのイノベーターたちは今日、世界の発展に貢献しています。世界6位の宇宙開発国であり、宇宙食開発で3位にランクされるブルガリアは、超小型衛星の開発にも誇りを持っているとクラステフ氏は語ります。

MPスタジオのクリエイティブディレクター、ストラヒル・ヨルダノフ氏は、2025年博覧会のブルガリア館は協力と共感の名の下に過去、現在、未来を結びつけることを目指す生活空間となるだろうと指摘する。

2025年4月13日 大阪：ブルガリア館内、国をテーマにしたオーディオビジュアルショー
写真：イヴァン・ラザロフ（BTA）

ブルガリア通信社（BTA）のアーカイブ

2025年2月16日：BTA創立127周年を記念し、モダナイズされた新アーカイブ施設が開館。ブルガリア通信社の貴重な記録を保存。
写真：BTA

2021年、ブルガリア通信社（BTA）の組織内に「アーカイブ・参考資料局」が設立された。新しく設置されたこの局には、「歴史アーカイブ部門」、「参考資料部門」、「写真・映像アーカイブ部門」、そしてBTA図書館が所属している。

それぞれの部門は、かけがえのない歴史の断片を保存している。

1934年6月、BTAに「文書資料部」が設置された。この部門は、ひとりの担当者、すなわち報道担当官によって運営され、ブルガリア国内外の新聞や雑誌を収集し、ブルガリアに関する記事の切り抜きを作成し、印刷局長のためにリファレンス資料を作成する役割を担っていた。

今日、BTAの「参考資料部門」は豊富な知識の蓄積を誇っている。新聞や雑誌からの切り抜き5千箱、約25万件のカード索引、さらに図書館には9万冊の蔵書がある。

歴史アーカイブ部門には、これまでに作成されたBTAのニュース速報が保管されている。その中には、1898年2月16日に初代局長オスカル・イスカンダルが自らの手で書き、署名した最初のニュース速報も含まれている。127年にわたり、BTAはブルガリアと世界の記憶を守り続けてきた。保存されている何百万ページもの資料には、ブルガリアと世界の歴史の一端を伝える情報が詰まっており、そこに描かれる人々の運命は、読者を127年の時の流れの中へと誘ってくれる。

これまで、BTAは通常のニュース速報に加え、特別版と呼ばれる限定配布の速報も発行してきた。それらには、王宮、首相、印刷局長、アーカイブ向けに限られた情報が記載されていた。1935年には、ブルガリアにとって不利益となる内容をまとめた「Hors Bulletin」という機密速報が発行された。さらに1975年から1989年にかけては、「特別速報付録」C-、C-2、C-3（第1

2023年より、BTAの近代的なデジタル化センターにおいて、アーカイブの公報や写真のデジタル化作業が進められている。
写真：BTA

巻、第2巻、第3巻）が発行され、機密レベルに応じた区別がなされた。中でもC-3は、ブルガリア共産党中央政治局メンバーのみに配布される最高機密とされていた。BTAのニュース速報は、復興プロセスにおける出来事を伝えるだけでなく、当時の記者たちの視点を通して、人間ドラマそのものを語りかけてくる。

1964年、BTAは週刊誌の発行許可を取得する。当時の局長ロザン・ストレルコフは、画家ボリス・アンゲルシェフに雑誌タイトルのデザインを依頼し、各誌のタイトルには必ずBTAのロゴマークを入れるよう求めた。こうして1965年1月、『世界一周（По свеmа）』『科学と技術（Hayka и mехника）』『LIK』『パラレル（Паралели）』という、BTA発行の四つの雑誌が新しいロゴを冠して登場した。1991年にはロゴにBTA創設年が加えられ、1994年に特許庁に正式登録された。これらの雑誌は文化、科学、ファッション、音楽の世界への窓口となり、BTAの記者たちはイニシャルではなく、名前を持つ存在として文化史に足跡を残していった。

BTA初の専属写真家は1940年に任命され、1952年には独立した「プレスフォト」編集部が設立された。同社の最大の成果の一つは、1972年に写真家ステファン・ティホフがハノイで捕虜となった米軍パイロットを撮影した写真で「ワールド・プレス・フォト」賞を受賞したことにある。

BTAは自社のテキスト・写真アーカイブを活用し、未発表資料を集めたドキュメンタリー写真展をいくつも開催してきた。

2023年、BTAは、ブルガリア国営ラジオ、ブルガリア国営テレビ、国家公文書館、ブルガリア国立フィルムアーカイブ、電子政府インフラ執行機関と協力し、文化省および財務省の支援のもと、「ミュージアム・コレクション、図書館、アーカイブのデジタル化プロジェクト」の実施に着手した。これは、国家復興・持続可能性計画の一環である。このプロジェクトのもと、BTAは最新鋭のデジタル化センターを整備し、プラネタリースキャナー4台、フォトアーカイブデジタル化用のフォトスキャナー6台、マイクロフィッシュ専用のビジュアライザー兼スキャナーを導入した。2025年3月時点で、約530万ページあるBTAのニュース速報のうち、262万1453ページがデジタル化され、約180万枚ある写真アーカイブのうち30万8845点のデジタル化が完了している。

また、国家復興・持続可能性計画のもと、BTAは完全新設のアーカイブ保管庫を整備した。この保管庫は、可動式ラックと固定式ラックシステムを備え、アーカイブスペースを最大限に活用できるように設計されており、書類、カタログ、フィルム、カードファイルへの迅速かつ簡単なアクセスが可能になっている。さらに、長期保存に最適な環境管理を維持するため、ブルガリアのアーカイブ標準に準じた精密な空調システムも整備されている。設置されたシステムには、換気機能付き空調室があり、新鮮な空気の供給に加え、温度と湿度を一定に保つことができる。

ブルガリア通信社には「BTAリーディングルーム」という情報センターも設置されている。このリーディングルームは、ジャーナリズム、文化、教育、科学の分野で活動するすべての関係者にBTAのアーカイブへのアクセスを提供している。リーディングルームの入り口には、国立美術アカデミー学長ゲオルギ・ヤンコフ教授によるアートインスタレーション「あなたの視聴者」が設置されている。

THE REAL NEWS

www.bta.bg
Bulgarian News Agency
bta.bg
bta.bg
Bulgarian News Agency
BTAnewsBG
Bulgarian News Agency (BTA)
bta.bg